
波風洋子の活躍と秘密

夏宗なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

波風洋子の活躍と秘密

【Nコード】

N9252K

【作者名】

夏宗なつ

【あらすじ】

なみかぜようこ

波風洋子ホステス暦20年。

彼女には、平凡という言葉では、絶対に語れない秘密があった。この山波市に住むことになった時、4つの家を所有することになってしまったのだが、それを機に、彼女は、4人の人物を演じ分けて生きることを決意した。

小学校5年生と3年生の子どもたちと夫、表向き平凡に暮らしている理想の4人家族。ところが、突然、子どもの通う小学校のPTA会長を引き受けることになってしまった。

そこで、大人の都合が一番の大人たちの姿、そして、大人たちの欲に押しつぶされてそうになっている子どもたちの姿を知る。

子どもたちの戦いは、静かに始まっていく。

心の底に眠っていた彼女の正義感に火が点いた。彼女が救いたいの
は、子どもたち。

P T A 会長 波風洋子のお手並み拝見と行きますよ！

微かな兆番の音に乗せて、店の明かりが一筋。その明かりが孤の広がりを見せたかと思うと、光の海原を渡るように細身のシルエツトが現れた。彼女は、振り返ることなく、静かに扉を閉めた。遠くから、タクシーの空車ランプを確認すると、スッと手を挙げて、車を止め滑るように乗り込んだ。行き先を告げると、仕事からの最初の解放感を確認するようにワンピースの裾を直した。対向車のライトが、疲れた身体を刺激したが、それも心地よかった。

眠りに包まれるより、ずっと前に、いつもタクシーを降りる場所に着いた。スナックは隣町の平田市にあった。そこから山波市西町の西公園脇で車を降りる。短い時間ではあったが、心が休息を取る時間としては、十分な時間であった。

自宅の門が見えたところで、タクシーを降りた。ワンピースの裾を少し持ち上げ、ハイヒールの音がなるべく響かないように、少しつま先に重心を置いて、ゆっくりと門に近づいていく。スナックで仕事をして帰宅した時のお決まりであった。裸電球を逆さにしたような暗い灯りに照らされている片開きの錆びた鉄製の門を静かに開けて中に入る。短く深いスロープを下りきってしまうと、門燈の灯りが届かなくなる。暗闇の中に吸い込まれるようではあったが、手を伸ばせば、そこには玄関の扉があった。鍵を開け中に入る。薄暗い中、土間のような石畳を進んでいくと、左手には、わりと急な木製の古い階段があった。その階段の上には、彼女が衣装の館と命名した家があった。スナックに出勤するために必要な衣装や小物がすべて収められていた。この部屋には、ホステスとしてのキャリアが詰め込まれていて、自分でも高く評価できた。

畳敷きの衣裳部屋の真ん中に置かれたディレクターチェアに腰を下ろす。身に着けていたすべてを急いで落とし、部屋着に着替え、階段を下りる。そして、薄暗い土間に出ると、左へと歩いていく。少し行くと右手には、石がところどころ埋め込まれたスロープがあつて、それを登った突き当たりの白い扉を開ける。そこは、この敷地の南に位置する家の地階であつた。エレベーターで2階へと向かう。目指したのは、ごく当たり前のベッドルーム。一瞬で、浅瀬のない深い眠りに就いた。

午前5時半。目覚ましの助けなくしてはとも起きることなどできない起床である。現実と眠りとの合間を行ったり来たりしながら、ベットから出てダイニングに向かう。家族のために、お弁当と朝食を作るためだつた。そして、家族を送り出し、休むことなく掃除、洗濯の家事をこなす。これが、毎日繰り返される。いわゆる主婦らしい時間である。

スナックホステス、波風洋子の過ごす朝の時間だ。洋子には、夫と二人の子どもがいる。高校を卒業して、すぐにホステスとなつた。それから2回の出産を除いては、休むことなく続けてきた。売れっ子ホステス、20年といったところだ。飛び切りの容姿とは言えないが、人恋しさを感じさせる女性だつた。また、感じさせるだけでなく、本当にそうさせる女性だつた。それが、年齢を重ねても続けられる所以かもしれない。そして、一方では平凡なサラリーマンの男と結婚をし、2人の子どもをもうけ、家庭生活を送っている。洋子は、子どもの頃から主婦に憧れていた。お母さんではなく、主婦に憧れていたのである。洋子の母は、ごくごく一般的な中流家庭の主婦であつた。母親を尊敬していたとか、素敵だとか思ったことはなかつたが、逆に樂をしていそうだと思つたこともない。特にこれといった理由があつたわけでもないのだが、主婦になつた自分が一番素敵な自分の姿としてイメージできたからだつた。

それにしても、家事とは簡単なようで簡単ではない。これで良し！ということもない。常に自分と向き合い、自分と戦うために用意された業のようなものである。洋子は、主婦業では自分との戦いに負けることもしばしばだった。あつさり負けを受け入れてしまう素直な性格は、ホステスとしても時折感じられる要素でもあり、その辺りが男性を人恋しくさせてしまうのかもしれない。

いつもであれば、洋子は家事完了とともに、ベットルームへと戻ってしまうのだが、今日は、そういうわけにはいかなかった。深夜に帰宅し、早朝起きなければならぬ洋子にとって、ここでの睡眠は貴重である。しかし今日はベツトは諦めリビングの大きなソファ―に身体を沈め、半ば強引に仮眠を取ることにした。そこは爽やかな朝の日差しをいっぱい受けながら、それを跳ね返すような瞬きで輝いていた。慣れないせいか、このシュチエーションの中にいる自分の姿に違和感を感じ、何となく可笑しくなったが、眠気には敵わなかった。

心地よい時間がしばらく流れていった。

仮眠にしては少し長かったが、目覚めの感じからは、活力を取り戻したという実感があつた。さあ！いよいよ始動。目覚めのコーヒ―にいくち口を付けて、2階のベットルームの奥にあるクローゼツトへと向かった。洋服を選び、身支度を整えた。そこにいる洋子は、深夜帰宅した時のサテン地のピンクのワンピースに身を包み、濃目のルージュを引いていた洋子ではなかった。控えめなフリル使いのブラウスにチュウリップタイプのスカートをあわせた紺のスーツスタイルだった。全くの別人ではあつたが、このいかにも仕事していませんと感じさせるような、洋子の姿もまた魅力的であつた。

出かける時間である。電気、ガス、戸締りを確認し、玄関へと向かう。今日は、昨夜とは違う南側の玄関からの外出である。洞穴に入っていくような薄暗い西側の玄関とは、あまりにも違いすぎる。光に溢れ清潔感に包まれ、潮風を誘うような南国を連想させる玄関である。靴を履き、立った姿は、スラリとしていて、この空間をさらに眩しくさせるほど、美しかった。

玄関を出て、海からの潮風を吸い込むように大きく深呼吸した。そして、海に向かって行くように、真っ直ぐに歩いた。高い位置に移動した太陽は、朝の日差しほど眩しくはなかった。

洋子が目指したのは、子どもたちが通う小学校だった。ここを訪れるのは、何カ月ぶりのことだろう。子どもたちは、もちろん毎日通っているわけだが、洋子というと、年に数回、運動会、保護者会、個人面談、発表会に顔を出す程度であった。保護者としては最低限のお勤めを果たしていると言ったところである。しかし、今日は、そのいずれでもない。困ったことに、洋子自身が、今日学校に行かなければならない理由を、いまひとつ理解できていないのであった。分かっていることは、洋子が名指しで呼び出されていることと、何か当番のようなものを頼まれるらしいということだけだった。ということであり、あまり気乗りはしていなかったが、子どもたちがお世話になっている学校の人からの電話では、むげに断るわけにもいかない。ただ、気になったのは電話の相手が、学校の先生ではないという点だ。とにかく、深夜の仕事をしている洋子にとって、昼間は活動休止となっていることが多く、学校のことは子どもたちからの土産話を聞くことくらいに関わりしかなかった。そんな洋子には今回の電話の内容は理解できなかつたのである。

通用門から入るのだが、最近の学校は勝手気ままに入れない。洋子の子どもたちが通っているのは公立小学校ではあるが、警備員が常駐している。ある学校で児童・教員が殺傷されるという痛ましい事件が起こって以来、学校の安全、児童の安全について、社会全体が力を注ぐようになったのである。保護者には、名札の着用が義務づけられるようになり、学校に入る時には記名して入るのである。

確かに、弱者の集まる学校の安全を高めるには、当然のことといえよう。ただ、警備員一人というのは、いないことに比べれば格段に安全性を高めてはいるが、じゃあ一人で何ができるのかと考えると疑問も残らなくはない。しかし、今はそんな評論家みたいなことを考えてる場合ではない。

見通しのよい廊下を進み、最初の階段を3階まで上がると、指定された教室があった。まだ少し早かったが、すでに2人の保護者が廊下で待っていた。同じ理由で呼ばれているのかなと思いつながら、軽く会釈をして、距離をおいたまま並ぶように立った。先に来ていた2人も知り合いではなさそうだった。ごく自然に沈黙の時間が流れていた。しばらくして、海原の奥に波が発生したように耳では聞こえない足音を感じた。一呼吸もしないうちに、足音は静かな校舎に共鳴するようになり、音の中から1人の保護者らしい人が近づいて来るのが見えた。彼女は、すでに待っている洋子たちを見て、少しばかりの焦りを見せながら

「ごめんなさい。お待たせしてしまって。中へどうぞ。」

と言って、彼女たちは教室の扉をノックもせず無造作に開け放ち、洋子たちを招き入れた。そして、迷うことなく電灯のスイッチを押し、考える様子もなく、机に手をかけ、島を作るように向かい合わせにしていった。手際が良い。もしかしたら先生・・・と一瞬洋子は思った。それほど彼女たちの振る舞いは板についていた。

「もうすぐ、委員長と会長がいらっしゃいますので、こちらにお掛けになってお待ちください。」

そう言い残すと、彼女たちは部屋を出て行った。

残された洋子たち3人は、島になった机の末席と思われるところを選んで並んで座った。すると、今度は、不揃いな足音が近づいてきた。少なくとも7、8人はいるかと思われる。そして、すべての足音が、洋子たちの待つ教室の前で止まった。

「こんにちは。お待たせしました。」

教室の扉が開くと同時に、その元気のよい、爽やかな声が飛び込んできた。洋子たち3人は立ち上がりながら挨拶を返した。しかし、洋子の声だけは飛びきり小さいものだった。

「こんにちは。」

その爽やかな声は、夜に活動する洋子にとっては馴れない日の光のように、眩しく声にならなかったのである。

扉を閉める音が聞こえた。どうやら、洋子たち呼び出されたメンバーも含め、今日集まるメンバーが全員揃ったようだ。一番はじめに廊下で声をかけてきた人が、その会の始まりを告げるように声を発した。

「こんにちは。皆様、今日はお呼び立てして申し訳ありません。お忙しい中、お越しいただき、ありがとうございます。私は、選挙委員の中村と申します。時間もありませんので、今日、お越しいただいた事情を選挙委員会委員長の鈴木さんからお話いたします。」

その言葉に促されるように、その隣に座っていた女性が話し始めた。

「選挙委員会委員長の鈴木です。どうぞよろしくお願いします。皆様にお越しいただいた理由は、すでにお察しの通りです。」

と言う鈴木という女性の口元からかすかに笑みがこぼれた。

「来年度の役員をお引き受けいただきたいと思っております。今日は、直接お会いして、皆様のお気持ちを確認させていただきたいと思い、お集まりいただきました。」

洋子には、この言葉の意味がまったく理解できなかった。

「ご事情がある場合は、お電話で連絡させていただきました時に、辞退されたと思いますので、今日ここにお越しいただけたということとは、来年度の役員をお引き受けいただいたものと理解しております。本当はこんなこと言っではいけないんですが・・・今日は形式的なものとして、ざっくばらんに進めさせていただきましたと思います。」

鈴木さん・・・選挙委員会・・・役員・・・辞退しない・・・形式的な・・・

洋子は頭の中で、その言葉の意味を、何度も確認をした。やっぱり理解できない。他の2人はというと、何となくうなずきながら話を聞いている。

「委員長、ありがとうございました。皆様、これから一緒にされるわけですから、委員長のお話にもありましたように、気持ちを楽に

して、ご参加ください。」

と中村という進行係が言ったが、洋子は、気持ちを楽にするどころか、今の自分自身の置かれている状況に困惑していた。ただ、このまま進んでいくと、取り返しのつかないことになるということだけは、理解できた。

「それでは、PTA会長の荒井さんからお話を伺います。」

「PTA会長の荒井です。来年度のPTA役員の皆様、よろしくお願ひします。私は4年、PTA会長を務めました。男性ですので、行事があるときくらいしか学校に来ることはありませんでしたし、日常の雑務は、副会長や役員の皆さんがやってくれていたわけですから、本校のPTAの看板程度の役割しか果たしていませんかったと思います。が・・・楽しい4年間を過ごさせていただきました。地元のお店街で店をやっているの、保護者の皆さんがお店に来ていただけるようになり、本当にうれしく思っています。皆さんもやってみれば、必ず良いことがありますから、頑張ってください。」

と言って、右手を顔の前で拝むようにして腰を浮かせ、隣の人を見た。その様子に中村がすかさず

「あつ、会長ありがとうございました。会長はお忙しい中、お越しいただきました。お店がありますので、ここで退席になります。」

洋子は「拍手をもって・・・」と続くのではないかと思ってしまうた。この人の話を聞いて、ますます自分が、何故ここにいるのか分からなくなってきた。忙しいのは、誰も一緒のはずだ。しかも、途中で帰ってしまう人を、何であんなに奉るのか、昼間の世界ではこういうことが常識なのかと、不思議の渦がさらに大きさを増してい

つ
た。

「それでは本題に移ります。PTA会長のお話にもありましたし、もう改めてご説明する必要もないと思いますので、役員候補として選出された皆さんの役職を発表させていただきます。」

洋子は、中村の言葉をただ黙って聞いていた。

「これは、すでに内定投票を済ませた結果ですので、役職の変更は出来ません。」

「あのお・・・」

洋子の口から、思わず声が出てしまった。

「はい。何でしょう。」

進行役の中村が、優しく言葉を返してくれた。洋子は、今しかチャンスはないと、勇気を持って言葉を続けた。

「すみません。私は、小3と小5の子どもがおります波風と申します。実は、私、仕事を持っておりまして、あまり学校へ来たことがありません。今までいろいろとご説明いただいた事情について、ほとんど理解できておりません。」

と洋子は自分と同じように呼び出された2人に目をやりながら続けた。

「皆さんはご理解しているようにお見受けいたしますので、ご迷惑

は重々承知しておりますが、今一度ご説明をしていただく訳にはいかないでしょうか。」

中村は、鈴木の方を見ながら。

「そうですか。・・・委員長、どうしましょうか。」

すると鈴木は、しばらく、洋子を見て、自信ありげに微笑んだ。その顔に、洋子は一瞬身構えた。そして鈴木は言った。

「波風さん、説明は後ほどでよろしいでしょうか。あなたにお話するのは今ではない方が良く感じました。私の判断は確かだと思いますよ。」

洋子には、鈴木言葉が理解できなかった。しかし、それに反論するだけの見識を、洋子は持合せていなかった。洋子は仕方なく。

「分かりました。お話を中断させて申し訳ありませんでした。」

中村はその様子を見届けたかのように

「それでは、皆さんの役職を発表いたします。」

「会計監査 山海 和也 様」

「会計監査 小森 美和 様」

「書記 名九 一恵 様」

「書記 山北 若子 様」

「会計 佐藤 愛様」

「会計 山田 栄子様」

洋子は、いつ自分の名前が呼ばれるのかと、現状が理解できていない頭の中で、何となく考えながら聞いていた。

「副会長 吉川 玲子様」

「副会長 渡道みどり様」

「PTA会長 波風 洋子様」

「PTA会長 なみかぜようこ……。」

洋子には、自分の役職がPTA会長に聞こえた・・・確かに。

「どういふことなの・・・。」

理解できなかった。洋子は思わず立ち上がってしまった。

「あの・・・どういふことなのでしょう。」

洋子は、さっきのオジサンと同じということくらいしか、PTA会長というものに理解がなかった。とても落ち着いて座ってはいられなかった。自分の身にいつたい何が起こっているのか。これからどうなっていくのか。その時、選挙委員会の委員長である鈴木が話し始めた。

「波風さん、お待たせしました。それでは、説明しましょう。」

と、洋子がさつき求めた説明を始めた。

「まず最初に確認しておきますね。波風さんが選出された役職は、PTA会長です。先ほどもお話ししましたように、すでに内定投票も済んでいますので、役職の変更はできません。」

「あの・・・。」

「ちょっと待って。波風さんが一番お聞きになりたいことを、説明しないとならないわね。なぜ、波風さんがPTA会長なのかということ。」

洋子は、いよいよだ！という期待感と、どうしてだろう！という不安感に、胸が押しつぶされるような気分だった。

「私たち、選挙委員会は、役員候補として適任と思われる人を、皆さんに推薦してもらっています。これは、お子さんを通じて、プリントを配布して、保護者の皆さんにご連絡をしています。先月の保護者の時に、クラス毎に投票をもらい、候補者を1名選出してもらいました。そして、クラスによって選出された候補者の人たちについて、今度は委員会内で役職ごとに内定投票をした結果が、皆さん7人というわけです。」

それでも、洋子はなぜ自分がクラスで選出されてしまったのか、理解できなかった。

「クラスで選出を行う際に、ご事情により、どうしてもお引き受けいただけない方は、担任の先生のご判断で、選手対象者から外しています。波風さんは、特に事情があるとは聞いておりませんし、そのような連絡も、先生には伝わっていません。」

洋子は、最近、子どもたちが、学校から帰ってくるプリントをよく読んでいなかった・・・いや！読んでいるつもりだったのだ・・・どこからともなくやってきた、後悔という波に襲われた。

鈴木の説明はまだ続いていた。

「内定した理由についてですが・・・」

洋子は、思わず身を乗り出した。

「波風さんとは、ご挨拶程度ではありますが、お話をしたことがあると、おっしゃる保護者の方がいて、とてもお話が上手で、短い時間だったのに、お話に引き込まれてしまった。とおっしゃっていたことと、委員会のなかでも、学校でお見かけした際に、どこもなく不思議な、そして存在感がある方という委員がいたことが、大きな理由かもしれません。」

鈴木の説明はここで途切れた。洋子は少しだけ上げた腰を元に戻した。期待していただけに、裏切られたような感じがした。確かに学校には、無関心であつたからであろう。ただ、本当に、稀に、学校に來た際に、交わした挨拶程度の会話や、ましてや、自分では普段と変わらずに、歩いていた姿から、PTA会長に選出されてしまうのかと・・・どう自分を納得させれば良いのかと思うと、うなだれるしかなかった。そんな洋子の様子を見て、鈴木がもう一度、話し始めた。

「波風さん、ご納得いただけましたか。できないかもしれませんがよね。波風さんは、PTAの存在自体、意識したことがないんじゃないかしら。そういう私も、実は、選挙委員会の委員長になって、初めてPTAのことを考えたの。だから、責めるつもりで話しているわけではないの。ここに選ばれた7名の皆さんは、体よく面倒な役員を押しつけられたのよ。役員なんて、名ばかりで、誰もやりたいと思っではないの。だから、誰でもいいの引き受けてくれれば、自分以外であれば。」

鈴木の言葉に、その場にいた、何人かは身体を強張らせた。

「ごめんなさい。でも、これがほとんどの保護者が思っていることなの。」

「あつ・・・でも役員になる方には、皆さん感謝しているの。だから、粗末に扱われることはないし、先生たちも、一般の保護者とは別格に扱ってくれるから。」

と、進行係の中村が、フォローするつもりで口を挟んだ。しかし、沈黙が傷ついた7人の心をすべて表していた。

洋子は、鈴木の子葉の言葉を痛感していた。どんな説明より、納得できる理由だったのだ。しかし、その鈴木の子葉が洋子の中の、何かを目覚めさせてしまったのだ。

「私、PTA会長をお引き受けします！」

洋子がPTA会長を引き受けてから、早くも2ヶ月が過ぎていた。その間、どのような状況だったのかといえば、愚痴とも、弱音とも、驚愕とも取れる辛い話で綴るしかない日々だった。今は5月中旬に開催する予定のPTA総会の準備期間である。ここに至るまでに、洋子たち新役員でこなした行事は、いくつあったのだろうか。あの悪夢とも思えるような・・・選挙委員会に招集をかけられ、PTA会長を引き受けた日から始っている。

「私、PTA会長をお引き受けします！」

役員選挙のための臨時総会・新旧役員の引継ぎ・卒業式出席・入学式に出席しPTA会長としての祝辞・新委員の選出・地域への挨拶回り・交通安全旬間の対応・日常的な防犯活動・PTA総会や委員会開催の準備などなど。すべてが初めてのことで、どうやってこなしたんだろうという心境であった。役員同士、面識があるわけではなかっただけに、お互いツーカーという訳にはいかなかったが、誰もが、我儘、自分勝手に出来る状況がなかったくらい、忙しかったのが、幸いしたのかもしれない。また、お互いがまだ、猫を被っているような状況では、相手がどのように考え、行動をとるのか、推し量るだけの情報も得られていなかった。ホステス歴20年の洋子は、他人を分析するのは得意な方であったが、それをするだけの余裕を持ってないくらい、真剣に取り組まなければならぬ2ヶ月間であった。

あの時、なぜ洋子がPTA会長を、引受けたのか。断わることが非常に困難だったことに加え、仮に断れたとしても、そこへたどり着くまでのことを考えると、その煩わしさにうんざりしたのも確か

であつた。しかし、本当は洋子をPTA会長へと駆りたてるものがあつたのだ。

「押しつけられた役職」

負けず嫌いが、今までの洋子の人生のピンチを、救つてくれたといつても過言ではない。そんな洋子にとって、役員への推薦が、自分を信頼し認めてもらったわけではなく「・・・自分以外なら誰でも・・・」という理由だったなんて、どうにも悔しくて、情けなかつたのである。そして、そんな状況の中でも、誰もが笑みを浮かべ、平然と座つていた。それは、多分、自分の心を誤魔化すための笑顔だったのだらう。そう思うと、洋子は悲しかった。子どもたちが主役の学校が、自分が住む、夜の世界のように、心から笑えない世界になつていたなんて・・・。学校は、子どもたち誰もが、平等に学び、健やかに育つていくところであり、そういう子どもたちを支える人たちが、溢れているところであるべきだ。その環境を作っていかなければならないはずの大人たちが、学校を蝕んでいる。

子どもたちを救わなければ！

洋子は、これは神様から自分に降りてきた言葉として受け止めたのであつた。

この2か月半を振り返りながら、洋子はプリントのホチキス止めをしていた。

「会長！・・・会長！！・・・か・い・ちょ・う！」

「はっ はい！」

驚いて返事をした声は、かなり上ずっていた。

「会長は、時々自分の世界ですよね。」

「そうそう。刑事ドラマのボスみたいだね。」

楽しそうにそう言ったのは、会計の山田栄子と書記の名九一恵だった。

「ごめんなさい。気がつかなくて。何か、この2ヶ月半を自分の中で振り返っちゃてた。」

そう、少し恥ずかしそうに、洋子は言った。

「分かります。気持ち！とっても！」

「結構、呼び出された日は衝撃的でしたよね。でも、お引き受けします！って言った会長、潔くって、カッコイイって感じてしたよ。」

と言って、会話に口を挟んできたのは、副会長の渡道みどりだった。

「でも、不思議よね。学校に来てない保護者ってことで押し付けられたのは間違いないはずなのに、波風さんは会長に適任！！こんなに上手くいって良いわけって感じだもん。こんなホチ止めなんて、やっていただくのが申し訳ないわ。」

と渡道は続けて言った。

「そんなこと……。皆さんと一緒にだったから……。本当にそう思っているの。」

洋子は、幸せに似たような感覚を静かに表現した。この2ヶ月半が忙しかったからこそ、みんなが平和に過ごせた一因なのかもしれない。そう洋子は思っていた。プリントの角々を揃えるために、束にして机に何度も軽く落とす音が聞こえていた。長机がまるで楽器のように、その音を部屋の中に響かせていた。

「会長。終わりました。これから、書記さんに1階の配布棚に入れてきてもらいます。今の時間ですと、今日中、遅くとも明日には、子どもたちを通して各家庭に配布となります。」

と、全く文句の付けようのない報告をしたのが、もう一人の副会長の吉川玲子だった。

「ありがとう皆さん。お疲れさまでした。名九さん、山北さん、配布棚までよろしく願います。」

そう言って洋子は、軽く頭を下げた。

「一応、これで解散にしますか。吉川さん、渡道さん。」

この問いに、渡道は即座に答えた。

「私たちは、ここの整理をしてから帰りますので、会長はお先に帰られてください。」

「ありがとう。では、校長先生にお会いしたいと思っていたので、これで失礼させていただくわね。何かあったらメールください。」

「はい。分かりました。」

渡道が答えた。

「それでは、お先に。」

と言って洋子は、部屋を出た。

校長の名前は、金城翔太郎。

ロマンスグレーのオシャレな紳士である。校長にしては、随分レベルの高い風貌のせいかな、保護者である母親には、人気の校長らしい。

洋子は、校長室のドアをノックした。少しの間があってから、ドアが開いた。校長の金城自らのお出迎えだった。

「おー、どうぞ、どうぞ。」

校長は、気持ちよく出迎えてくれた。

「ありがとうございます。突然で失礼かと思いましたが、今日は、役員で作業をしておりましてので、寄らせていただきました。少しお時間をいただけますか。」

少しばかり緊張気味に洋子は尋ねた。

「もちろんです。さあ、どうぞ。」

校長は快く迎えてくれた。

「失礼いたします。」

洋子は、部屋のほとんどを占領している大きな70年代を感じさせるソファーに腰を下ろした。校長も、机の上のノートとボールペン

を取って、両袖のあるソファーに掛けた。

「何か、ありましたか。」

「はい、少しお伺いしたいことがありまして……。私は、今まで学校のこともPTAのこともほとんど何も知らないただの保護者でした。会長をお引き受けするに当たり、自分なりに色々調べたりもしましたし、新学期が始まってからの1カ月半、この学校の様子も見せていただきました。そこで、この学校が、学力的にも、教育環境としても、極めて優良であることがわかりました。しかし、その反面、教員が萎縮しているような場面に遭遇したことが何度かあるのです。オドオドしているというか……。規則的というか……。やる気がないというのとも違うんですよね。私の勘違いでしょうか。」

洋子は、校長の問いに、この2ヶ月半に疑問に感じたことを校長にぶつけてみた。学校が、教育組織の中で、どのように位置付けられているのか、学校を構成している教職員は、どこの所属なのか、学校組織について、PTAって何か、PTAの役割とその機能状況、PTAが抱えている問題、保護者の実態など、自分自身で学べることは学んで新学期に臨んだのである。ところが、この小学校の実態については、尋ねることができなのは、選挙委員の鈴木と中村、一緒に役員になったメンバーくらいしかいなかった。また、尋ねたところで、賛否が分かかれ、というより本当は不満を抱えていて、見解の水準には大きなばらつきがあり、洋子自身の見解としてまとめることのできる客観的な情報は得られなかったのである。そこで、学校施設管理責任者である校長の考えを聞いてみたいと思つての校長室訪問だった。

校長は、少し困ったような顔をしながら。

「会長、鋭い観察眼をお持ちですね。この学校の教職員も児童も保護者も優秀なんです。何が優秀かというと、机の上の勉強が出来るのです。しかし、生活や人生は、机の上にあるものではないんです。ところが、みんなが机の上に置いて、生活も人生も考えようとして無理が生じてしまっています。それが、間違っているということを、私は常に発信しています。私が、この学校に来て、すでに4年目を迎えました。着任した時に比べたら、自分で言うのもなんですが、かなり改善されたと思うのです。例えば、教員も児童も挨拶が自然と交わせるようになりましたし、学校だよりで教員が書く内容にも心が感じられるようになってきました。少しだけ、心のゆとりが生まれてきたと感じています。しかし、ここに来て、なぜ様々な改善策がなかなか効果を表さないのか、分かったような気がするんですよ。」

「と言いますと。保護者ですか。」

「会長、なぜそれを……。」

校長の言葉を遮るように、洋子は続けた。

「この1カ月半、多くの保護者の方と接する機会がありました。その中で、多くの人が口にする気になる言葉があったからです。子どもにとって、学校生活がストレスにならないようにしてほしい。私は、この言葉に、色々な違和感を感じました。多くの保護者は、子どもを取り巻く環境に問題がある時代、不登校、自殺、子どもの起こす犯罪、教職員の起こす犯罪、保護者同士のトラブルへの発展など、悪い方にイメージして、自分の子どもがそのような事態に巻き込まれることがないことを願っているのです。それは、当たり前のことなのですが、問題は、その奥にあります。だから、自由に、楽しく、多少のことは多めに見てもらってという話なのです。学校

は、子どもたちのために、楽しいところであるべきです。でも、学校は学ぶところのはずです。何か、求めているものが間違っているように感じます。」

洋子は、まだまとまりきれていない自分の思いを話した。

「あなたの見立ては間違っていないと思います。」

そういう校長の言葉には、力強さを感じた。さらにこう続けた。

「この学校に関わる多くの大人たちが批判されたり怒られることが苦手です。そうならないコミュニケーションを作り、誰もが得意な土俵で生きようとしています。それが、机の上の勉強の選択に繋がっていると考えています。会長もおっしゃったように、机の上には、生活も、人生もないんです。そのことを、私は伝えたい……。」

洋子は、PTA会長になって、初めての感覚を感じていた。

「校長先生は、PTAという団体について、どのように考えていらっしゃるのでしょうか。お氣遣いなく、率直なご意見を……。」

「私は、今のPTAには、協働の価値を感じてはいません。しかし、これほど活かさない手はないと思う団体もありません。」

「私も、同感です。」

洋子は、それだけ述べると、窓越しに見える校庭を見つめた。洋子が背負ったPTAという団体を生かすも殺すも私次第ということ……。そのことが、鮮明に確認できたのだった。

「校長先生、改革！始めますか……本気ならできますよね。校長先生と私が。」

金城は、洋子の目から、その覚悟を感じ、身体が震えた・・・一瞬迷った。しかし、答えは決まっていた。

「会長、私は本気ですよ。私は、今日から始めるのではなく、もうすでに始めているのですから。」

洋子には、やや意地を張っているようにも感じられたが、気持ちは十分理解できた。

「校長先生、先生のご意思に関わらず、今から一緒にさせていただきます。」

この洋子の返答に、金城は内心ホッとしていた。

「それでは、私はこれで失礼させていただきます。明日からが楽しみにになりました。長期戦ですね。」

洋子はそう言って立ち上がった。

「そうなるだろうね。」

洋子は、金城に軽く会釈をして、部屋を出た。廊下を歩き正面玄関へと向かった。玄関から校庭を覗くと、見覚えのある後ろ姿を発見した。副会長の吉川玲子であった。

洋子は、玄関からしばらく吉川の後ろ姿を見ていた。すると、吉川が振り向き洋子を発見したらしく、軽く手を揚げた。洋子も思わ

ず手を揚げて、吉川の方へ歩み寄って行った。吉川が洋子を迎え入れるかたちとなった。

「会長、校長先生とのお話が終わったのですか。」

「ええ。今終わったところです。」

「そうですか。お疲れ様でした。」

吉川は、校庭に視線を向けた。子どもたちの駆け回る姿を見ているように見えた。洋子は吉川に言葉をかけた。

「吉川さんのお子さんがいるの？」

「いいえ、いませんよ。私が見ているのは、子どもたちじゃありません。」

洋子は、自分の心を見透かされ、あざ笑われているような感覚を覚えた。

「そう、勝手に決め付けてしまったのね。ごめんなさい。」

吉川の言葉は力を増した。

「私が見ていたのは、子どもたちの荷物の置き方です。あまりにも無造作で、物を大切にしているとは思えません。こういうところに問題の根はあるのだと考えています。」

吉川の言葉の意味は、洋子には十分理解出来た。しかし、ついこの間PTAに関わったばかりの洋子には、気の効いた言葉がすぐには

思い浮かばなかった。吉川は、その隙をつくように。

「会長、PTAが抱えている問題は山積していると感じることはありますか。」

それは、追い討ちをかけるような質問だった。

「吉川さん、私も感じていることはあるのですが、具体的な整理はできていません。というのも、まだ多くの実態を把握できていないからです。ただ、言えることは、吉川さんとそう違った方向は向いていないのではないかということです。」

そう答えた洋子は、校長との会話を思い出していた。

「そうですか。それは心強いです。私はPTAの水準が低すぎて、こんなことに時間を費やしていることに無駄を感じています。もっと水準の高い団体でなければ、力を注ぐ意味がありません。会長にもそのご意向があるということですから、期待しています。」

洋子は一瞬考えてから

「あらっ！吉川さん、あなたのその言い方は、傍観者みたいではないかしら。私は意味のあることをやっていると思っと思っています、あなたと。そして役員の皆さんと一緒に……。私も期待しているわ。」

洋子はそう言うのと、優しい笑みを残して玄関の方へ歩き出した。

洋子を見送る吉川は、穏やかと言える表情ではなかった。

洋子は、南の家へと帰った。

いつものように、家族の夕食の支度、お風呂のお湯を張り、明日のお弁当の準備を整えて、仕事に向かうのである。PTA会長を引き受けてからの洋子の生活は、昼も夜も活動的になった。地下道に出て、左手に向かって歩き右手にある階段を上がって西の家へと入る。部屋の中に入ると、迷うことなく虹色が肩から斜めに足元に流れるロングのワンピースを選び、ピンクとパープルを基調とした化粧をして、エナメルの靴と靴で身支度を仕上げた。

洋子は、西の家の玄関に凜とした姿で立ち、瞳の奥から閃光のような輝きを呼び起こし、自分の仕上がりを確認し、玄関の扉を開け、天を仰ぐように流れるスロープを進み、赤みを微かに残した闇に姿を投じて行った。

今日は、店のホールは、必要以上にぎやかだった。この店から山波市の山へ向かうように北へ行くと、芸術家たちが多く住む地域があった。その芸術家たちは、このスナックを愛する人たちなのである。ここを訪れるお客たちは、芸術家たちと芸術を支援するパトロンの多くだ。

今日のスナックは陽気だった。洋子にとって今日のような夜は、余計な気を遣う必要がなく穏やかな心で過ごすことができた。お店での洋子の名は『リヒ』と言った。ホステスとして働くようになってから、ずっとこの名前で通してきた。

「リヒ、君の笑顔は言葉を語るね。」

「そうだね。今日の私たちを温かく包んでくれているのが、嬉しいね。」

「あら、もしかしたら、違いかもしれませんが。心の中はわからないじゃない。」

そい言いながら、洋子はグラスを天を仰ぐようにゆっくり掲げた。すると、お客たちも一斉にグラスを掲げて見せた。神髄に乾杯であった。

最終バスの時間が近づいたのだろう。数名の客が腰を上げ始めた。次第に祝宴は静けさに向かって行った。洋子はすべての客を見送り、自分も帰宅の途に着いた。

タクシーに乗り込むと、急に学校での出来事が思い出された。放課後の校庭で、吉川玲子と交わした会話であった。洋子は、あまりくよくよする性格ではなかった。考えることは、問題を掴み取る感には優れていたために、解決策だった。そう長くはなかった吉川との会話の中に、吉川が洋子を会長として認められないという意味を感じた。

吉川玲子は、国立大学を卒業し、親の奨めで医師である男性とすぐに結婚。しかし、3年前に離婚。現在は、弁理士として知的財産権に関わる仕事をしている。子どもは4年生と5年生の二人。二人とも男の子。母親が心臓が弱く、介護しながらの生活。金銭的には困ってはいないだろうが、決して楽な生活ではなさそうだ。吉川は、毅然として明晰で隙を見せないタイプだった。洋子は、そんな吉川に女性のカッコよさを感じていた。

洋子は高校を卒業して、東京へ行った。今、住んでいる家は、かつ

ては波風一族が住んでいたところだ。洋子は、この一族から逃げ出すように東京へ出た。稼ぐ宛てもないままに。東京は明るく輝いていた。洋子は、そのネオンに吸い込まれるように、夜の街と暮らすようになっていったのだった。

「お客さん、いつものところでいいかな？」

運転手が声をかけてきた。

「えっ、えー。ありがとう。」

洋子はその言葉だけを返した。洋子も、この運転手のタクシーには何年もの間よく乗り合わせていたので、運転手とは顔見知りだったが、親しく話すことは決してしなかった。

西の家に帰宅すると、ロングのワンピースを着替え、化粧をおとしながらも考えていた。吉川のプライドが、洋子を許せないでいることが、とても良く理解できた。何の学歴もないただの主婦に、なぜ仕えなければならぬのか。この1ヶ月半、何事もなく活動しているとは言え、たまたまでしょう。自分一人で、社会と戦っている吉川にとって、名ばかりのPTA役員では、自分自身にとっての価値を見出せないでいるのだろう。しかし、それは間違っている……と洋子は思っていた。吉川が、社会で生き抜いているように、保護者は一人ひとり、様々な立場で社会と向き合っているのである。自身が生きるために、力を注いでいるのである。PTAとは、そんな生きる力が渦めいている生命体なのである。洋子は、吉川ならきつとそのことがわかるだろう、いや、吉川にはわかってもらいたいと思っっているのであった。鏡の中に映る自分の顔に、そのために力を尽くす決意を見ていた。

今日は、隔週で行われる役員会が予定されていた。新学期早々の行事の嵐も過ぎ去って、通例の隔週のペースで開催されるようになって2回目の役員会になる。まだ猫を被っている役員もいるからかもしれないが、これが結構真面目な会議なのである。これには、本校PTAの質の良さを感じる。本来、真面目に取り組む土壌が引き継がれているから、役員が全員新しいメンバーになっても、この雰囲気を作り出せたのだと、洋子は思っていた。会の司会は、これまで洋子が何となく務めていた。というより、司会はいなかったと言った方がよい。

「皆さん揃ったから、そろそろ始めましょうか。」

「はい。そうですね。」

副会長の渡道が答えた。

渡道 みどり

とても上品な雰囲気のお嬢様。女子大卒。子どもが実に多い。上から、高校2年生の女の子、中学3年生の女の子、中学2年生の女の子、小学6年生の男の子、小学4年生の男の子と女の子の双子、小学1年生の女の子、2歳の男の子。なんと少子化と嘆かれているこの時代に8人の母なのだ。

育ちの良さと豊かな暮らしによってだと思われるが、まったく子だくさんというイメージはない。ご主人は、父親の会社の専務。次期社長という話を聞いた。家政婦とシッターを雇っている生活からも、その財力は窺える。とても家庭を大切にするマイホームパパらしい。

彼女自身は、一年前、子宮がんの手術を受け、再発と向かい合わせの生活を送っているそうだが、そんなことを感じさせない穏やかさのある人である。

役員たちは、それぞれ、決まった席に着いた。

「おはようございます。それでは、役員会を始めますね。今日は、少し話をさせていただこうと思うのですが、よろしいですか。」

皆はうなずいた。

しかし、そのうなずき具合は様々であって、洋子に対する思いが様々であることを、言葉はなくても示すものであった。

「ありがとうございます。私は、皆さんもよくご存知の経緯で、会長になりました。正直、この2ヶ月の間の活動は、すべて初めて臨むことばかりでした。決まっていることをこなすのが精一杯……。皆さんと一緒にだったから出来たのだと思います。ここまでの2ヶ月間については、色々と不備もあったと思うので、その反省点や課題については、後ほどお聞かせいただきたいと思っていますのですが、先に、これからのことをお話させていただきます。」

そう言って、洋子は改めて皆の顔を見渡した。

「私自身、実は学校にPTAが必要なのかどうかという疑問がありました。会長になって、学校にPTAは必要だという信念を持って進めることができるだろうか、不安もありました。少なくとも、この学校にPTAが必要である。という結論を得られなかったら、私は会長の資格がないだろうと思いました。その結論がほしいと思っ

て過ごした2ヶ月間でした。」

「それで、必要だという結論は得られたんですか。」

会計の山田栄子が、即座に口を挟んだ。

「ええ、その結論は得られました。というより、自分で、その結論に導きたくなったと言った方が良いかもしれない。この学校には、PTAでなければできないことがあるような気がするの。保護者の皆さんは、其々に色々な力を持っている人たちなのではないか。PTAはその力が集まった集団ではないか。しかし、自己中心的行為が水面下で絡まった藻草のようにはびこっている状況ではないかと感じたの。これを何とかできるのは、学校ではない。PTAではないでしょうか。この点については、校長先生とも話をしました。一致するところが多く、学校とPTAが手を携えて取り組むことができるのではと感じました。そこで、私は、PTAの活動の改革に取り組んで行きたいと思います。まずは、私自身そして役員会として委員の皆さんとの交流を図りたいのです。接してみなければ、本当の願いや想いはわからない……。」

洋子は、自分の想いを素直に伝えた。

「保護者って、色々な人がいるじゃないですかあ。結構、面倒なことになるかもしれませんよ。」

そう返して来たのは、会計の佐藤だった。

佐藤 愛

有名私立大学を卒業。キャリアウーマンとして商社に15年勤務、

結婚を機に退職。夫は同じ商社マンで現在ドイツに単身赴任中。子どもは2年生の男の子が一人。

「それに、PTAってボランティアでしょ。そこまで、やる必要あるのかしら。……というより、私たち自身が抱える生活環境の中で、そこまでできる余力があるとは思えない。」

吉川のこの発言で役員の中に、賛成ではないメンバーがいることが明確になった。

「私には、難しいことはよくわからないんだけど、確かにこれ以上の負担は困るんです。おじいちゃんやおばあちゃん、工場のこともあるし……。」

山北だった。

山北 若子

夫婦揃って大卒。一人っ子。お互いの両親とともに3世帯同居。ご主人の家が山の地域との境界線で工場を経営しているので、家を守るのは若子の両親と若子であった。子どもは2年生の3つ子。

洋子は、それぞれに事情がありそうだと察することができた。発言をしていないメンバーに、意見を求めることにした。

「名九さん、書いていると、なかなか発言できないでしょ。あなたの意見を聞かせてくれますか。」

名九は、慌てた。書記に発言を求められるとは、思っていなかったのである。

「私ですか……。私は、書記ですから、記録する仕事が増えるのかな……。くらいしか頭に浮かびません。すみません。」

そう言つて下を向いていた。

名九 一恵

私大卒。夫は高卒。18歳の時に買った宝くじで1億円を手にしたラッキーガール。そして、これまたラッキーだったのが、出会った年下の彼。今のご主人が高卒とは言え、ビジネスセンスに長けた人で、その1億円を元金に不動産を所有、不動産管理業で成功。決して、金持ちには見えないのだが年商5千万とも1億とも言われている。子どもは大学2年生の女の子、高校3年生の女の子、高校1年生の男の子、小学4年生の女の子。

「そう、書記さんのお仕事は、本当に大変よね。」

洋子は言った。すると、会計の佐藤が一言。

「確かに書記の仕事は大変だと思うけれど、会社では議事録はお金を直接生まないわ。そこから抽出された情報がお金を生むんですよ。」

佐藤は役員の中で、一般社会を知っているのは、自分だけだという自負があつたのだろう。

「そうね。イメージで軽く発言しちゃったわ。佐藤さんのご指摘は現実を知っているからこそできることね。記録されたものから、何を読み取ることができるか、それが大事なのよね。」

洋子は佐藤のプライドを傷つけないコメント、話の本筋を外れないコメントをしたのだった。

「山田さんの意見も聞かせてもらえますか。」

「私は話をすることは大事だと思うんだけど、何を話すのかわからないし、会長がPTAでやらなければならぬと言っていることが、理解できていないと思うんです。ここまでの話で、頭がショートする一歩手前くらいです。もう少し、簡単な話に例えてくれると嬉しいです。」

山田 栄子

夫婦ともに高卒。彼女は、実業団で水泳をやっていた。ご主人は社会人野球。ともにスポーツ万能。現在は専業主婦。夫は電気工事技師。子どもは、6年生の男の子と1年生の女の子。

「ごめんなさい。私の中で妄想が膨らんでしまっていて、筋道立った話ではなかったかもしれない。渡道さんのお話を聞いてから、皆さんのご意見も参考にしながら、もう一度お話をさせていただくわね。渡道さん、お願いします。」

洋子は、最後に渡道に尋ねた。

「私は子どもが大好き。子どもたちのためになることだったら、色

々なことをしてみたいと思ってます。ただ、保護者のいざこざに巻き込まれるのはちょっと……。皆さんウワサ話で、右にも左にも行ってしまう。それに、さっきまで右を向いていても、すぐ左に向きを変えることもできるから、私には怖い存在なんです。だから副会長なんて、困る話だったんです。……あつ、すみません。余計なことを……。なったからには、一生懸命務めようと思っています。役員の皆さんとも、楽しい時間を過ごさせていただいているので。」

渡道は、裕福な家庭に育った割りに堅実で、このように気遣いのできる人だった。

「ありがとう。皆さん、ありがとうございました。皆さんのご意見としては、どちらかというと、保護者と接点を持つことについては、諸手を挙げて賛成というわけではないという理解をしましたが、山田さんから具体的には何をしたいのかという質問がありましたから、そのことについて、一応お話してみます。委員の方たちと話をしたいというのは、まず各委員会の中での実施になりますね。話をしたいというよりは、委員の皆さんが、この学校について、PTAについて、どんなことを思っているのかを聞いてみたいというのが一番です。きつと、色々な意見があるし、要望があるはず。それを知ることが、PTAの活動を、そして、よりよい学校を作ることにつながる第一歩だと思うのです。だから、話することから始めたいと思っています。」

洋子はそう言った。

「会長のおっしゃっていることは、よくわかります。でも、色々な意見が出るに決まっています。要望をどうぞ！なんて言えば、身勝手な意見が出るんです。会長は、これまで学校にあまり来ていらっしやらなかったとおっしゃっていたので、保護者の身勝手さを実感

できていないから、そんな呑気なことが言えるのだと思います。今は、保護者だけではないんです。身勝手なのは。企業においても、社会においても同じことなんです。だから、人と接点を持たないコンビニエンスなシステムの導入が成功の鍵となっているんです。週に1度か2度、顔を合わせる役員で、どうやって、保護者の心を掴む改革を実行できるというのでしょうか。」

吉川だった。

少し苛立ちと反旗を掲げる姿が見えた。しかし、吉川には、洋子の実践したいことがすべて見えていると洋子は感じた。多分、吉川の頭の中では、どれくらいの頻度で、委員会を開催し、一通りやり終えるには、どれくらいの期間を要するか、会の流れや記録の仕方、その活用方法まで、イメージできているに違いなかった。洋子はその吉川の状態が『できる』という確信を持ったのだった。

「吉川さんあなたの言う通りかもしれない。実現は難しいのかもしれないわね。私、今日皆さんの意見を聞かせていただいたので、もう一度考えてみたいと思います。少し時間をいただいてもいいかしら。」

洋子は、無理に推し進めることはしなかった。役員全員が洋子の投げかけに、それぞれの思いでうなずいた。

夏休みのサマースクールの話を少ししておきましょうか。

洋子は、話題を切り換えた。

「吉川さん、この間、副校長先生とお話した内容を報告してもらえますか。」

「わかりました。」

洋子は、委員との懇談をすることは決めていた。役員の意見がどうであれ、やると決めていたし、役員の意見を聞いた今も、その気持ちにかわりはなかった。洋子は、べつに役員に同意を求めたのではなく、役員が、どのような考えなのかを聞きたかっただけなのである。しかし、聞いたからには、そのままにはおけないが、少し時間をかける必要があると判断したのだった。

サマースクールというのは、夏休みに山波町で行われる『山波まつり』に合わせて5日間開催される学校のことである。子どもたちにとっては、日常の学校が学ぶ学校であれば、夏の学校は遊ぶ学校という、非常に楽しい行事である。この時は、町も学校も大騒ぎ。ということ、社会教育団体関係者は大忙しである。つまり、PTAも頼りにされているのであった。ただ、近年この行事に対する保護者の不満が出ているらしいことは、洋子自身も去年のアンケートを閲覧済みだったので、すでに確認していた。役員の会話の中にも、そのアンケート結果が引かかっている発言も出たが、どうやら手をつけなくて、進めようとしている様子が見て取れた。決して、それでいいとは思っていないと思うのだが、委員との懇談の話と同じ

で、そこに手をつけたら大変だという、自己防衛的な反応だと思っていた。

アンケートに書かれていた内容は、確かに身勝手なものも多いのだが、教育意識を感じるものも多数あり、その観点からPTAに対する不満や抗議になっているケースがほとんどだと洋子は分析していた。例えば、次のようなものだ。

子どもたちのためと言っても、子どもを誰かに預けなければ手伝えないような活動には疑問を感じる。

委員や係の活動には、不公平を感じる。結局、やらない人はいつもやらない。お人よしが損をするシステムだ。

サマースクールに参加した後、友だち同士でお祭りに行くのは良いが、無理やり払わせたり、おごつたりということがあった。見逃してはならない問題だと昨年もアンケートに書いた。しかし、改善はみられない。

なぜ、夏休みにまで、PTA活動を行わなくてはならないのか。夏休みなのだから、家庭で自由に時間を使えるようにするべきではないか。

お祭りの時は、商店街や町会なども人手が必要で、PTA活動にまで協力することはできない。日にちをずらして行ってほしい。

PTA会費は、子どもたちのために使うものと聞いているが、お祭りのノボリを出す必要があるのでしょうか。子どもたちのためという理由があるのであれば、説明をしてください。

もちろん、役員や委員を労うコメントや感謝の言葉もたくさんあったが、サマースクールという一つのイベントに寄せられた意見や要望はこれだけではなかった。これだけを見ても、棚上げにすべきではないと感じさせられるものがある。この学校の保護者は、意識が低いわけではないことが読み取れる。それと同時に、悶々としたも

のが溜まっていることも伝わってきた。理由を述べて意見するということとは、衝動的に書けるものではない。すべて、状況を見極め、自分自身の常識を照らし、疑問となったことが書かれている。これを、そのままにしてしまうということは、保護者にとって、PTAの存在は不必要になってしまう。保護者の気持ちを活かされない団体を存在させる意味がどこにあるのだろうか。教職員のためだろうか。

洋子は、このままにはしておけないと感じていた。

その日の夜だった。副会長の吉川から洋子に電話があった。洋子はスナックにいたが、客はいなかったので迷わず通話ボタンを押した。

「会長ですか。今よろしいですか。」

「はい。何かありましたか。」

「実は、先ほど、保護者の佐々木さんというお父様から電話があったんです。お子さんは5年生の男の子なんですが、恐喝をされたというんです。そういう話は学校にしていた方がいいと申し上げたんですが、もう学校には連絡したと。恐喝してきた相手が中学生らしいのです。たまたまその時に、保護者や同級生の子もたちが通りがかったらしいのですが、皆、知らん顔で通り過ぎて行ったらしいです。しかも、保護者の内の一人は、そばに近寄っていうとした子どもに対して「やめなさい！面倒なことになったらどうするの」と言ったそうなんです。その言葉を聞いた佐々木さんのお子さんが、とても傷ついたそうなんです。PTAって何なんだ！こんな実態を会長は分かっているのか！ということで、会長と話をさせろということだったんです。でも、会長はお忙しいので、私が伺いますと言って、私のところで止めておきました。」

「どうもありがとう。大変な思いをさせてしまいましたね。すみませんでした。」

洋子は吉川に、感謝の言葉のみを伝えた。

「いいんです。仕事上慣れてますから。それより、保護者ってこん

な人たちの集まりなんですよ。」

吉川は、昼間の話を思い起こさせるような言い方をした。

「状況はわかりました。対応していただたことに感謝します。それでは。」

「それでは。」吉川は、自分の意見を述べない洋子にもどかしさを感じると同時に、自分が告げ口をしたような不快な気持ちにさせられていた。

洋子は準備の時は終わつたと実感した。PTAの中で何かが動き始めている。何も知らない洋子がPTA会長になつたことで、何かが変わり始めているのだと洋子は確信した。今日は、1時間早く店を帰ることを許してもらつた。東の家と北の家に寄りたかつたからである。

洋子の自宅の敷地には4軒の家が建っている。この4軒に住んでいるのが、すべて同じ住人であることは誰にもわからなかつた。なぜなら、東の家・西の家・南の家・北の家は、地下道で行き来は出来るのだが、地上では完全に独立していたからである。名義はそれぞれ別の名義になっているので、登記簿を見ただけでは、確認することができない。

なぜ、こんな不思議な家が存在するのかという。ここは、もともと洋子の祖父の所有する別荘だったのである。しかし、別荘とは表向きで、実は祖父の愛人たちが住んでいたところなのである。祖父は整形外科医がまだ少なかつた時代、非常に腕のいい整形外科医として、信頼され、かなりの報酬を得ていたようだ。また、祖父は、博愛主義者でもあつた。そのためか、愛人が4人もいたのだった。

祖父は本当に優しく、妻はもちろんのこと、この愛人たちも分け隔てなく愛したのである。彼女たちは、その当時の一般の生活よりはるかに豊かな生活を送ることができた。しかし、彼女たちは浪費を嫌った。彼女たちが住んでいた家を見れば、そのことはよくわかった。皆美しく知性を備えていたのである。そんな彼女たちだからである。隣同士生活をしていても、そういった関係であるとは、誰にも悟られることなく、常識的な近隣として穏やかに過ごしたようである。

祖父は、彼女たちに家を与えた時、家庭を持つことを許した。そして、家庭を持った後は、関係が続けることはなかった。家は祖父の遺言通り、彼女たちの名義のままではあるが、家庭を持つと、そこを出て、別の場所で暮らすようになった。そのため、家の管理は、洋子の祖母から息子へ、そして、洋子に委ねられたのだ。愛人の中で、たった一人家庭を持たなかったのが洋子の祖母だった。祖母には祖父との間に一人の男の子を授かった。その男の子が結婚し生まれたのが、洋子だったのである。両親と洋子が過ごしていたのは、この土地ではなかったが、祖母が亡くなったのとはほぼ時を同じくして、洋子の両親も不慮の事故で亡くなってしまったのである。洋子は、祖父の血を引いた一人の孫であった。その頃洋子は、銀座でホステスをしていたので、この山波市へ来ることには抵抗があったのだ。しかし、ある出会いが、洋子をこの土地へと導いたのであった。

山波市へ来たものの、この4軒の家にどうやって一人で住めばいいのかが、洋子にとっての最初の難題であった。毎日、住処を変えるわけにもいかない。一番得策と思われることは、人に貸すという無難かつ有益なことであった。洋子は、ほぼその方向で考えを進めていた。洋子は4軒のうち一番貸すことが困難であろう古い日本家屋の西の家に、自分の荷物を運び入れたのである。西の家の玄関は、門からの短く深いスロープの先にあり、扉を開けるとそこには、祖母や母から聞いていた地下道があったのだ。大概の物には驚かない洋子ではあったが、その扉を開けた時の驚きは、今までに感じたことのない特殊な刺激であった。地下道があり、その地下道で4軒の家は、本当に行き来ができるようになっていたのである。この家を貸してしまえば、この地下道の存在を知られることになる。そうなれば、祖父が妻や愛人たちを守り、愛したことを、公言しなければならなくなる。彼女たちが、互いを思いやり、誰も恨む気持ちを持たず、美しく人生を繋げていったそれぞれの想いが終わりを迎えてしまう。そんなことはできない。洋子の中で、無性にこの土地や4軒の家への愛情が深まったのである。

洋子はこの4件の家に、4人の自分を住まわせることを決心した。

ある時、スナックのお客たちの話から、この近くに芸術家が多く住む地域があるらしいこと、その芸術家たちが、美術用品を買い取るお店があったら助かるということを耳にした。その一週間後には4軒のうちの1軒の古城のような塔のある北の家を、美術用品を扱う店として開店させた。開店させたとは言え、スナックと両立させなければならぬので、お店は週に2日、12時から16時までしか開いていない店となった。それでも、店はそこそこ繁盛した。それま

で、大きなボードや重たい粘土材など、遠くまで購入しに行っていた彼らにとって、近くにこう言った店ができたのだから、多少の不便があつたとしても、利用しない理由にはならなかつたのである。また、それだけではない。普通の店とは違い、祖父が趣味で集めていた、高価な芸術品などを惜しげもなく装飾品として使っていた。それはまるで、小さな美術館か、骨董屋かという趣であつたのだ。このお店に出るときの洋子は、ベルベットのような重厚感のあるドレスやアンティーク調のアクセサリーで身を整えていた。その姿は、芸術家たちの目を飽きさせることはなかつた。北の家には、静寂な賑わいに溢れる時間が流れていたのである。

山波市の東部には、山波駅がある。行政施設も集まり、利便性の高い地域である。その風景は時代が変わつても、ずっと先進的な印象を与えるエリアに変わりはない。東の家は、それを意識して作られていたことを感じさせた。洋子はこの東の家で、商品企画の仕事を始めた。このガラス張りの建物の中での洋子は、パンツスーツを身にまとつていた。山波市内の企業と仕事をするのではないので、ここを訪れる人は少なかつたため、何をやっている会社か、外見では分かりにくいのである。この仕事は、商品アイディアを売る仕事を中心なので、インターネットを利用したものがほとんどであつた。会社の登記は、洋子の銀座時代の知人の名前で行われていたので、山波市の人たちは、洋子が経営している会社だとは分からなかつた。地上から見た家は、完全に別棟に見え、それぞれの家はまったく統一感のない建物であり、まさか地下道で繋がっているなどとは、誰も想像できなかった。

洋子は、それぞれの仕事に合わせた衣裳と身支度を整える・・・つまり変装をした格好だつた。

波風洋子は、家の数だけ顔がある人物だったのである。

今日は午前中「山波まつり」に関わる団体が集まる会議が、市役所で行われた。各団体の役割分担が告げられた。毎年、変わるものではなく、皆承知のことなので、会議は滞りなく終了した。PTAの役割は、子どもたちの安全対策である。これは、北地区にある山の小学校、南地区にある海の小学校、東地区にある朝日中学校の3校で、それぞれにエリアを分けて受け持つのである。

洋子は、初めて山の小学校の存在を意識した。もちろん、洋子の北の家の美術店には、美術用品を買いに来る子どもたちもいるので、小学校があることは分かっていたのだが、それほど意識したことはなかった。

「海の小学校の会長さんですね。私、山の小学校のPTA会長になったばかりの北肌きたはだです。山波まつりでは、よろしく願いします。」

北肌は、芸術家を思わせる雰囲気であった。

「こちらこそ、よろしく願いいたします。波風と言います。私も、今年会長になったばかりですから、山波まつりもはじめての経験になります。」

洋子もPTA会長として挨拶をした。

「山波まつりは、人がたくさん出ますから、子どもたちの安全を守るのは、本人の自覚が大切ですね。子どもたちに気をつける！って言ってきますよ。」

「そうですね……。」

うちの学校で、そんなことを言ったら、大きな誤解を生んでしまうことは間違いない。自分の身は自分で守る……当たり前のことだし、考え方には賛成するが、海の小学校では、理解をされ難い言葉だと洋子は内心想った。

「今度、山の小学校にいらしてください。うちの学校の子どもたちは、太陽の子みたいな奴らばかり、野山を駆け回ってますよ。」

北肌は胸を張って言った。

「ありがとうございます。うちの学校にもぜひ。それでは、また。」

一礼をして、北肌とは別れた。

洋子は自宅に帰り、大急ぎで夕食の支度をして、主婦波風洋子の拠点である南の家の玄関を飛び出した。午後予定されている役員会に遅刻しそうだったので、とにかく急いだ。午前と午後の両方に予定が入ることは、洋子にとって負担が大きかった。今までであれば、朝、家族を送り出したあと、残った家事を済ませ、のんびりとコーヒーを飲みながら時間を過ごし、東の家で商品企画の仕事をするか、北の家で、美術店で店番をするか、という生活だったのだから当然である。子どもたちが学校から帰宅する頃、南の家に戻り、子どもたちのおやつタイム。短い時間ではあったが、大切な時間を過ごしてから、平田市のスナックへと向かうという日常だった。決して暇な生活ではなく、精一杯の状態でこなしていたのであった。ところが、今年の4月からは、PTA会長としての顔が加わったのである。どうやって自分の生活に加えたらよいのだろうと思っていたが、始まってしまえば、なんとか一日24時間、週168時間の中に納

まっているから不思議である。

様々に巡る想いとともに、潮風に押されるように早足で学校へ向かった。いつもより短い時間で到着した。

夏を迎えようとする風が、正面玄関を吹き抜けていた。

いつもは、中央階段を利用して3階まで行くのだが、今日は見慣れない教室の前を通って、一番遠い階段まで、一階フロアを進んだ。

子どもたちの作品は、梅雨の時期を伝える作品が多かった。テーマがあるのだから、類似する作品が多いのは当然のことだが、その中にも、個々の性格や感情などが表現されている。子どもの頃は、こうして自分の思いを形にしなければならぬ機会があるが、大人になると強制力はほとんどなくなってしまうので、自分の思いを形にすることが少なくなる。苦手なことは避けるようになる。そうやってプライドは高くなっていくのかな……そんなことを考えながら、役員の集まる部屋の前まで歩いた。

すでに、全員が揃っていた。

「遅くなりました。ごめんなさい。」

「いえいえ、会長より早く到着してホッとしている人が何人かいますから、丁度よかったです。その中の一人は私ですけど。」

こうしたジョークは、会計の佐藤愛ならであった。

「それを聞いて、私もホッとしたわ。」

佐藤のおかげで、軽く和んだ雰囲気作り出された。

「それでは、始めましょうか。会長よろしくお願いいたします。」

吉川が言った。

「はい。今日の午前中ですが、区役所で山波まつりの協力団体が集まる会議がありました。山波市の小学校2校、中学校1校のPTAで、子どもたちの安全対策を担当することになりました。これは、担当エリアも含めて、昨年までと同様の役割ということですので、詳細を確認して、対応の内容を整理していきましょう。渡道さん、次回までに、委員会や係の方たちへの連絡やシフトの調整方法など、整理していただけますか。書記さんと一緒にお願いできるとよいかしら。」

「分かりました。」

渡道が言い終わる前に、吉川は話し始めた。

「会長、今、渡道さんに依頼なされたことですが、2週間後の役員会で確認するとなると、その後のスケジュールに影響が出てくると思います。山波まつり実行委員会からは、もう少し早く対応を求められると思うのですが。」

「わかりました。では、どのようなスケジュールですすめたらいいかしら。」

洋子は、吉川に意見を求めた。

「シフトの調整方法まで考えるには、少し時間が必要ですから、役員会を隔週ではなく、山波まつりまでは毎週にするのがよいと思います。あとは、メールで密に連絡を取り合うことが必要ではないかと。」

「皆さんは、毎週役員会を開催しても大丈夫ですか。」

洋子の問いかけに渡道が答えた。

「大丈夫です。各役職ごとには、役員会の他にも学校に來ています。先ほどのやる内容も、1週間いただければできると思いますから。」

「わかりました。では、そのように進めてみましょう。ところで、役員会の運営を、副会長のお二人にお願いしたいのですが、どうですか。お二人についていても、お二人の役割が明確になっていないと、責任の所在がはつきりしない状況を招きます。また、船頭が二人ということにもなりかねません。どのように、役割を明確にしましょうか。」

洋子が言い終わる前に、今度は渡道が話し始めた。

「筆頭副会長と補佐を明確にさせていただけないでしょうか。」

吉川から出てきそうな台詞だが、そう提案したのは渡道だった。

「会長に決めていただきたいと思います。よろしく願いいたします。吉川さん、それでいいですね。」

「私は、特に希望はありません。」

吉川は答えたが、内心は違ったのである。吉川は、自分が渡道の補佐をやることなど、耐えられないと思っていたのだった。しかし、それは大人として、自分のプライドとして、決して言えることではなかったのだ。

「わかりました。では、私から指名させていただきますね。筆頭副会長を吉川さん、補佐を渡道さんをお願いします。」

「了解しました。」

渡道は輝くような笑顔で答えた。

「やっぱり、会長はすごいですね。ねっ、吉川さん。」

「……。」

吉川は、渡道に対しての自分自身の意識の低さを恥ずかしく思った。

「では、よろしくね。皆さんも、よろしくお願いします。」

全員が頷いたことを確認することができた。

それにしても、渡道は、素晴らしい洞察力の持ち主で、自分自身をよくわきまえている。また、立ち回りが実に見事だ。お嬢様が、どこでこんな人格を手にすることができたのかと想着ってしまうほど、圧巻だった。

またしても洋子は、渡道に助けられたのである。

吉川は、筆頭副会長という立場を明確にしてもらえたことで、動き易くなった。山波まつりに関する情報の整理を早速に済ませ、そこから課題の抽出を開始した。

山波まつりは、50年以上続いているお祭りだが、その昔には、揉め事の種だったとも言われている。山波市の山間部には山姥がいて、旅人に宿を提供し、美しく身を飾り、贅沢な食事でもてなすのだが、夜、寝入った旅人を食べてしまうという恐ろしい言い伝えがある。そのことから、海の人たちは、山の人たちを野蛮人扱いしていた。しかし、山の人たちは、山姥が贅沢を喜ぶ人間を、成敗していたから山波市は平和だったのだと信じていて、山姥は守護神なのだと崇め祭ってきたのだった。この山波まつりを、山波市全体のお祭りとして開催することが決定したきっかけは、当時ブラジルとの親交が深かった政治家や有識者の別荘が多くあったことと「山波」を「山波^{んぱ}」と読ませるユニークな発想から来ていた。山姥や守護神と言った崇拜心とは、ほど遠いものとなっていたのである。しかし、山の人たちは「山波^{さんぱ}」だからサンバという発想は悪ふざけが過ぎる。「山波^{さんぱ}」山姥^{さんば}」だと抗議運動を起こした。そのことで、元々あった山波市の海の人たちと山の人たちとの対立が深まったのだった。これが50年以上前のことである。しかし、山の人たちの芸術作品を作り出す力に惚れ込んでいた洋子の祖父は、この抗議運動を沈静化させるために、芸術と文化をキーワードに海の人たちと山の人たちとの連携が「山波まつり」の成功に繋がることを主張したのであった。サンバも山姥も芸術や文化の粋をはめ込んでしまえば、ひと括りにしてしまえる話で、山波まつりは芸術性の高い文化の香りの漂うお祭りとして現在まで行われてきたのである。

それにしても、当時の発想としては、かなり画期的な構築がなされたイベントであったと言える。何十年も後のバブルの時代に活気づいていた行政主体型の町興しに近いものであるからだ。洋子の祖父は、非常に柔軟な発想力を持ち、公平性のある実力者であったことが伺える。女性にモテたのも頷ける。

5日間、一世帯に1基、山波まつりの旗が掲げられる。かつては、祝日に国旗を掲揚する家庭も多かったが、旗はかなり小ぶりだが、イメージとしてはそのような感じかもしれない。

市内の店舗や広報車から、サンバやボサノバなど、陽気な音楽が流れている。

海のエリアでは、ヨットを遊覧船として走らせ、海からブラジルの風を感じようとするかのように、クルージングを楽しむことができる。

山波講習会が、市内の各所で行われている。講習会と言うよりは、^{サンバ}ダンスパーティーのようである。

山のエリアでは、芸術作品の展示即売会が行われる。名のある芸術家の作品も展示される傍ら、芸術家の卵といわれる人たちの作品や、子どもたちの奇想天外な作品も人気で、この種の催しとしては、山波祭りが始めてから、ずっと、かなりの集客実績がある。

幼稚園、保育園、小中学校、大学では、サマースクール期間となっている。各団体ごとに、異なるタイトルを掲げて行われているのだが、>芸術・文化が繋ぐ地球の裏側までの途くというのが、基本テーマとされている。一見大局的なテーマのようだが、教員にとっても、子どもたちにとっても、またPTAにとっても、題材を拾い

やすいらしく、そして、学習要素も、遊びの要素も取り入れ易いことから、バラエティーに富んだ内容で毎年構成されている。ただし、教育関係者に対しては、遊びと学びの区別に、慎重を求められている。

西のエリアに位置する公園では、ブラジルのカフェや市場をイメージしたテントが作られているが、ここは静かな賑わいを大切にしている。いくらおまつり期間だからといっても、騒々しいだけでは居たたまれなくなってしまう。本来、公園は動植物との共存の場であることを重要視すれば、そのような発想になるのも理解できる。

東のエリアは、行政施設が集約されているので、衛星会議が開催される。昔は、衛生会議など考えられないことであつたが、通信技術の発達により、山波市のような小さな市でも行うことができる。それから、衛生会議が定着しているのには、もう一つ大きな要因があつた。都心から近い高級別荘地として、この市と関わりを持つ多くの人たちは、政治家、有識者たちであり、日常的に衛生会議というものを取り入れた仕事のやり方をしていて、特別なことではないということである。つまり、衛星会議の題材には困らないというわけである。

短期間の間に吉川は、山波祭りの概要をほぼ理解することができた。そして、洋子が吉川に求めているであろう本当の宿題に取り掛かうところだった。補佐を買って出た副会長の渡道からのメールが届いた。

《私たちの小学校の子どもたちが、芸術地帯で数多く行われている

子ども工芸教室に通っていること知ってる？あまりよくないウワサを聞いたんだけど。山波祭りにも関係しているかもしれないから、ちよつと気になってメールしました。時間がある時、学校じゃない場所で会えないかと思って…。いかがでしょうか。》

普段は冷静な吉川であったが、渡道からのメールに不思議な興奮と緊張を覚えた。

吉川は正直、噂話というのがあまり好きではなかったが、今回の渡道のメールには、それ以上の何かを感じた。渡道へ会う日時を調整し決定するためのメールを送った。

そのころ、決して気まぐれで商売をしているわけではないのだが、週2回しか開けていない美術店の店番を洋子は務めていた。クラシカルなドレスに身を包み、まるで鹿鳴館を思わせる雰囲気来店全体に漂わせていた。洋子は店のすべてを愛しんでいた。このアナログである時間と空間は、心の息遣いによって生かされていることを実感させてくれた。そこは、人から芸術が生まれたことを示すものばかりだからである。時折、飾り棚の小物を手に取り、作り手の心を探り当てられたような気持ちになることがある。作品を生み出す道具として必要な美術用品は、これらの作品の中から私たち後世の人間に捧げられたと考えていた。これらを作品の中に溶け込むように陳列しているのも、買い物に訪れた客が、同じような気持ちを感じられる時間を提供したかったからである。

週2回しか開店していない店ではあったが、芸術地帯の若い芸術家が、週に一度は必ず訪れる。買出しのようだ。必要なこと意外は言葉を交わすことはないが、彼はメモを手にしながらか、購入しなければならぬものを揃え、ゆっくりと時間を過ごしていく。

「ありがとうございました。」

そして、私のこの言葉で、若い芸術家は店を出て行くのが慣例だった。今日も同じ別れを想像していた。

「山波まつりの時には、芸術地帯へ来ることをお勧めします。」

若い芸術家は言ったのである。

洋子は、彼の言った誘いの言葉が気になったが、いつもと変わらぬ笑顔で言った。

「ありがとう。」

新人芸術家は、その一言だけを残し、ためらわずに店を出て行った。

吉川と渡道は調整がつかず、急なことではあったが、今日会うことになった。

渡道は、仕事をしていないので比較的時間の融通はつくが、8人の子どもの母である。家政婦とシッターがいるとは言え、子どもたちが順番に帰宅する午後とはとても多忙なスケジュールをこなしているのだ。吉川は、自分で事務所を経営している。ある程度、自分の都合でスケジュールが組める立場ではあっても、仕事優先は当然であり、PTAに割ける時間には限りがある。できれば夕方近く、もしくは夜間の方が、好都合なのである。その二人が、会おうというのだから、メリットを感じる方が、歩み寄るしか方法はなさそうだ。結局、話の内容にそれほど期待は持てなかったが、PTAで位置付けられた自分の立場と、担当である山波まつりに関する情報ということ、知っておいて損はないという程度の必然性の薄いものではあるが、それらにメリットを感じることにして、吉川が時間を都合した。

街の多くのレストランは、そろそろランチタイムを迎えようとしている。渡道が指定したレストランは、値段も雰囲気も多少豊かさを感じるところで、吉川には割りとお好みのレストランだった。しかし、

渡道がここを選んだ理由は、吉川の好みを考えただけではなく、料金が高めであるということ、学校の保護者がランチに訪れる確率が低いということだった。PTAの役員は、学校はもちろんのこと、PTAや地域においては、著名人の端くれのようなものである。良いことをして当たり前。ちよつと変わったことをすれば、すぐ話題に取り上げられる。自分が知らなくても、自分のことを知っている人、自分のことを観ている人が想像以上に存在する。特に、話をしている時の顔つきや口ぶりから、状況や物語を設定されてしまうものである。つまり、興味の持てる噂話に生まれ変わってしまう可能性を秘めているのである。ある意味PTAの役員は、警戒心を失ってはならないのである。

レストランには渡道が先に着いていた。こうした心配りが、ただ育ちが良いというのとは違う品格のようなものであった。

レストランのドアベルが小さな音を鳴らした。そして、太陽に浄化された空気を一緒に連れてきたように、前を見て静かに歩み寄る吉川の姿が見えた。渡道は視線を送る。その言葉を含んだ視線を、吉川が受け止めた。

「お待たせして、ごめんなさい。」

言い訳をしないところが、吉川の格好良さに深みを与えていた。

「お忙しいのにごめんなさい。さっそく、本題にしますね。」

渡道は吉川の座るのを待つて、話し始めた。

「実は気になる話を耳にしたの。最初、うちの子どもたちが話していたことなんだけど、それを裏付けるような場面を目撃してしまっ

たものだから。」

「どんなことかしら。」

吉川は、さほど興味なさげに渡道の次の言葉を導いた。

「この山波市には『こども銀行』があるらしいの。」

《こども銀行》があるらしいの。

渡道の顔は真剣であつた。

「その銀行は、経営も預金者もすべて子どもたちらしいの。もちろん、お金も私たちが使っているものと同じらしいんだけど、単位だけが違うみたい。細かいことはよく分からないんだけど。ここでお金を借りることは結構難しいみたいで、借りられても返済ができなくなってしまう子もいて、いわゆる取立てにあっている子どももいるようなの。」

吉川は渡道の言葉をただ黙って聞いていた。

「ちょっと前に、子どもたちが話してるのを小耳に挟んで、優しく追求してみたら、こんな話だったの。そしたら、偶然にも翌日、太鼓橋の下で、数人の中学生と小学生が集まっているのを目撃したの。何だろうと思つて、橋の上に行つて、下の様子を窺っていたら、「もう少し、待つてください。お願いします。」「わかった。でも、遅くなれば、たくさんの人に迷惑をかける。それに、祭りも近いんだ。わかつてるよな。遊んではかりいらないでやれよ。」と言つていたのが、聞こえちゃつて。子どもたちの話と結びついちゃつて。よく分からないことも多いんだけど、もし、《こども銀行》の存在が本当だとしたら、ちょっと見過ごすわけにもいかないような気がする。」

ここまで聞いてから吉川が口を開いた。

「そうね……。やれよって、何をやるのかしら……。祭りが近いって……。」

「……。」

渡道は説明できる言葉が見つからなかった。

「とにかく調べる必要がありそうね。ただ、これは、まだ公にするのは止めましょう。方法を間違えると、この街の多くの子どもたちに悪影響を与えるかもしれないから。」

吉川は冷静であった。

「会長には、どうしましょう……。」

渡道は少し不安げには言った。

「あなたも、会長に話せるような確信がないから、こんなところで私に話をしたんでしょ。もう少し、私たち二人で情報を集めてからにしましょう。」

吉川の提案に渡道も同感だった。吉川は内心では、食事などしている気分ではなかったが、そういうわけにもいかないことは十分わかっていた。そんな、吉川の心中を渡道が感じていないはずはなかった。

二人は、他愛もない話をしながら昼食をともにした。

その夜、吉川と渡道が問題を抱えたとは知らない洋子は、いつもの

ようにスナックにいた。

ジャズの旋律が、現実を切り取ってくれている時間の中にいたが、とても落ち着かない気持ちで過ごしていた。美術用品店で、新人芸術家からの誘いが気になっていたのである。

「山波まつりの時には、芸術地帯へ来ることをお勧めします。」

意味深であつた。しかし、なぜ……。彼はどの洋子に見ることを薦めたというのだろうか。普通に考えれば当然、美術店の洋子を誘つたに決まっている。しかし、芸術家は鋭い感性を持っている。もしも、あの新人芸術家が洋子の秘密を見破っていたとしたら……。もしかしたら、企画会社の洋子ではないか。スナックで働く洋子ではないか。まさかではあるが、PTA会長の洋子ではないか……。と。洋子は、ずいぶん長い間、そんなことを考えていた。

そこへ一人の男が入って来た。見慣れない客であつた。男はゆつくりとカウンターに手を掛け椅子に座つた。そして、迷うことなくズヴロツカをロックで注文した。お酒には強いという印象を持たせられた。物静かな雰囲気、洋子より少しと歳が上だろうか。洋子は、男には顎が動くか動かないかの挨拶をただけで、自分からは言葉をかけなかった。常連ではない客が一人店を訪れカウンターに座り、迷わず酒を注文するというのは、大概嫌なことがあつた時である。こういう客に対しては、求めらる必要がない限り、洋子は言葉をかけないことにしていた。もし、会話を求めたいのであれば、行き着けの店で他愛もない会話を楽しむか、騒ぐかすればいいのである。自分を知っている人には、見せたくない、あるいは語りたくはない何かを抱えているから、このスナックに来たのだらうと思ったので。

ジャズの音も、店の床を這うように静かに流れていた。洋子と男は、お互いを見ることもなく、言葉を交わすわけでもなかったが、この音に身体を浮かせられるような心地よさをお互い味わっているような気がしていた。

「あのさー、子どもって、いつから親の手を離れるようになるんだろうねー。」

ちょっと意外だった。男から最初に聞く言葉が子どものことだったとは。想像で判断するのは失礼なことではあるが、とても家庭を想うようなタイプには見えない。仕事と称して海外旅行にも行きそうな、そんなプレイボーイがまだ止められないといったタイプだったからである。

「お子さん、おいくつですか？」

「中学2年と小学5年、歳は何歳なんだろう……両方男だよ。」

「難しい年齢に入った感じですね。」

「あなたもお子さんがいるんですか。」

「さあー、あなたに見えているのが私のすべてなの。」

「失礼、私が知る必要のないことだったね。」

「お子さん、いつかお父さんに心を開いてくれるんじゃないかしら。」

洋子は、男から子どもを想う真剣な気持ちを感じて、そう言った。

「ありがとう。でも、子どもたちとは、そんな量れる距離感じゃないんだ。まったく見えないところにいるんだ。……私がいけなかったんだ。家庭のことを妻に任せていたからね。」

男は口元に少しだけ笑みを作って言った。

「他の女性に現を貫かしていたわけでも、賭け事に熱中していたわけでもないんでしょう？仕事を持っていれば仕方のないことなんじゃないかしら……」

洋子は、ごく当たり障りのない言葉を返した。

「私もそう思っていたんだよ。世の男性たちと一緒にさ。」

洋子は自分の答えが、あまりにも世間一般的な答えだったことに、男が失望しているように感じた。

「伺ってもいいかしら？あなたの心に……ズヴロツカの配達を忘れてたわ。」

「歓迎するよ……ズヴロツカを注文していたこともすっかり忘れていた。頼むよ。」

二人の耳には、グラスの中のロックアイスの響きに続いて、ズヴロツカのとりみが氷を包むように注ぎ込まれる音を聴いていた。

洋子の言葉が、二人を音の世界から引き戻した。

「あなたは、家庭に目を向けていなかったわけではなく、奥さんを

見ていなかったのではない？」

「……そうなんだ。気がついたら、妻は妻でなくなっていた。気がついた時には、パパとママでしかなくなってしまうていた。にも関わらず……子どもの話題には興味を示さなかったんだ。だからと言って、今、妻との間が危機的状況ではないんだよ。」

「そう……でも、気がついたのだから、遅くはないということよね。あなたの誠意を伝えることが出来れば」

「そうなんだ。子どもの悩みを一緒に解決して行けばいいんだ。ところが、子どものことなんか考えたこともないのだから、妙案なんてないんだよ。妻の期待に応えられていない自分がそこにいるだけなんだ。」

「奥さんの考えを聞いてあげるだけでもいいんじゃないかしら……今までより進歩よ。」

「でも、それじゃ……。」

「わからないこと、知らないこと、できるわけないじゃないありませんか。まずは、学ぶことから……家庭に就職した新人なんですよ？あなたが会社で部下に言ってること、そのまんまの台詞で、面白みのないスナックの女にはガツカリかしら。」

「情けない……もう少しカッコイイ案がほしかったな。……」

男は少し照れたように言葉を続けた。

「この間ちよつとした問題があつて。子どもの通う小学校のPTA

会長に抗議しようと思ったんだけど、連絡先が分からなかったから副会長に電話をしたんだ。そしたら、会長は忙しいから要件を聞くと言われて、大人気もなく怒鳴ってしまったんだよ。副会長が女性だったこと、生意気にもビジネスレベルの対応だったこと、PTA会長ごときが忙しいとは何様だということ……そんなことで会ったこともない女性を怒鳴ってしまったって、何とも自分自身が情けなくて全部、私の男としての下らないプライドだったと反省している。これを捨てないと、家庭でも上手いかないってことだね。」

洋子は、動揺した。動揺を隠しながら。

「そうかも……しれない。」

この男は保護者。確か吉川は佐々木さんと言っていた。

この男が佐々木。

PTA会長と洋子が同一人物であることに気がつかないのは当たり前のことであつた。PTA会長が保護者の前に出るのは、秋に行われる運動会が最初だからである。洋子の姿を観たことがあるのは、今は、入学式に出席していた1年生の保護者、地域の有識者、委員である保護者程度のはずだからである。それに、たとえ洋子を知っていたとしても、目の前でホステスとして働いているリヒと同一人物とは想像も出来ないだろう。

「今日は、このへんにしておこうかな。」

佐々木であろう男は、澄んだ眼を洋子に向けた。

洋子は、恐喝事件のことを佐々木から聞きたかった。しかし、今は

無理であることは洋子でなくても理解できるであらう。

「また、よかつたら……。」

洋子は、「いらして」とは続かなかつた。謙虚な気持ちからではない。「いらして」ほしい気持ちと、保護者という事実に対する防衛力が働いたせいであつた。

「ああ……。」

男は嬉しそうに、そう言つて店を出て行つた。

このところ、日差しが高くなってきた。山波まつりに近づいているということだった。副会長の吉川は、山波まつりの準備に忙しかった。一週間をかけて、海の小学校が担当する安全パトロールを行う経路を確認して回っていたのだった。当日は人出があるのだから、状況はまったく違うのだが、何事にも完璧を目指す吉川にとっては、至極当たり前の行動であった。当日行われるイベントの内容も、PTAが担当する安全計画には大きな影響があるのだが、それは今まで山波まつりの運営に参加した経験のない吉川には、イメージすることすら難しかった。また、今年度の役員にも経験者がいないのは、誰かに助けを求めたとしても、計画の信用性を高めることは難しかった。吉川の考えとしては、まとめた計画案を山波まつり運営委員会にPTA会長から提案してもらい、関係者の方々に修正を求めるというものだった。

たいこ橋に差し掛かった。

「ここかあ 確かに人目につかないし、恐喝可能なところではありそう。」

「しかし、銀行ねえ どうやって調べればいいのかしらね。子どもたちに尋問するわけにもいかないし……子どもの言うことだし……」

「恐喝ってことは、お金を取り立てているってことよね。だとすれば、銀行と言うよりは、金融業よ。脅し方と金利額によつては、悪徳金融業になっちゃうわよ。本当だったら、大変なことになるかもしれない……。」

たいこ橋の上から、川下への流れを見つめ、吉川は一人考えていた。

「吉川さん」

名九一恵であった。子どもと一緒に自転車を押しながら、こちらに向かってくるのが見えた。

「あら 名九さん、どこへいくの？お子さん？こんにちは。」

吉川は子どもに目を向けながら言った。

「ほら、ご挨拶！」

名九は、恥ずかしがっている子どもに挨拶をするように促した。挨拶した側からすると、この場面で挨拶が返ってこなくても、さほど気になるものでもないが、親としては見過ごせないのである。こういうことが、親の都合なのだ。他人のことだとよく分かるのに自分もいつも同じことをしているのだった。

「急いでいるんじゃないの？どうぞいらして。」

吉川は子どもに微笑みかけ、挨拶が返ってくるのは待たずに言った。

名九は子どもが挨拶をしなかったことに、少し腹を立てていたが。

「これから、芸術地帯へ。子どもが工作教室に通っているの。」

「工作教室？楽しそうね。そんなのがあるのね。知らなかったわ。」

吉川の返答に名九は続けて言った。

「芸術地帯は、プロの芸術家が昔から活動しているところなんだけど、子どもたち といっても中学生も高校生も大学生もいるから、キッズではないんだけど、5年くらい前からやってるのよ。芸術家を目指していない大人は立ち入り禁止。たとえ親でも。まあ、見れば口を出したくなるし、手を出したくなるからいいんだけど。まあ居場所がわかってるから安心だし。」

「そう、ちょっと興味がそえられるわね。」

「でしょ。この時間に、この橋を北に向かって自転車を走らせる親子のほとんどが工作教室よ。」

そう言われて、気がついたのだが、次から次に吉川たちの横を自転車に乗る親子が通り過ぎていく。この街にこんな光景があったなんて……。

「吉川さんのお子さんも興味があれば。それじゃまた。今この子たち、忙しいみたいなの。山波まつりで作品を出さなきゃならないんですって。山波まつりの時は中に入れるのよ。」

「じゃあ。ウチの子は芸術とは縁遠そうなので。気をつけてね。いつてらっしゃい。」

吉川は名九と別れてからも、たいこ橋に足を止めたままだった。自転車を走らせる親子の数は少なくなったが、まだ時折通る。いつまで続くだろうか。20分ほどが経過していたのだが、自分の子ども のことも気になり始めたので、ようやく帰宅する気になった。名九

は山波まつりには、中に入れると言っていた。その時は芸術地帯を覗きたいという強い興味が吉川に沸いていた。なぜだか。

渡道と話してから今日まで、未だにPTA会長に報告できることは何もなかった。

吉川には気がかりなことが、もう一つあった。渡道だけではなく、保護者の佐々木からも恐喝という言葉を聴いたことだった。偶然：こんな小さな街の中で：まったく関連性がなく：恐喝が行われているのだろうか。同じ少年たちによって、行われていると考える方が無難だ。そうなのであれば、根は深くはないだろう。集中的に対応に当たることを考えればよいのだ。吉川は佐々木に対して『ウチの子可愛さを主張する保護者』という扱いで電話の応対をしてしまったので、自分から連絡をすることには気が重かった。しかし、佐々木に確認してみることを考えていた。

夕食を早々に済ませ、午後9時になるのを待った。父親の帰宅時間としては、早い時間帯かもしれないが、奥さんとの面識がないPTA副会長としては、常識的な時間であるだろうという理由で、電話をする時間を選択した。

「もしもし、佐々木さんのお宅でしょうか。私、海の小学校PTA副会長の吉川と申します。夜分に申し訳ございませんが、ご主人様はご在宅でしょうか。」

「はい、お待ちください。」

佐々木にに取り次ぐ奥さんの声が、子機を持ちながら移動する動きに合わせて聞こえていた。

「トーマス、女の人から電話。」

不信心を持っていることは否めなかった。

佐々木に子機が渡された。

「はい、お電話代わりました。」

「海の小学校PTA副会長の吉川です。先日、お電話をいただきました。」

「わかっています。」

佐々木は少し冷たさを感じるような口調で答えた。

「実は、先日伺った内容を、もう少し詳しくお聞かせいただきたくて、お電話をいたしました。」

吉川も務めて事務的に話した。

「ああ あの話は私の勘違いだったんですよ。こちらから、連絡しなければとっていたところです。お騒がせしてすみませんでした。」

吉川は佐々木の言葉に少し驚きながら

「勘違いって、どういうことですか？」

「うちの子が恐喝されたというのは、息子の嘘だったんですよ。お恥ずかしい話です。」

佐々木は少し恥ずかしげな口調で話した。

「実は他からも同じような報告があるんです。本当に被害はなかったんですか？息子さんはまた脅され口止めされたということはないでしょうか。」

吉川は佐々木の言葉に違和感を感じていた。

「私も、息子とは随分話をしました。そのようなことはないと思います。もう、この話はこれでおしまいにしてくださいませるか。私も親バカを恥じているので…勘弁していただけないでしょうか。」

「すみません。そんなつもりでは……。わかりました。でも、よかったですね。息子さん。また、何かあったらご連絡ください。では、失礼します。」

吉川は、仕事の感とも言うべきだろうか、佐々木が嘘をついていると確信していたのだった。それは、何一つ、PTAを批判する言葉がなかったからであった。人は大抵、自分のプライドを傷つけられ、恥をかいたりした場合、自分を擁護する言い訳を試みたり、相手を批判してみたりするものである。

もし、今回のことが、子どもの嘘であったとしても、他にも同様の報告があると知れば、今後の対応について、何か物を申したくなっても不思議ではないはずだ。この間の電話とは大違い。あっさりしすぎていた。とは言え、すべては吉川の推測の域を出ないわけで、佐々木からの情報を期待していた吉川にとっては、振り出しに戻されたかたちであった。吉川は、子どもの寝顔に引き付けられる心地よさを感じることができないままベッドに身を沈めた。

渡道もまた、山波まつりの人員計画についての説明書をまとめるために、書記の名九と山北とともに忙しい日々を送っていたのだった。サマースクール実施についても、様々な講座を運営するためには、

協力してくれる保護者の数も相当数必要だった。しかし、なんといつても一番の課題は、他校とも協力して行わなければならない安全対策に関わる人数とそのシフトである。どんな方法で、担当時間をどの程度に設定するかによって、計画は大きく変わってくる。渡道は、理論的に物事が考えることはあまり得意ではなかった。どうしても情が介入してくるタイプであった。書記の名九と山北は、自分で何かを発想するというよりは、決められたことを正確にこなす優秀な人材。この3人の組み合わせに足りないものは、前に進む力である。とは言え、渡道が事実上のリーダーとして、まとめなければならない。

そんな渡道が、今回どうしても改善したいことがあった。昨年まで、山波まつりが終了した後のアンケートに必ず書かれていること。それはパトロール当番中、子どもたちを預かってほしいというものだった。シッターや家政婦がいる暮らしではあっても、8人の子どもを持つ親である渡道には、分かりすぎるほど分かる悩みであった。これは、当番に当たる保護者の無理な言い分として処理するものではなく、子どもたちの安全を考えれば、絶対に改善しなければならぬ問題であるという確信を持っていた。そこで、渡道は、名九と山北に、自分の考えていることを打ち明けていた。

「渡道さん、この前聞いた話で、当番の人の子どもたちを預かるようにするっていう話なんだけど、そうするためには大変ですよね。」

山北が言った。

山北の言葉に続けるように名九も。

「私も考えていたんだけど、好意で預かってあげたとしても、怪我や事故があった場合は、PTAの責任になってしまうんですね。」

P T Aとしての負担が大きいと思うんですよ。」

渡道は答えなかった。

「渡道さんの気持ちは分かるんですよ。ねえ。」

「実現できれば、いいと思うし。」

渡道の中でまだ迷いがあった。二人の言うことは正しい。私たちがどれくらいのリスクを負ってできるものなのだろうか、不安だった。しかし、協力してくれる保護者のことを考えれば、何とかしなければならぬと思うってしまうのだ。

「預かれるためには、どんな方法が考えられるのかしらね。保護者同士で見るとのこと以外に何かいい方法があればね」。無料で。」

山北は少し前向きなことを言った。

渡道はその言葉にすぐに反応した。

「調べてみる。どうやって調べたらいいかわからないけど。」

名九が、その渡道の様子を見て。

「副校長先生に聞いてみるのはどうかしら？どんな考えの先生かわからないけど。」

「それはちょっと難しいわ。会長に相談なく副校長にコンタクトを取るとするのは、ちょっと……。」

渡道の答えに山北が。

「わかった。私の親たちにちょっと情報をもらってみる。色々街のことや学校のことなんかやってるのよ。ボランティアで。」

面倒なことを抱えてしまったことを少しばかり後悔しながらも言葉にした。

「ありがとう。嬉しい。」

渡道は何の根拠もなかったが、何となく上手くいきそうな気がしていた。この3人の信頼が、ほんの少しだけ強まった瞬間でもあった。

ここのところ、東の家に着く時間が少し遅く、そして短くなっていた。南の家のエレベーターで地階に下りてスロープを歩き地下道に出る。右へ少し歩くとそこには、コンクリート打ちっぱなしの階段がある。蛍光等の青白い光に照らされた階段は、まるで実験棟へと招かれているような気持ちにさせられる。これが東の家の秘密の玄関への階段だ。

洋子はこのオフィスに着くと、まずパソコンを立ち上げメールをチェックし雑務の処理を済ませる。それで、午前中は終わってしまうことも少なくない。洋子は、自分の商品アイデアの多くを実用新案登録している。そのために、それに対する問い合わせが多く来る。しかし、それが採用されビジネスベースに話が進んでいくことは、そう多くはないのである。これが実用新案登録の現実といってよい。登録できたからと言っても商品化されるためには、まず、生産リスクをシェアする話がほとんどである。アイデアを売る方法もないわけではないが、かなり低価格なのが現実である。洋子は商品化されるものが少なくても、丁寧に仕事を進めていける相手としか仕事をするつもりがなかった。アイデアというのは、知的財産権といわれるように、人間から生み出された知恵である。人間の身体能力が力タチになったものである。これを大切に扱わずして、商品を愛することなどできるはずがないという持論もあつた。とは言え、そのビジネスパートナーとなるべき相手を探すためには、それだけの誠意を相手に示さなければ見つかるものではない。これまでに、取引が成立した相手は5社。いずれも、洋子の商品アイデアを買ってくれた企業である。その5社とはパッケージ部門の開発コーディネーターとしてお付き合いするようになっていた。

今日は、そのうちの2社に対して、改善案を提出しなければならなかった。あと2時間でこの仕事を片付け、南の家に帰り、子どもたちを迎えて、一緒におやつを食べて、子どもたちを塾と習い事送り出し、夕食の支度を整えてから出かけたいという計画だ。シンブルで清潔感の広がるオフィスには、時折、車の寄せては過ぎる音が聞こえてはいたが、その空間からは静寂が流れている。洋子の集中力も高まっていった。

「リヒ。僕たちのリーダーの作品がネット上で1億円の値が付いたんだ。すごいだろう。今日は祝杯！よろしく！」

扉を元氣よく開けて入ってきたのは、芸術地帯の常連客だった。仲間からはニイサンと呼ばれている男だった。このスナックに通うようになってから5年は経つのではないだろうか。年齢も分からないが、30代後半であることは予測がついた。

「それは楽しい夜になりそうね。そんな大切な御祝の場所を選んでいただいて光栄なことだね。」

洋子は答えた。

「場所を選んだんじゃないよ。リヒを選んだんだよ。」

その男は恥ずかしがる素振りもなく堂々と返した。洋子も恥ずかしがることもなく笑顔を返した。続いて、4〜5人の客が入ってきた。

「よーさん、リヒに了解済みだ。」

「リヒ、ありがとう。今夜はちょっと賑やかになりそうだ。許せ！」

よーさんは言った。

「承知してるわ。」

洋子は、よーさんの後ろに続いて入ってきた若者たちに目が止まった。なんと、美術洋品店に買出しにくる新人芸術家がいる。冷静になれば、当たり前のことなのだが、洋子には身を偽って生きているような後ろめたさが驚かせたのだった。しかし、新人芸術家は洋子が美術洋品店の店主と同一人物であることには気づいていない様子である。

「改。注文係命名、よろしくな。」

「了解！」

新人芸術家は「カイ」と呼ばれていることがわかった。それにしても芸術地帯には、実力主義の秩序があるようだ。今回1億円の値をつけたという作品を描いた人物とは、どのような人なのだろう。きっと色々な意味で、キーパーソンであることは間違いなさそうだ。日頃、洋子は客のプライベートや話題には興味を持つことはなかったが、今日は興味が静かに増幅していくのであった。それもすべては、新人芸術家「カイ」のあの言葉である。

「山波まつりの時には、芸術地帯へ来ることをお勧めします。」

どうということなのか。その糸口が掴めるかもしれないという、少なからずの期待があったのだ。

「最近ネットが盛り上がっちゃってますね。まあ、僕らみたいな新人には、まったく影響のない話ですけど、情けないことに。なっ、

カイ？」

そう言ったのはカイと同じ新人芸術家らしい。次のカイの答えによつて、その男の名前が「ツツチ」というらしいことがわかった。

「ツツチ。お前には次は……とか、いつかは……とか、野心とかないの？」

「俺は、お前とは違うんだよ！才能には嫌われているみたいだからな。」

「ツツチ。でもお前の作品は、子供たちにはダントツで人気だ。金にはならんが……。それはお前ならではの才能だよ。」

「与野さん、からかわないくださいよ！金がない子どもたちに支持されても、俺の生活の危機的状況は改善されないんですから。」

「色々な意味で新人芸術家の君たちに、我々は期待してるよ。」

このにいさんの言葉でこの話は一段落した。

その時だった。ゆつくりと扉が開いた。ハンティング帽を深く被った男が一人で入ってきた。

洋子が「いらっしやい。」と言葉を発する必要もなく、その男性は仲間の歓迎を受けた。

男はそれでもゆっくりと静かな動きを崩すことなく席に着いた。芸術家たちの輪は、この男を中心に変わっていった。すかさず、にいさんが話し始めた。

「山さん、お疲れ様です。どうぞ、どうぞ。先ずは一杯。乾杯は、山さんのお言葉の後で。」

よーさんが男の手にするグラスにビールを注いだ。その男は。

「ありがとう。」

そう言つて、グラスの中のビールを一気に飲み干した。拍手が沸いた。まるでその筋の方々の集まりのようだと洋子は思ってしまった。男は次の挨拶に備えて、深く被っていたハンティング帽を取った。洋子は本当に驚いた。なんと！その男は山肌だったのである。そう山波まつりの運営委員会が終わった時、洋子に「よろしく」と声をかけてきた、山の小学校PTA会長の山肌なのだ。まさか！だった。しかし、初めて会った時の山肌とは、とても同じ人物とは思えないほど印象が違っている。この間の印象は、子どもたちと一緒に何でも楽しもうとする、にぎやかで楽しいPTA会長というイメージだったが、今、洋子の目の前で仲間と一緒に酒でノドを鳴らしている山肌は、子どもとの関わりなど想像することができない、影を落とした表情の中に見える閃光が鋭く、孤独な感じなのである。洋子にしてみれば、自分だつて似たようなもので、人のことをどうこう言える立場ではなかったが、この驚きは洋子に色々な想像を抱かせて

しまうものだった。と同時に、やはり洋子自身のことを山肌が気づくのではないだろうかという不安に駆られた。

「リヒ、山ちゃんを紹介するよ。この人が、このスナックに初めて来たというのは信じられないことなだけどさ、どうやら初めてなんだとさ。でも、我々芸術家のオヤブンだ！こっち来て！」

にいさんが手招きをした。洋子は内心穏やかではなかったが、14年間洋子の秘密を見抜けた人間はいないという自信が洋子の振る舞いを乱すことはなかった。

「はい、光栄だわ。」

そう言っ彼らのテーブルに近づいていった。

「リヒと言います。お越しいただいて嬉しいわ。あなたのお祝いと伺っています。おめでとうございます。」

「山肌と言います。よろしく願います。いつもは静かなスナックなんでしょ。すいませんね。」

「いいえ、ここはいつでもお客様の好みのお好みのおスナックですから。」

そう言っ戻ろうとする洋子に向っ山肌は立ち上がり。

「子どもたちの作品に、価値を感じますか。」

唐突に質問であっ。洋子は斜めに向けた身体をもう一度山肌に向けた。それは、山肌と真正面で向き合っ瞬間であっ。洋子の目は逃げなかつた。山肌を見つめ。

「子どもたちの作品は、認めるところに価値が生まれます。私が認めるところに……。」

そう答えた。山肌は一言。

「ありがとう。」

そう言つて山肌は洋子への視線を収めて椅子に腰を下ろした。

洋子は何も答えることなくカウンターへと戻っていった。どんな意図があつたのだろう……。山肌の質問は洋子を悩ませた。その時、洋子の背中に視線を送るものがあることに洋子は気づいていた。そして、それがカイであることも。

しかし、洋子は振り向くことも、その視線の意味も察することができなかつた。

今日は学校公開日

梅雨に入り、やっとPTAにも落ち着きが出てき始めた。しかし1学期の締めくくりにはもう少しある。それに夏休みに入れば、山波まつりが待っている。考えれば決して落ち着いている場合ではなかったが、それでも色々なことを複合的に考えられる余裕はあった。洋子は、会計の佐藤と山田。書記の名九と山北のチームを送り出し、吉川と渡道とともにPTA室を出た。そして、すでに打ち合わせした通り、3人は5年生の教室へと向かった。

毎年海の学校では、父の日の前後の土曜日に学校公開日を設定していた。昔なら迷うことなく「父親参観日」と言ったのかもしれないが、家庭環境を考える上で、生徒・児童への差別や偏見などを引き起こすような言葉は用いない配慮が窺える。学校公開は保護者だけではなく、地域の人たちや入学を希望する人たちが学校の様子を見学することができる。情報公開制度の施行によって導入された行事である。また、最近では学校公開日と抱き合わせにして、防犯対策の授業の一環として義務化されているセイフティー教室や国や地方行政の事業予算枠の中で実施する、研究事業の発表が組み込まれている場合も多い。これは、学校で行わなければならない事業が多く、授業時間数を確保し年間予定の中に収めるための苦肉の策と言える。つまり、今の学校が子どもたちの健全育成を目的として行わなければならないことは、限界を超えていると判断することもできる例でもあるのだ。

そんな中、海の学校PTAとしての支援はやはり行うわけであるが、もしかしたら少し珍しい支援方法かもしれない。海の学校の校長「

金城翔太郎」は以前からPTAの存在意義を模索していた。使いにくい学校の駒としてのPTAは必要ないと思っていた。ましてや、教職員自身がPTAの会員であるという意識もない実態であって、教職員と保護者の協働による社会教育団体などという位置づけにできるものではないという憤りも感じていたのだった。

洋子はPTA会長になって、校長の金城と時々話す中で、まったく同意見であることをお互いに確認することができた。金城は非常に紳士的な人物であって、洋子の前任者の批判など一度もしたことがないが、PTAの存在意義についてなど、語れる相手ではなかったであろうということは、前PTA会長とは一度しか顔を合わせたことのない洋子にも容易に想像できた。金城にとっても、洋子にとっても、お互いの出会いから「改革！」の第一歩を踏み出させたのである。

今年度、洋子に金城から与えられたPTAの支援は、PTAとして学校公開日进行评估する報告を提示してほしいというものだった。PTA会長だけでも不足、役員だけでも、委員だけでも不足、保護者一人ひとりの評価を求めたいという課題だった。学校評価ならやっているし、アンケートだって当然やっている。どこが、珍しいというのだろうかとの疑問の声が聞こえてきそうであるが「違うのである。学校評価と言うのは学校自らが「評価をお願いします」という姿勢で、評価基準を掲げて評価を求めるものである。また、アンケートは、記名、無記名、項目立てはあるのかもしれないが、一人ひとりが感じたことを思うままに書くものなのである。しかし、評価する保護者の意識における格差を認識し読み取れる評価ではないのである。これは評価の信用性としては、非常に低いものであり、粗悪に扱われても仕方のない内容であって当然である。校長の金城は、これを何とかしたいという課題を持ち出したのである。そこで洋子は、先日行われた役員会で次のような提案を含め、協議事項として

提出したのだった。

協議提案の内容

学校公開や研究発表において、PTAがその開催趣旨を理解し、評価基準のねらいを認知した上で、一定水準を保った評価を行う。そのためにはPTA役員会からの独自の発信を行う。

PTA会員に対して、評価基準と目的を事前周知する。（プリントによる）

評価シートはPTAが作成したものを使用する。（代表委員会と役員会で作成する。）

評価の集計はPTAで行い、報告書としてまとめPTA会員に対する報告を行った後、児童に対しても報告をする。

行政が学校に指示を出している評価は、すべての状況について評価することを求めているが、洋子が考えた提案は、事前に焦点を当てるべき課題をいくつかに擇って設定し、その点を中心に参観し評価するというものだ。もちろん課題の設定については、保護者の気になる点と学校が必要としている評価点を踏まえての設定になる。あまり時間はなかったが、スケジュール的には十分進められるものであった。また、吉川と佐藤には、仕事のノウハウを生かせる取り組みであることは自他ともに認めるところであり、役員会としても躊躇する必要はないと判断が出来たので、実施に踏み切った。というわけで、役員は3チームに別れ、授業参観を行うことになったのである。一人で参観しないのは、より客観性の高い評価を求めたからであった。

1時間目、洋子たちは5年1組を参観した。吉川の子どものいるクラスだった。

相変わらず、廊下では保護者のおしゃべりが小声とは言え盛んに行

われていたが、前回までと大きく違い、多数の保護者が特に父親は、評価シートとペンを手に持っていることだった。そして教室の中では、ペンの持ち方が筆記できる持ち方になっている保護者が多いことだった。何か気がついたことがあったら書こうという気持ちの表れのはずだと洋子は感じた。

5年生と言えば、恐喝事件のウワサを耳にした学年である。子どもたちは、全員が授業の体勢になっているかという、決してそうではない。後ろから友だちにチョツカイを出している子どももいれば、のけ反ってつまらなさ、先生に対する反抗心を表している子どももいる。そうかと思えば、ぼんやりと外に目をやる子どももいる。この年齢の難しさが、何となくではあるが伝わってきた。しかし、傍目にまだこんなにも分かり易い子どもたちの間で『恐喝』……バレンないようにやり続ける知恵があるというのであるうか。洋子は、そんなことを考えながら子どもたちの様子を見ていたのだが、隣りに並ぶ吉川も、その隣りの渡道も、真剣な眼差しを向けていた。参観中である。お互いに声をかけることはなかった。

今回の学校公開では、3つの点について評価することにした。

- 1つ目と2つ目、児童、教職員、保護者について記す。
- 1つ目は 改めなければならぬと感じた態度。
- 2つ目は よかったと感じた態度。
- 3つ目は 教室の環境はどうだったか。

学習指導に対する評価がない評価シートである。非常に水準の低い内容に思われるかもしれないが、洋子は自信を持っていた。そもそも学習指導については、教員は専門家である。授業の組み立てや時間の配分、テクニクといったことについての評価を保護者がしたとしても、教員はそれを真摯に受け止めることは難しいであろう。

う。また保護者も、自信を持った評価を示すことは難しいであろう。ことは想像できた。しかし、保護者には保護者の目線がある。その目線こそ、適正な評価を導き出すためには必要不可欠なもののはずである。そして学校にとっても、適正な評価でなければ、必要ではないはずであると洋子は思ったのである。それにもう一つの大きな理由があつた。それは、保護者から提出されたシートの内容を集計し、得られた結果から、有効な情報を抽出しなければ評価を実施した意味がないということだ。教育の専門知識のないものが多く集まるPTAにおいて、学習指導についての評価を確定できる判断などできるはずがない。無理に結果を導くことはできないこともないが、それは説得力のない評価でしかない。それであるならば、保護者の多くが、自分の目で、耳で、感じたままを書くことを評価として表すべきだと考えたのである。つまり、誰もが感ずることができ「よかった」「悪かった」を少しだけ具体化して「誰のことについて、何がどうだったのか」ということに集中して参観してもらうことだったのである。このような評価基準であれば、教育に関する専門知識の少ない役員や委員が集計を行っても、何が大切で、何が不必要な情報かの判断もつきやすく、総評としての成果も高まり、今後の課題も見えてくるはずだと洋子は考えたのである。

それから洋子たちは、5年2組、6年1組、6年2組の順に授業を1時間ずつ参観した。4クラスの参観を終えて給食の時間となった。3チームに別れ参観を行っていた役員全員がPTA室に集合した。教室でも廊下でも私語を慎んでいた我慢は、まず大きな溜め息で終止符を打たれるのであろう。

「とりあえず、終了。」

「結構、疲れるね。」

「こんなに真剣に見たの、始めてかも。」

「……だね。」

と口々に言葉を発した。

洋子は

「皆さん、とりあえず午前中お疲れ様でした。食事に行きましょうか？」

「会長、あまり時間ないですよ。何か買ってきますよ。」

会計の佐藤が言った。

「あつ、私も一緒にいくわ。」

「ありがとう。じゃあ、お任せする。」

洋子はそう答え、評価シートとは別に自分でメモを取ってきたノートを開き、補足を加え始めたところへ、山北がマグカップに入ったコーヒーを差し出した。

「会長は、日頃お忙しそうですね。」

「どうして？皆さんだって忙しいでしょ。おんなじよ。」

「だって、会長とは学校以外で、一度もお会いしたことないですよ。普段、街をふらふら散歩したり、スーパーに買い物したりする時間もないんだろうなって思ってた……あまり無理しないでください」

いね。」

山北はにこやかに微笑んだ。まったく、悪気はなさそうだったが、洋子は少し緊張したのだった。

「大丈夫よ。ありがとう。ただ、外に出ないで家でダラダラしている時間が多くて、皆さんと活動時間帯が少しズレてる感じかも。」

そう言って洋子は席を立つと、窓際へと足を進め、窓を少し開けて外を眺めた。3階ということもあって流れ込む風は、30 に届くうとする風を押しつけるような爽やかさで、洋子の下へと流れてきて、とても気持ちよかった。

一瞬、視界の右下に数人の子どもたちが集まっているのが確認できた。校舎と体育館の間で何をしているのだろう……3階からは距離があり、会話は聞こえるはずもないが、その表情からは楽しさは伝わってこなかった。どうやら4対2の関係らしい。喧嘩？は始まりそうでもなかった。2人は拝むように手を合わせて、頭を時々下げている。謝っているようだ。4人の中の1人が軽く手を揚げたのを合図に、4人はまとまって去っていった。残った2人も、すぐに校舎の中へと戻っていった。

洋子は恐喝……ではなかったけれど……PTA室を出て、2人の戻った方向に歩き出した。階段を1階折り返したところで、彼らが2階の廊下に進んでいくのが見えた。洋子は急いで彼らの姿を追った。すると二人は5年2組の教室へと入っていった。洋子の上の子どもと同じクラスであった。しばらく2人の様子を廊下からかうじて見える場所で見えていたのだが、これといっておかしいところはない。その場を立ち去ろうと思った時だった。

「今日は二人とも工作教室行く？ねえ、今日いつしよに行かない？」

一人の女の子が声をかけた。

2人が「いいよ」と答えたのかどうかは聞こえてこなかったが、2人が工作教室に通っているということがわかった。廊下に長居は禁物と察し、すぐさまPTA室に戻ることにした。洋子の子どもと同じクラスといっても、さっきの2人の名前は分からなかった。昨年まで、最低限の保護者のお勤めしか果たしていなかったこともあり、子どもたちの顔と名前はよく分からなかった。

P T A室に戻ると、佐藤と山田がお昼の買出しから戻ったところだった。それぞれ、お弁当代の支払いをしていたので、洋子もお財布から小銭を数えて支払った。そして雑談をしながら食事を取った。

みんなが箸を置き始めるのを待ってだったのか、吉川が真面目に洋子に語りかけたのだった。

「会長、子どもたちが自分たちで銀行を経営することができると思っていますか。」

「総合学習の一貫で行われるような模擬会社みたいなもののかしら？」

「そういうことじゃなくて、親の知らないところで、子どもたちだけで、内緒で……。」

「さあ、どうかしら？でも、今の子どもたちは私たちが想像している以上に、色々な情報を持っているし、柔軟に活用できるわけだから、出来ないこともないんじゃないかしら。」

どうしてそんなことを聞くのかと、質問を続けたところであった洋子だが、その言葉を発することによって、子どもたちが大人たちに内緒の世界を持っているという仮説を立て物事を考えるキツカケを与えてしまいそう……それは避けたかった。

「そうですね。私たち大人の想像できないようなことをやるのが子どもですからね。そのうち、本当の子ども銀行とかできるかもしれないですね。」

吉川が誤魔化した。洋子にもその誤魔化しが見抜かれていることはわかっていたが、お互い、ここところはこれで納めておくのがよいと思っていたのである。

昼食を済ませた後、役員たちは午後には自分の子どもたちの参観に向かった。洋子は6時間目の参観を終えて校長室へと向かった。校長の金城は、副校長の約束はるかとは打ち合わせ中だったが、快く迎え入れてくれた。副校長の約束とも久しぶりであった。約束はエリートらしい。女性にして最短で副校長になったのだ。きつちりとした仕事ぶりには安心感が持てた。副校長と言うポジションからも、厳しさを持って対応しなければならぬことも多く、ちょっと損な役回りも担っているが、教育に対する純粋さは人一倍であった。

「会長さん、美味しいお茶があるんですよ。せっかくだから、校長先生のお相手をしながら召し上がってください。」

約束は笑顔で洋子に言った。

「ありがとうございます。では、副校長先生も一緒に。」

「いいえ、私は書類が山積みになっていると思いますから、お茶を入れたら失礼させていただきます。その方がありがたいんですよ。」

約束は冗談交じりに答えたが、本音も含まれていることは十分理解できた。学校の運営雑務の大半は、副校長を経由する仕組みだ。約束が背を向け、急須にお湯を注ぎ始めた時、校長室の扉をノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ。」

校長が答えた。

「失礼します。」

そう言つてドアを開けたのは山肌だった。

「校長先生、お久しぶりです。学校公開見せてもらいました。あつ、会長さんもいらしたんですね。ちょうどよかったかな。」

山肌は人懐っこい笑顔で言った。

洋子は、軽く頭を下げた。

「お忙しいのにありがとうございます。さあ、どうぞ、どうぞ。今日はどんなお話が始まるんですか。」

「実は、こちらの学校にもお話があったと思いますが、模擬会社の体験授業についてです。ご存知でしょうか。芸術地帯で行おうとしている話。うちの小学校と、こちらの小学校と東の中学校合同で実施するという話です。」

「2、3年前から、その話は出ていますが、具体的な話は進んでいないと認識していました。本当なんですか？」

金城は尋ねた。

「今度、芸術地帯に教育委員会の調査が入るらしいという噂を聞きました。いよいよ事業計画が具体化されるのではないかと推察しています。あくまで、私の想像ですが。この事業計画は、まとまる感

が強いです。」

山肌は答えた。

「この事業計画がまとまるということは、子どもたちが利用されるということですね。」

洋子のこの言葉に、山肌と金城の瞳に閃光が光った。語らずして、阻止しなければならぬという合意が得られた瞬間であった。

「なぜ、大人がカタチを作らなければならないんでしょう。」

山肌は憤りを示した。

「昔、東京にいるころ、広告代理店に勤める方から、こんな話を聞いたことがあります。博覧会っていうのはね、箱を作らなければ、企業がお金を出さないんだ。囲われた箱があるから、灯りが必要になる、灯りが必要だから電気が必要になる。電気を引いて灯りをつけるから、何かができるようになる。箱を作るとお金が回り始める仕掛けなんだ。でも、どうだろう。もし、何もない敷地があったら、そこに雑草が生えたら、きつとその使い方は、そこを使いたいと思う人が考えるんだ。そして、気がつけば、一番必要とされる場所になるはずなんだ。……と。」

洋子は、話さずにはいらなかった。

海の学校の学校公開が行われていることは、取り立てて芸術地帯には影響しなかった。芸術地帯では、改^{かい}が山波まつりの運営方法を自分なりに詰めていた。しかし、山波まつりを目前にして、発見してしまった子ども銀行と独自のネット・なんでもお絵かき の存在をどう扱うべきなのか困惑していたのだった。

改は芸術地帯でのネットの管理を任されていた。様々な情報を得るためにも、また芸術家たちの活動や作品をPRするためにも、改が「これは！」と思う人たちとは、相互リンクの関係を積極的に持つようにしていた。1ヶ月半ほど前、サイトの検索していたところ、子どもが絵を書いてあげるというビジネスサイトに行き当たったのだ。そして面白い発想だと思い、相互リンクの申し入れをしOKをもらった。それ以降、時々はこのサイトをのぞくようにしていた。ある時、シュレッダーの横に処理し忘れたと思われる絵の下書きがあった。ぼんやりとはあったが、なんとなく見覚えのありそうなタッチだった。内心、絵のタッチで見覚えがあると想像させる奴…もしかたら、大きくなって大物芸術家になるかもな。負けられないねー。と、余裕を見せられない自分を少し情けなく感じ、つい笑みがこぼれてしまった。ところがしばらくして、その下書きの絵にそっくりな絵を、なんでもお絵かきサイトで発見したのだった。改はこのサイトの運営方法に初めて興味を抱いた。そこにはこう書かれていた。

絵が得意じゃない人、お手伝いします。
例えば、

お礼状に絵を添えなければならない

おじいちゃん、おばあちゃんへのカードをかかなければならない
お別れする先生にメッセージカードを書かなければならない
卒業なんだけど、プロフィール帳を書かなければならない

夏休みの宿題

おかあさんに無理やり書かされる絵

など、私たちが代わりに描いてあげます。

描いてほしい人は、次の方法で申し込んでください。

でも、その前に、私たちと約束してください。

絶対に、内緒！

作品の下に書いてあるポイント数で購入することができます。

1．まず、作品を選びます。

2．決まったら、ポイントを購入してください。

3．1ポイント＝1円で換算した金額をこども銀行に振り込んで
ください。振込が確認できたら、購入手続き完了のメールを送信し
ます。

4．このメールが届いた後、作品の購入が可能になります。

5．購入手順に従って、購入してください。

？名前

？連絡先

？受け渡し方法（選択）手渡し・郵送

郵送の場合は、住所を忘れずに！

？注文内容

作品番号

種類（選択）カード・画用紙・その他
サイズ（選択）

？入りたいメッセージ（選択）

自分で書く ここに書いてください。

あるものから選ぶ（選択）

？特別注文

事前に会える人だけ注文できます。

？何か伝えておきたいことがあれば書いてください。

改はとりあえず、こども銀行へ送金するため、近くのハーバー銀行へと急いだ。行く道すがら、本当にこども銀行なる口座が存在するのかという疑問が頭を離れなかった。銀行に着いて、ATMの指示に従い操作を始めた。送金先の情報を入力すると、確かに子ども銀行の文字を確認することができた。しかし名称は『株式会社 子ども銀行』だった。それは普通の銀行ではなく株式会社だったのだ。改は手続きをしとりあえず送金して、急ぎ芸術地帯へと戻った。メールの受信画面を確認すると、すでにポイント購入手続き完了のメールが届いていた。

ポイントのご購入ありがとうございました。

2000ポイントで購入できる作品をご紹介します。気に入ったものがあれば、作品を買い物カゴに入れて、購入手順に従って、購入してください。残ったポイントは、次回の購入に使うことができます。

改は500ポイントの暑中見舞いのカードを購入した。それは、普通にネット通販会社のそれとまったく同じシステムであった。まさか、これを本当に名前の通り、子どもたちが運営しているのか。改はにはわかには信じられなかった。もしそうだとしたら、子どものネット社会への適応力は、大人の想像をはるかに超えたものであると改はあらためて思った。子どもたちの作品といえば、芸術地帯のホームページ上で公開し、希望者には販売をしていた。しかし改は反対だったのだ。芸術と言うのは、売ることを目的としているわけで

はない、表現することなんだ、その分別もついていない子どもたち
に、芸術は売るものだという環境を与えてはならないような気がし
ていたからである。心配していたことは少し違った力タチではあ
ったが、いや、改の心配をはるかに超える大きさの現実が目の前に
突きつけられたのだ。改は、大人が導いてしまった大事件に頭を抱
えたまま動けなくなってしまっていた。

昨日の学校公開で学校に縛られた一日を過ごした役員の面々は、今日は主婦として、仕事人としての積み残しをこなさなければならぬ日となった。吉川にはそれ以外に母の介護があった。

今日は訪問介護の日。日々の介護のほとんどを一人でしている吉川には、少しだけ心が休まる時間であった。今日は、週に一度のお風呂の日。吉川本人がお風呂に入るわけでもないのに、何となく湯上りの爽快感を想像してしまい、気持ち朝から軽かった。しかし、吉川には一つ気がかりなことがあった。それは保護者の佐々木のことだった。絶対に何かを隠している。そう確信していた。それが何なのか、佐々木から聞きださなければならぬが、電話では無理だろう。しかし、保護者とは言え、男性である以上、二人で会うことは難しい。かと言って、奥さんもご一緒と言う訳にもいかない。そんなことを考えつつ吉川は訪問ヘルパーの到着を待っていた。

午前11時。時間通りに玄関のチャイムが鳴った。急ぎドアを開けた。今日は入浴以外にリハビリもあったことを思い出した。訪れた3人の中にトレーニングウェアの男性を発見して、吉川は思い出したのであった。

「失礼します。」

そう言つて、吉川の横を通り抜ける時、その男性の首から下がる名札が目に入った。「佐々木トーマス」…保護者の佐々木さん…電話した時、奥さんが「トーマス、女の人から電話。」と言っていた。間違いない。こんなことがあるのだろうか。これこそ飛んで何とか…ということなのか。

母のお風呂の準備をし、浴槽まで連れて行くところまでは佐々木も忙しかったが、お風呂に入っている間は待機だった。この時間を無駄にしてはならないと吉川は、失敗することなどないという自信を潜ませて作戦に出た。

「おばあちゃんのことと弁護士事務所の仕事が忙しくて、子どもたちのことがほつたらかしになってしまつて、やんなっちゃうわ。子どもたち、そのうち好き勝手にしそうで、ちょっと心配だわ。」

吉川は佐々木に話しかけた。

「私だつて、そうですよ。子どもが何をしているか、まったく把握できていなかったんですから。しかも、分かったところで、何も手立てが見つからず、どう解決したらいいのかもわからないで日々過ごしているんですから。」

少し困った笑みを浮かべながら佐々木が言った。

吉川はこの機会を逃さなかった。

「何か、あつたんですか？」

「あつ、いや、愚痴ですよ。すみません。」

佐々木は自分の発言を封じてしまった。

「ごめんなさい。余計なことを……」

そう言った吉川の言葉のあと3秒ほどの沈黙が続いた。

「吉川さんは、弁護士とおっしゃいましたね。」

「はい、個人事務所をやっています。」

すると佐々木が。

「例えばの話ですが、中学2年の子どもが恐喝をするとうなるんでしょうね。」

そうと言って吉川の顔を見た。

吉川は弁護士として答えた。

「その度合いや内容によって大きく異なります。一概には、どうなるかというのは決められません。ただ、親がその事実を認知していたり、隠蔽工作をしたりすれば、親も罪を問われます。もし、お知り合いの話であるとしたら、疑いがあつた時点で、解決する姿勢を持って対応に臨むことをお勧めしたほうがよいと思います。」

「そつ、そうですよね。いやー、お察しの通り、友人の子どもの話なんですよ。今のようなアドバイスしてやったほうがいいですね。」

佐々木が少しうろたえた。その姿に吉川は。

「そうですね。」

静かに答えた。

母の入浴も終わり、佐々木は母のリハビリを行った。

帰り際、吉川は思い切って、声をかけた。

「佐々木さん、海の学校のPTA副会長の吉川です。保護者の佐々木さんですよね。」

佐々木は一瞬手を止めたが、返事はしなかった。

「近いうち、私の事務所にお越しいただけませんか。佐々木さんのご自宅に伺うより、その方がよろしいですよ。お待ちしております。」

吉川は名刺を差し出しながら言った。

佐々木は黙ってそれを受け取った。

夏の日差しがまぶしかった午前中、洋子は家事に忙しかった。なるべく、毎日やることを棚上げしない主義を貫いているのだが、やはり後回しにしていたものが、時間が経つにつれ気になり見えてくる。なかなか、家事は楽をさせてくれないものである。それでも昼食を終えて、リビングからバルコニーに出ると、青く広がる海からの潮風を感じながら、ゆったりとした気持ちで過ごす時間を持つことができた。ここところ、あまり得られなかった主婦の特権とでもいうべき時間に満足感を得ていた。

子どもたちが、学校から帰宅し塾へと出かけるのを見届けて、スナックへの出勤の準備のため、南の家の戸締りをして、エレベーターで地下へと降り、いつもの通り地下道を渡り西の家へと向かった。夏が近づいても、この地下道だけはヒンヤリとしている。洋子は、この地下道を通る時、この地下道を行き来した祖父の姿を想像することがあった。それはまた、祖父への疑問を呼び起こすことにもなった。祖父が後にした家では、一人の女が淋しさを感じ、向かう女の家では、喜びを感じ祖父を待つ。それとも、女たちは、何時来るかわからない祖父を待ち続けていたのだろうか。祖父は、この地下道に降りてから、どの家に向かうかと決めたのだろうか。母は祖父は立派な優しい人だったと言いつつ、最後まで、本当にそう思っていたのだろうか。洋子はそんな母から生まれた自分の存在の悲しさから、祖父への憎しみを抱いているのかもしれないと思った。だが、今はその祖父の残した家をこうして守っている。洋子はすでに、この4つの家を使い分け、洋子という人間を分身させ実態を隠して生活をしている。

最近、洋子はスナックへ出る支度に、ひと手間かけることにした。

右目の下にホクロを作ることにしたのだ。始めてから、すでに2週間くらい経つ。少しずつ、濃く、大きくしている。洋子はPTA会長になって以来、この地域の人たちとの接点生まれ易くなったと実感していた。特にスナックの客には、どこかで繋がってしまうような人が多かった。いくら、分らないという自信があっても、やはり、それを確信に変えるものではなかった。だから、少しは今までのリヒとは違うリヒへと変わろうと思ったのだ。ホクロならば、皮膚の老化や日焼けによって、作られるものであるから、疑われ難いであろうと考えたのだった。

もう少しで、山波まつり……である。子どもたちの恐喝事件と、新人芸術家カイの気になる一言、その真相に近づきたいという気持ちにも、焦りが加わっていた。そして、もう一つ、気になることがあった。それは、吉川の言っていたことである。「子ども銀行」。吉川は、その話を途中から誤魔化した。しかし、洋子は思っていた。吉川が洋子に対し、根拠もなく質問するはずがない。何か情報を掴もうと動いていることが想像できていたのだった。

洋子は唇に最後の紅をひと引きすると、椅子から立ち上がって、自分の姿を姿見に映し、スナックで働くホステスの顔へと自分を変身させていった。

やがて、西の玄関へと向かった細い靴音は、暮れかかる陽の中へと消えていった。

スナックに着くと、すでに客がいた。いつもより洋子の出勤が遅れたわけではなかった。

芸術地帯のにいさん、よーさん、カイであつた。すでに3人は議論の真つ最中で、洋子の姿を確認しても誰も声をかけてはこなかった。

「カイ、それは関わつてはいけないことだ。」

にいさんだった。

「俺も、そう思つよ……。」

同調したのは、よーさんだった。

「なぜですか？なぜ、関わらないでいられるんですか？芸術地帯で活動する子どもたちに起きている問題ですよ。」

カイの口調は少し厳しかった。

「カイ、子どもたちが自立したいと飛び立とうとしていることだろ。子どもたちの自立の機会を奪つてはいけないんじゃないか？そして、自立には責任が付き物なんだよ。」

そのにいさんの言葉によーさんが続けた。

「今の学校も、親も、子どもたちに自立をさせたいと言いながら、結局、責任を奪つて、自立できなくしているんだよ。だから、俺た

ちは、子どもの工作教室を始めた。そして、親の立ち入ることができない環境を作ったんだ。今、子どもの始めたことを止めることは簡単さ！でも、それが、支援と言えるのか？大人が責任を取り続けることが、支援者の責任の取り方じゃないだろう。」

にいさんの口調も熱かった。

改には、これ以上、説得できる自信がなくなっていた。子どもたちのしようとしていることは、法に触れるかもしれない重大な事件だ。その責任は、子どもには取ることができないことは明らかだ。にいさんとよーさんの言うことはもっともだ。しかし、今回のこの件には当てはまらないという強い思いは消えなかった。改は、すでに次の手をうっていた。それは美術洋品店店主から、山肌、新座、与野を説得してもらうことだった。3人が信頼を寄せ、一目置いているのは、この店主より他に思い当たらなかったからである。そのために、山波まつりで芸術地帯に来ることを意味ありげに伝えていたのだった。

改は「すみません、まだ仕事が残っているので戻ります。」と言って、出て行った。残ったにさんとよーさんは、お互いに酒を一口呑んで、ため息をついた。

「リヒ、若いヤツとは、だんだん感覚が違ってきたよ。俺の芸術が錆び付かないようにしないといけないな。」

にいさんのその言葉に続く会話は、3人の中で生まれない長い夜がしばらく続いたのだった。

新座と与野と改の議論は、洋子のスナックに行く前に、とある場所で、すでに始まっていたのだった。改は、自分が掴んだ情報である子ども銀行と、何でもお絵かき というネットショップの話を、二人に伝えた。

「カイ。あまり子どもたちのやることに干渉するな。子どもたちが、なぜここへ来るかわかるか？」

新座が言った。

「にいさん。俺のしてることは過保護なんでしょうか。」

思わず声が大きくなってしまった。新座と改はお互いに次の一言を待っていた。

「場所を変えようじゃないか。息苦しい。」

与野の一言に2人は救われた気がした。

芸術地帯の中心に立つ建物は、ドイツの小さな村をイメージさせるレンガと淡い土壁でできた口（ろ）の字型をしていた。そして、その建物に四方を囲まれた中には、小さな噴水とテラスがあった。ここが芸術家たちの瞑想の場であり、創作の場であり、談笑の場でもあった。テラスでの3人が深刻な顔で話をしている姿を向かいの建物から静かに見ている者がいた。山肌だった。

山肌には、改の顎を突き出し、新座と与野に迫る姿が気になった。

山肌という男は、この芸術地帯の神にも等しい存在だった。山肌を中心に、この芸術地帯は存在していたが、山肌自身、ここの運営のことなど何も知らなかったのだ。ただただ、芸術を愛するものの時間と空間を大切にしたいだけだったのである。しかし、山肌の感性は誰よりも鋭い。その愛すべき空間が叫び声を揚げていると強く感じたのである。そして、罪人を生み出してしまうのではないかと。と。山肌は、愛する空間と時間の中へとゆつくりと歩みを進めた。建物の中は、自分の足音が、ガイド役を務めるほどの静けさだった。

山肌が、初めに扉を開け中に入ったのは、新座と与野のアトリエだった。もちろんのことながら、2人の姿はなかった。今、二人は共同で作品を描いている。壁を埋め尽くす大作だ。合作と言っても「タロットカード」を題材にして、1枚ずつ描き上がった作品である。2枚のカードが示唆する指標が興味深い作品になっているところを、山肌は高く評価している。それと同時に、芸術への理解が大衆に近づいている心配が、この作品から感じられていた。

隣の部屋へ移る。そこは一般社会人のアトリエだった。世の中の制約に押さえられている人たちが、自分自身の心と戦っている作品の数々。この人たちは、幸せを見つけられているだろうか……。そんなことを考えながら、山肌はまた、隣の部屋へと向かった。

次の部屋は、青少年のアトリエ。若者たちは、さすがにエネルギーが強い。心だけではなく、身体そのものを解体してしまいそうな作品もある。かと思えば、この世からの離脱にエネルギーを集中させようとしている作品もある。ここから帰らない若者の魂が、山肌にエネルギーを投じてくる。しかし、山肌は振り返ることをせず、部屋を出ると、後ろ向きのまま扉を閉めた。しばらく、薄暗い廊下を歩いて中庭の向こう側に見えていたアトリエへと向かった。

そこは子どもたちのアトリエだった。山肌には、ここが一番息苦しかった。とても閉塞感を感じるのだった。部屋を見渡すと、壁に貼られた一枚の画用紙に描かれた絵に目が留まった。子どもが書いた絵であることは間違いなかった。その絵は、同じ作品がいくつも描かれている。その作品それぞれに、天使のような羽がついている。そして2人の子どもが、それを見上げている。一人は口を開けて笑っている。もう一人は口を閉じてつらそうである。不思議だった。この芸術地帯で活動する者の約束事は、たった一つしかない。それは同じ作品を2つ以上作ってはならないというものだった。同じ物を作ろうと思ったときに、その作品は芸術ではなくなる。山肌はそう信じていたからである。しかし、子どもたちの中には、2つ以上同じ作品を作ることに対して、何らかの感情を抱いている者がいるということではないか。

2つ以上の作品を作ってしまったのか。

それとも、2つ以上の作品を作ろうとしているのか。

子どもたちが、この約束を破るような事態がおきているような予感には、山肌の中で直感に変わろうとしていた時だった。そこに忘れ物を取りに佐々木一郎と二郎の兄弟が戻ってきた。勢いよく扉を開けた2人の眼に入ったのは、壁の絵を見つめる山肌の姿だった。2人は息をのみ固まった。山肌が振り向いた。

「弟が忘れ物をしちゃって……」

一郎は弟の背中を押し、急ぎ取りに行くように促した。二郎は山肌を横目で見ながら、自分の棚へと駆け寄っていった。山肌は一言もしゃべることなく、微笑んで、また壁の絵を見つめていた。一郎は山肌の姿の奥に見えた絵に思わず息を飲んだ。動揺を隠すのが精一

杯であつた。山肌に気づかれてしまったことを一郎は確信した。

「失礼します。」

そう言つて、兄は弟を引き連れて逃げるように部屋を後にした。

芸術地帯が見えなくなったところで、佐々木一郎は、芸術地帯で活動する中学生たちをメールで東の中学校に招集した。この状況をどう回避したらよいのか、まるでアイデアなど浮かんでこなかったが、それよりも、今入っている注文を無視すれば、もっと大変なことになるという焦りと不安でいっぱいだったのだ。さらに、こども銀行の実態が分かれば……。預金残高は今現在で1000万円だ。佐々木一郎は、遠くから走つて来る仲間に足を進めることが出来なかった。足の力が地面に吸い取られていくような感覚でいた。

数人の子どもたちが、美術用品店を訪れた。洋子は、山波まつりに必要なものを買いに来たのだろうと思った。洋子は他のお客と同じように、自分から声をかけることはしなかった。子どもたちは、色とりどりの上質の画用紙、カッター台、梱包材など、美術というよりは荷造りに必要なものを選んでるように見えた。このところ、この美術用品店には、子どもたちがよく来るようになっていた。学年の異なる子どもたちが一緒に訪れる姿は、洋子の子ども時代を思わせた。昔は、学校が終われば、小さい路地や、空き地には、子どもたちの姿が見られたものだった。そして、駄菓子屋の店先では、口にお菓子を頬張って、面子 剣玉 ビー玉などを楽しんでいたものだった。最近では、どこに行っても、外で遊ぶ子たちの姿が、なかなか見られなくなってしまった。そんな時代だからこそ、芸術地帯に通う子どもたちの関係は、とても好意的に見えていたのだった。

子どもたちが、購入する商品を洋子の前に差し出した。洋子は、代金の計算を始めた。本当に荷造りでもするような材料ばかりであったが、一つだけ、その種類には属さないものがあった。それは、幼児しか使わないだろう安いクレヨンだった。洋子は、山波まつりで芸術地帯を訪れるのが、少しだけ楽しみにもなっていたのだった。

山波市の行政施設が多く集まる東のエリアは、ここ十年で、多くの大型施設が立ち並ぶ近代的な場所に姿を変えた。その海に近い小さなオフィスビルの4階に吉川の事務所はあった。昨夜、保護者の佐々木から連絡があったのだ。吉川にとっては、待ちに待った連絡だったことから、今日の午前中に会う約束をしたのだった。

今、吉川の正面に座る佐々木は、非常に緊張し、落ち着かない様子で顔色も悪かった。吉川は佐々木が話し始めるまで、いつまでも待つつもりでいた。佐々木は男性である。たぶん、吉川よりも年齢も上であろう。しかし、何かに怯えてるせいか、年齢よりも老けて見えた。そもそも佐々木とは、電話で話したのが2回、会ったのが1回、同じ学校に子どもが通っているということ以外に特別な接点があるわけではなかったのだ。その相手と、このような沈黙の時間を過ごしている。世間話で気持ちを和らげることも、キツカケを作つてあげること、吉川の仕事感覚では必要のない相手だった。しかし、その時間はすでに30分を経過していた。吉川は仕方なく言葉かけた。

「佐々木さん。お呼びしたのは私ですから、用件をお話してもよろしいですか。」

佐々木は救われたという気持と、逃れたいという表情で頷いた。

「私は佐々木さんに伺いたいことがあつて、お越しいただきたいとお願いしました。佐々木さん。私に嘘を付いていますね。子どもが恐喝にあつたというのは、勘違いではありませんね。確信がなければ、電話などしてこなかったはずです。でも、何か隠さなければならぬ何らかの事態が発覚してしまった。そうですね。子どもが傷つけられているかもしれないのに、隠さなければならなくなった、その理由を教えてください。」

吉川は極めて事務的に話をした。

佐々木はしばらく下を向いていたが、大きく深呼吸をして顔を上げ、吉川の方を見た。

「今日は話さなければならぬと思って来ました。息子が恐喝らしき行為を受けたのは間違いありません。家の電話に無言の留守電が入るようになったのは…3ヶ月前くらいからのことです。妻が気持が悪いと言いついたのは…ここ1ヶ月くらいの話です。ある日、妻は外出をしていて、小5の息子が学校から先に帰っていたのですが、妻が帰宅したときに、その息子が電話で話しているのが聞こえたそうなんです。『ごめんなさい。ちゃんと持っていくますから…許してください。』と息子は謝っていたということです。私はその夜、妻からそのことを相談を受けましたが、息子は隠しているようで、その話を自分からする気配はありませんでした。悩んでる様子もなかったので、しばらく様子を見ることにしたのです。」

佐々木はここまで一気に話をする、大きく深呼吸をして、話を続けた。

「それから数日後、たいこ橋の下で数名の小学生が中学生に囲まれていて、その中にウチの息子がいたというのを、学校の保護者の方が教えてくれました。ウチの息子だけではないということを知った私は、PTAに動いてもらうことを思いついて、それで吉川さん、あなたに電話したのです。しかし、それから…とんでもない事実を突きつけられることになりました。」

佐々木は気を落ち着かせようと、また大きく深呼吸をした。

「もう一人、中2の息子がいるのですが、たいこ橋の下で、小学生を囲んでいた中学生の中に、その息子がいたということを、教えてくれた方がいたのです。今度は中学校の保護者でした。長男は恐喝

する側、次男は恐喝される側ということになってしまつて。とにかく、事実かどうかを確認しなければならないと、息子たちを呼んで話を聞きましたが、二人とも「そんな事実はない」と言い張るのです。友人たちに聞いてみるぞと脅してみたのですが、答えは同じでした。私は、教えてくれた保護者の方々が、嘘を言っているとは思えないんです。だから、子どもたちの行動に気を配って生活するようにしました。でも、なかなか事実がわからないのです。かと言って、自分の息子たちが、恐喝する側、される側とあつては、安易に相談できず。正直、困っていました。」

吉川は、期待したほどの情報を得ることができなかったことに、少々がっかりした。佐々木の話は、渡道から聞いた情報が事実であるという裏付けにはなつたが、やはり、解決の手掛かりは得られなかった。さて、ここまでの情報をもとに、どうすることができんだろうか…吉川は考えていた。

「佐々木さん。お話いただいてありがとうございます。実は、他の保護者の方からも、同じ情報をいただいているのです。恐喝と断定できるものかどうかはわかりませんが、子どもたちの間で、何かが起きていることは間違いないでしょう。これは、海の小学校PTAとして、調べさせていただきたいと思います。佐々木さんにとって、お辛い結果になるかもしれませんが、どちらのお子さんにとつても、今の状況は良いことだと思います。取り返しが付かないことにならないうちに、動きたいと思います。」

「どうやって、事実を確認するのですか？」

佐々木が恐る恐る聞いた。

「大丈夫です。警察に連絡するようなことは、今の段階ではありま

せん。きっと警察を呼ばなければならないようなことにはなっていないと思いますよ。」

吉川の答えに、佐々木はホッとした表情で。

「出来る限り、ご配慮いただけたらありがたいです。お願いします。」

子どもを想う親というのは、どこまで小さくなれるのだろう……と吉川は佐々木が少し哀れに思えてきたのだった。

「わかりました。一つ、ご了解いただかなくてはならないことがあります。今、お話いただいたこと、すべてPTA会長に報告させていただきます。PTAで確認をするということはそういうことです。また、PTAが動くということは、学校にも報告すべきことが出てくるということです。そして、学校の判断によっては、教育委員会へとつながっていくということです。」

佐々木は立ち上がって。

「ちょっと……ちょっと待ってください。それではPTAに委ねる意味がないじゃないですか。子どもを売るようなものじゃないですか。」

「佐々木さん誤解しないでください。私は隠蔽工作をして差し上げると言った覚えはありませんよ。あなたは事実を確かめたいんですよね。調べた先に何かあるのか……分からないから、あなたは怖くて調べられなかったのではありませんか。分からないから調べる。そして、わかったことがあれば、それを解決する。あなたが望んでいることは、それだけではないのですか。」

吉川のその言葉に佐々木は無言だった。

「勇気を出しましょう。子どもたちのために。……」

電車の行き交う音が何度繰り返されたことだろう。ピアノの穏やかな旋律が微かに聞こえるような時間が流れた。そして佐々木は、ゆっくりと顔を上げて吉川を見た。佐々木の瞳には、光を放とうとする輝きが溢れそうになっていた。

「吉川さん。PTA会長は、私もこの調査に関わらせてくれるでしょうか。」

「もちろん、そのつもりだとおっしゃいますよ。」

「吉川さんは会長を信頼なさっているんですね。」

「会社組織で言えば上司ですから。当然のこととして、そうしています。」

「結構プライド高いですね。吉川さんって。」

佐々木は初めて吉川に、微笑んだ。

「残念ですが。PTAはプライドを持てるものじゃありませんよ。貧乏くじにあたったようなものなんですから。」

吉川との距離が縮まったような気がして発した一言は、結局、距離が縮まってなどいないことを確認するだけのものではあった。佐々木は少し恥ずかしく感じた。

「そつ、そうなんですか。失礼しました。…あつ。こんな時間だ。長居してしまいました。では、よろしくお願いします。」

佐々木は扉へと進んだ。最後に吉川は、佐々木に言葉を向けた。

「佐々木さん。海の小学校PTAは解決できますよ。どんなことでも。」

それから1週間後、いよいよ山波まつりが始まった。街はサンバのリズムと、山波まつりののぼりで華やいでいた。山波まつり運営委員会を中心に、街の各所では予定通りのイベントが開催されていた。初日から、観光客の姿も見られ、どこに行っても多くの人でにぎわっていて、一番落ちていて過ごせる場所は、もしかしたら学校かもしれないと思うほどであった。この様子からすると、パトロールが大切であるということを洋子は実感した。

安全対策としてのパトロールは、PTAが担当で、東の中学校、山の小学校、南の小学校が、それぞれの学校が所在するエリアを担当するように分担された。各学校の保護者たちは、各学校で決められたシフト制度に従って、担当区間のパトロールに当たった。パトロールは、保護者の人数を一番多く投入しなければならない活動である。そのため、普段あまりPTA活動に積極的ではない保護者も数多く参加する。そういった状況なので、参加者のパトロール活動への認識や意識に格差が生じてしまっていた。PTA役員や担当委員が、どんなに丁寧に説明したと思っても、埋められない格差が存在していた。

このパトロール実施にあたっては、渡道の強い意向もあって、名九、山北がそれに賛同する力タチで計画していたことが実現された。それは、当番に当たる保護者の子どもたちを預かるという案であった。この計画案を、山波まつり運営委員会で、会議の議題として取り上げてもらい、協力要請も含めた提案を行ったのだ。そうしたところ、海の学校だけではなく、山の学校も同様にしようということになり、結果的には、この山波まつりへ参加する保護者への支援策として実施することになったのであった。

その計画とは、次のようなものであった。

山波まつりに協力する保護者の子どもについて、預かり制度を実施する。

児童については、在籍する学校に、保護者同伴にて登校させ、保護者の引き取りがあるまで、学校内で管理する。

学校内では、サマースクールカリキュラムに加え、教職員による授業等への参加を必須とする。

未就学児については、兄弟の在籍する小学校にて、小学校養護教諭と児童施設、幼稚園の教諭を指導者として、民生委員およびシルバーボランティアの支援によって保育に当たる。

この預かり計画を提案する目的は、大きく分けて2つあった。一つは、保護者の心配と負担を軽減し、活動に専念する環境を作ること、参加意欲と責任意識の向上を図るというものであり、何より保護者自身が楽しさを実感できるものにする事だった。もう一つは、子どもの保育に当たることの出来る資格を持っている人の専門性を生かすことによって、預かり制度を、より安全なものにすることが出来る。そして、安全が図れば、そこに協力できる支援者の輪を広げることができる。民生委員や高齢者にとっては、炎天下の中でのパトロールに参加してもらうよりも、学校の中で、子どもたちの保育に当たってもらう方が、体力的負担の軽減になる。そして何より、子育てに関する豊富な知識と経験を生かした活動をしてもらうということであった。この計画は、満場一致で承認されたのだった。しかし、これをまとめ上げるためには、渡道、名九、山北の3人は山波まつりに関わる人たちの情報を集め、検討を重ねた苦労があった。発案は渡道であったが、実施が可能であるという裏づけに必要な情報は、山北が、一緒に住む親を通じて集めた。また、名九が聞き出した情報をもとに、山波のボランティア活動が、日常的にはど

のように行われているのかを調べあげたのだった。まさに、3人の力を結集した成果であった。この計画を実施する上で、重要になってくるのは、事故や損害に対する保険制度の施行であった。保育する子どもたちと、協力支援者への安全の保障である。従来のような協力支援者対象のボランティア保険や、団体加入のイベント保険の適用だけでは、活動範囲を網羅しきれない。つまり、子どもたちと協力支援者との間の取り決めを明確にした、あらたな保険制度の確立が必要だったのである。この点については、今までの保険制度の問題点を指摘し利用範囲を示したことにより、新保険制度の確立を望む声が運営委員の中でまとまり、行政を動かすことに成功したのだった。そして、この計画の提案への海の小学校PTAの想いは、洋子の言葉からも十分伝えることが出来たからであった。

「協力や支援というのは、自分自身が無理をしなければならぬものであってはならない。自分が苦しくては、人に手を差し延べることなどできるはずがないのです。この計画案は、私たちの学校の保護者の声によってまとめ上げることができました。協力的じゃないと言う前に、協力できる環境を整えることが、活動の中心にいる私たちの行うべきことであるということをお伝えしたかった……皆様には、心から感謝いたします。頑張ります。」

渡道の、あたためていた想いから始まったこの計画は、海の小学校PTA役員会の総力で実現することが出来たのだった。運営に関わる人たちのポジショニングを変えたことによって、緊張感が生まれた。また高齢者が、子どもたちの保育を担当することになったことで、母親世代との異世代交流が自然なカタチで行われた。これは思わぬ副産物を得る結果となった。

山波市は、サンバのリズムと、にぎやかな踊りやパフォーマンスに

包まれた時間となった。

山波まつりでは芸術地帯が開放された。毎年多くの観光客が訪れている。そのほとんどが、芸術地帯で行われる、作品の展示即売会が目当てで会あった。洋子は、カイから山波まつりの解放期間には、芸術地帯に来たほうが良いという、意味深な誘いを受けていたので行くことに決めてはいた。しかし、初日は、PTAのことと、山波まつりの様々なセレモニーに、出席しなければならなかったため、行くことができなかった。

翌日の午後、洋子は芸術地帯へ向かう準備をしていた。カイが、芸術地帯に来て欲しいと思っっているのは、美術用品店の店主である洋子だと思った。地下道を通り、北の家で美術用品店の店主として外出するために装いを整えた。セミロングの細かいレース使いのスカートと上着、そして、固めのドレープの効いたブラウス、スーツと同系色の深緑のグラデーションで表現した、小さいわけではないが、比較的こじんまりとしたコサージュのついたつば広で麻素材でできた帽子をかぶった。靴はメッシュでできたショートブーツを選んだ。美術洋品店の店主として外出することはほとんど無かった。洋子は鏡で自分の姿を確認した。そして、店の横の勝手口から外へと出て行った。

高い位置から、洋子を包み込む夏の日差しはとても眩しかった。店の前から、左斜め前方に伸びていく緩やかな坂道がある。そこを500メートル登っていくと、芸術地帯の入口がある。今日は多くの人々が、この坂を行き交っている。洋子もその中の一人として、ゆっくりと歩を前に進めた。入口に着くと、芸術家志望らしい若者たちが「記名をお願いします。」と声をかけていた。訪れた誰もが、記名をしてから中に入っていく。洋子の美術用品店店主としての名

前は、絵心有えしんゆうと言う。誰も本名だとは思わないだろうが、芸術を好む者らしく、洋子自身は、とても気に入っている名前だった。

中に入ってからしばらく歩くと、やっと建物に辿り着いた。正面玄関を入ると、左回りで回るように順路が示されていた。

最初の部屋には、巨大な2枚の絵が飾られていた。タロットカード？……しかし、それは、ただ単にタロットカードを模写したものはまったく違っている。見つめているとそのまま絵の中に引き込まれていってしまいそうな、額の内側に渦巻く、大きな渦巻きが見え隠れしているのである。右下に書かれたイニシャルは「I・N i z a」と「M・Y o n o」と書かれていた。あのにいさんとよーさん！？あの2人が…これほどの実力を持っているということに、正直驚いた。その2人が尊敬する、山肌の実力とは…想像をはるかに超えたものなのだろう。2人の作品を見た最後に、頭を掠めてしまった。洋子は、自分自身の期待を抑えながら、次の部屋へと入っていた。そこは人で溢れかえっていた。人だかりの奥に作品があった。作品はかなり小さいものなのであるうか。人は溜まる一方で、順番を待つて立っていたのでは、なかなか作品に近づくことができないとあって、多くの人は前に進もうとしている。しかし洋子は、強引に行くことはしなかった。美術店店主として、多くの作品に触れる機会があった洋子は、いつも感じるものがあつた。作品は、作家の一部分を切り取って、この世に生まれてきたものであり。いわば、言葉とは異なる手段で表現した作家の主張である。想いが吹き込まれずして誕生したものは、この世に何一つないはずである。洋子には、作品が自分を引き寄せてくれる力があると信じていたのであつた。また、本当にそう感じていた。作品は、たくさんの人たちの視線を、下から天窓へと移させている。洋子は、何となく一人であることの自由、解放たれた瞬間をイメージしながら、静かに、そして滑るように、人垣の内側へと取り込まれて行ったのであつた。

しばらくして目の前に現れた絵……床の上に置かれていた。60号のキャンバスに描かれているのは、深く続くパイプの中に浮かぶ人魚が脱皮するような姿で、自分の意思で目指すべきものを発見し掴もうとする手が、見るものの視線を天窓へと誘っていく。何と言う広がりだろう……洋子の身体が、水の中の感覚を掴んだ。この感覚から抜け出すには、時間がかかる。ここに足を留めてしまった人々は、きつと同じ感覚であつたのだらうと思った。洋子は、山肌の絵を見て、この人の作品が高く評価され、数億円の値が付いたことは理解できた。ふと、自分の祖父が思い出された。洋子は想いを断ち切るように、部屋を出た。

次の部屋は、カイの作品がある新人芸術家の部屋だった。絵画、彫刻、造形など、どれもが個性溢れる作品で、感性がうごめいていた。その中で、額縁から洋子に手をかけようとする作品があつた。カイだと分かった。カイの作品は、油絵の具の凹凸が吟線のような繊細さで筆となり描かれていた。あのもの静かな雰囲気のカイからは想像もつかないようなアプローチを作品がしてくるのである。洋子は、今日来た目的を改めて思い出した。子どもたちの作品を見るために、足早に部屋を出た。

子どもたちの作品が展示してある部屋は、重々しい空気が感じられた。作品が、天井から床まで、ところ狭しと飾られたいた。芸術に触れることの楽しさを、子どもたちが感じていることは、作品にも表れていたが、短い時間で製作されているような気がした。やはり、学校を終えた後、習い事や塾などとの兼ね合いで、没頭するとか、専念するという環境は、子どもたちには与えられないのだろうか。作品を見ているうちに、洋子はあることに気がついた。洋子が店主を務める美術用品店で購入していった材料を使った子どもたちの作品がないことだった。あれだけの材料を購入したのに……山波まつ

りとは関係がなかったのだろうか。洋子は、その疑問を解消できないまま、子どもたちの部屋を後にした。廊下に出ると、そこにはカイが立っていた。カイは何も言わなかったが、洋子に近づき、洋子の右手を静かに掴んだ。そして、洋子が戸惑いを見せる間もなく、カイは洋子の手のひらに小さくたたんだ紙を乗せ、手を軽く閉じ、立ち去って行ってしまった。

洋子は手を開き、カイが握らせた小さな紙を開いた。

洋子は建物を出て、芸術地帯の緩やかな坂を下り、美術用品店のある北の家へと入って行った。2階のプライベートルームで、白いワイシャツにパンツスタイルに着替え、地下道を通って東の家へと向かった。エレベーターで1階へ上がり、ブラインドの閉まったままの暗いフロアの電気もつけず、パソコンを立ち上げた。準備ができるまでの時間が長く感じられた。インターネットに接続されると、早々に、URLを入力し検索をした。それは、カイに手渡されたメモに書かれていたものである。しばらくして、洋子の目の前に開かれたのは、何でもお絵かきという名前のホームページであった。洋子の眼は、左から右へと、右から左にと、機を織るように動いた。これは……子どもの絵を売ってるってこと？洋子は、ホームページのクリックできる項目を次々に開いて、これがどのようなものなのかを調べ始めた……。

これって。子ども銀行に入金すると、ネット上では1円＝1ポイントとして換算されて、それで買い物をするってこと……。ボーナスポイント制度もある。ネットショッピングの一般的なシステムと同じようだが、少しだけ違っているところがあつた。ほとんどのネット通販は、商品の購入をクレジットカード・代引き・振込等で決済するが、これは、先に入金をしてポイントを購入し、そのポイントで商品代金を決済するシステムになっていた。つまり会員制のショップである。入金請求額は、特に決まっていらないから、すべて購入者の意思ということになる。とてもよく考えられているシステムだが、なぜ、このようなシステムにしなければならなかったのか、洋子には答えが見つからなかった。

「あっ！」

洋子は驚いた。それは、洋子が考案したベルトスタイルのパッケージの写真が掲載されていたのである。このパッケージは、誰にも版權を譲渡していない。このデザインは、応用範囲の幅は少なかったが、洋子自身がとても気に入っていたからだ。とは言え、自分で隠し持っていたかっただけではなかったので、このパッケージは、美術洋品店のみで販売していたのだった。それが何故。思い返してみれば、このパッケージは、子どもたちに人気があった。毎月30枚、時には、100枚の束が売れたこともあり、ここ1年はコンスタントに売れていた。ベルトを通すように綴じられるところが面白くて買っていくのだろう。子どもたちの間のちょっとしたブームくらいにしか思っていなかったのだが、まさか、このネットショップのプレゼント用パッケージとして使われていたとは……。洋子はどう一度、じっくりとホームページを見直し始めた。

パソコンの前に座ったまま、どれくらいの時間が流れていったのだろうか。電気をつけずに作業していた部屋には、時折通り過ぎる車のヘッドライトが、これ以上探ってはいけないと言わんばかりに、洋子の瞳を狙ってくるのだった。

山波まつり3日目。洋子は、海の小学校PTA会長として出向いた。今日も昨日と変わらず、多くの人が訪れていた。緩やかな坂を上がつて行くと、時折会話をしながら坂を上がる吉川と渡道の姿が見えた。

二人の身の寄せ方と歩調は、深刻そうに見えた。1日会わなかっただけに、随分会っていないかったような気がするの、昨日の一件があつたからかもしれない。吉川と渡道は、自分たちの知り得た情報を、今日は洋子に報告をしようと決めていたのである。そして今ここの会話が、お互いの気持ちにブレがないことを確認する最後のチャンスとなっていたのだつた。

渡道が後ろを振り向いて洋子を見つけると、少女のような笑顔で手を振った。洋子もそれに応えて、手を振ってしまった。渡道が吉川に、洋子が後ろにいることをささやいたのだろう。次に吉川が振り向き、会釈して見せた。洋子も会釈で返した。洋子は、二人との距離を縮められればいいかなという気持ちで、足の運びを早めて歩いて行つた。三人は門の前で、ちょうど一緒になつた。

「こんにちは。お疲れ様です。」

渡道が洋子に声をかけた。

「お待たせしちゃったわね。お疲れ様。」

洋子は、少し息の上がつた言葉を発した。

会釈をしただけの吉川は、挨拶はこれまでと言わんばかりの硬い表

情になっていた。

「会長。私たち、会長にお話ししなければならぬことがあります。大きな問題に繋がっている話かもしれません。」

「わかったわ。じゃあ、ここの見学を終えてから、時間を持ちましようか。」

「はい、お願いします。」

吉川が答えた。

「みなさん！」

三人は同時に同じ方向を向いた。そこには、近づいてくる名九と山北の姿があった。名九も山北も、とても嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「名九さんのお子さん、工作教室に通っていらっしゃるんだから、作品出しているんでしょう。楽しみにして来たのよ。」

渡道が言った。

「ありがとうございます。実は、山北さんのところの3つ子ちゃんも工作教室に入ったんです。」

その名九の言葉に続いて。

「つい、この間ですから、作品なんて言えるものはできていないと思いますけどね。ただ、とっても忙しくはしてましたから、何かは

あるんだと思います。」

山北は照れ隠しをするかのように言った。

「お子さんたちは、どんな作品を描いていたのか話してくれないの？」

吉川は尋ねた。

「言わないんですよ。聞いても……だから、探すのも大変かも。」

名九の嬉しさと喜びを含んだ言葉と取れた。

「一緒に見て回ってもいいかしら？」

洋子は2人に言った。

「もちろんです。ウチの子どもたちの作品はとも見ていただけるようなものではないと思いますが、ご一緒できるなんて嬉しいです。」

山北が嬉しそうに答えた。

「大げさね。」

渡道が切り替えて誘った5人の笑いが、なぜか一つに繋がった。

これが、たとえ4ヶ月という短い期間であっても、全員が役員1年生で、今年度のPTA活動をスタートさせ、今開催されている街をあげての山波まつりまでに間に、それぞれの異なる思いや考えはあ

つても、同じ方向を向いて歩んできた証なのだろうということは、洋子だけではない、誰もが感じられた瞬間であつたに違いなかった。

5人は建物の玄関に入ると、左回りの順路に従って進んでいった。山肌、新座、与野のアトリエで、素晴らしい芸術作品を見ながら、子どもたちの作品が展示されているアトリエへと向かった。今日で3日目ということで、展示されている作品の中には、売約済みのリボンがつけられている作品も数多くあつた。もちろん、値段は個別交渉。いくら値がついたのかはわからなかった。これらの交渉は、新座、与野の役目で、会場に姿が見えないのはそのためだった。一般クラスの作品に続いて、青少年、子どもたちの作品へと移っていくように展示がなされていた。だんだんと完成度は低くなっていくのだが、想像力に富んだ作品が多くなり、色使いもカラフルになっていく。改めて、子どもの感性の素晴らしさを認めざるを得なかった。子どもたちは、知らないことが多い。だから、大人では思いも付かない関連性が生み出される、分からないのだから恥ずかしさもないのだろう。感性の豊かさを育てようというけれど、概念を植えつけようとする教えは、感性を閉じ込めていくことになるのではないだろうか。子どもたちに教えなければならぬことは、関連付けることであつて、関連付けられることではないということを、洋子は感じさせられていた。それが、ここの作品の多くが、もがいているのは、きっとそのせいではないかという答えでもあつた。

名九が、気になることを言った。

「なんか、子どもの作品が少ない。描いたものはすべて展示される予定だと書いてあつたのに。」

「うちも。あんなに毎日通つて、2枚ずつなんて……。しかも、1枚に1週間もかかっているとは思えない絵だわ。」

吉川が聞いた。

「真面目にやっていると思われたいから、ちょっとごまかすために言ったとは考えられないかしら？」

あなたたちの子どもは嘘をついていると言っているような発言で、吉川自身もそれに気がついて、早魑入れずに、自分で自分の言葉をフォローした。

その言葉に名九は真剣な顔つきで。

「そうかもしれないですよ。というか、何かを隠しているという気がしてならないの。」

「あんなに毎日書いていると言っていたのに、これだけなんておかしい。それに、子どもは、楽しいというだけで、工作教室に関して詳しいことは何もしやべらないの。それに、工作教室に通うようになって、大きく変わったことがあるの。今まで、すぐにアレ買ってコレ買ってと言っていたのに、まったく言わなくなってしまった。……おかしいと思いませんか。」

「そう言えば、ウチの3人も、まだ入って短いけど、3人で自分の部屋にすることが多くなって、コソコソと何かを話しているみたいなよね。」

山北が続いて言った。

そして、子どもたちの作品群を通り抜けようという時だったので、

「もう、これで子どもたちの作品はおしまいなのかしら？」

山北が周りを見渡すように言った。

「そうみたいね。」

渡道が言う。

「うちの子の作品は結局一つもなかったわ。どういうこと？」

山北の子どもたちは2年生だ。何か作為的なことができるような年齢ではなかった。まだ入って間もないために、作品の展示が行われていないのではないかと、5人はそれぞれの胸の内で考えていた。ところが洋子が気がついた。

「おかしいわ。3年生より小さい学年の子どもたちの絵が、一つもない。」

「ほんと……。」

「部屋を分けて展示してあるんじゃない？」

「これが最後の部屋よ。」

「何か、意図があるんじゃないかしら？」

と口々に言った。

「でも、この工作教室は、課題があるわけじゃないの。自分が描いたり作ったりしたい時にすればいいんです。だから、遊んでいたの

かもしれないですよ。遊んでいたからと言って、怒られるところではないんですから。」

名九が説明をした。

「でも、それじゃ、親としては何のために通わせているかわからないじゃない。月謝を返してって言われかねない話だよ。」

吉川があまりにも無責任ではないかとも言うように勢いよく話した。

「月謝はないんです。」

名九の言葉に洋子、吉川、渡道は驚いた。

「子どもたちは、たくさんカードを描いている。下手でも褒めてくれる。だから楽しい。と言って、毎日毎日、カードを書いていたんですよ。」

山北が思い出したように言った。

そして、また何かを思い出したらしく、大きな鞆の中をあさり始めた。

「あつた！見てください。3人のうちの誰がかいたのかわからないんだけど、ウチのゴミ箱で見つけたの。」

そこには「おばあちゃん お誕生日おめでとう」と書かれていて、自分が好きだという飛行機の絵が描かれていたが、失敗作だったのか、絵の上を行ったり来たりしたクレヨンの線で消されていた。

洋子にはすべてが繋がった瞬間だった。ネットショップの何でもお絵かき は、この芸術地帯に通う子どもたちの作品を販売しているのだ。吉川と渡道、洋子の3人はそれぞれに確信をもった。それは中学生が低学年の子どもたちにお金を要求していたのではなく、作品を作らせることを要求していたのではないかということだった。しかしなぜ、作品を作らされている低学年の子どもたちが、文句も言わずにやり続けているのか。しかも楽しいと言って。5人はしばらく沈黙の中にいた。

その沈黙を破ったのは吉川だった。

「会長に以前、保護者の佐々木さんという方から電話があった話をしましたが、覚えていらっしゃいますか。」

「もちろんです。」

「あれから、渡道さんのところにも同じような情報があつて、会長には内緒にして申し訳なかったんですが、私たち色々調べていたんです。やはり恐喝の事実はあるようです。でも、今の話を聞いて思ったのですが、恐喝と言っても、お金ではなく、作品を作ること強要されていた。期日を守らない子どもに対して、恐喝めいた行為に及んでいたと考える方が、現実的だと思います。実は、佐々木さんには、中2と小5の男のお子さんがいます。上のお子さんが恐喝する側で、下のお子さんが恐喝される側のようだという事で悩んでいらっしゃいました。そのことをあわせて考えてみても、やはり、これは事実ではないかと思われます。しかし不思議です。小さな子どもたちが、親に助けを求めることもなく、作品を作ることに応じているという事実から、子どもたちにとって非常に魅力的な報酬が得られる仕組みがあるのではないかと考えてしまうのです。だ

とすれば、問題は決して小さくはないと思うのですが。」

「会長、私は難しいことはわかりませんが、名九さんがおっしゃっていたように、多くの子どもたちが、私たち大人に何かを隠しています。」

渡道は自分も危機感を持っていることを伝えた。

「会長、以前お話した子ども銀行のことなんですけど、まだ実態は掴めていないのですが、本当に存在しているように思われるんです。」

吉川と渡道は、初めて洋子に、こども銀行の存在を示唆した。

「吉川さん。私も、この芸術地帯と子どもたちの動きがおかしいと感じて調べていたのよ。そう。あなたの想像通りよ。子ども銀行は存在する。昨日漸くと、その存在を突き止めることができたの。」

「会長、すごいですね。」

「すごい！まるで探偵みたいじゃないですか。何だか興奮してきました。」

「山北さん、不謹慎！」

「あつ。すみませんでした。」

「大まかなことは、わかっているんだけど、細かいシステムについては、会計の佐藤さんと山田さんにまとめてもらっているの。吉川さんと渡道さんを通してお願いしなかったことは、お詫びします。」

「会長。気になさらないで下さい。緊急事態ですから。」

「ありがとう。もう近くの喫茶室で待っていてくれると思うわ。皆さん一緒に来てください。すべてはそこで……。」

5人は芸術地帯を後にして喫茶室へと急いだ。

すでに佐藤と山田は、一番奥の目立たない場所を選んで、洋子が来るのを待っていた。

「それにしても驚き。」

「ホントに。子どもだけでこんなことができるなんて……私の想像をはるかに超えた出来事だね。」

「私。佐藤さんと一緒によかった。私の頭じゃ絶対こんなまとめられなかったもん。大体、この役員会はレベル高すぎ。私は必死だね。」

「何言ってるの。会長がいつも言ってるでしょ！一人ひとり持っている力が違う。それを合わせるから強くなれるって。」

「そうでした。まあ私は根性がありますからね。」

お互いこれから起こる何かに怯えているのだろうか、こんな会話で笑い合えることに、感謝してしまうのだった。

「いらっしやいませ。」

その声でその笑いも止まった。

洋子たちの姿が、二人の目に飛び込んで来た。海の小学校PTAの役員全員集合である。

「お待たせしました。遅くなって、ごめんなさい。」

「全員集合ということは、何か進展があつたか、あるか……ということですね。」

佐藤が言った。

「ええ、全員の情報を一つにする時が来たようなの。」

「人目があるから、あまり長い時間話をしていることはできないわ。」

洋子の言葉に全員が頷いた。

「佐藤さん、山田さん、子ども銀行の仕組みを説明してくれる？」

説明は佐藤が行うことになっていた。

「はい。会長から詳しく調べてほしいと言われたURLは『何でもお絵かき』というサイトでした。このサイトは、子どもたちの絵を売るネットショップです。しかしただの絵の販売じゃなく、私たち親って、子どもたちが、おじいちゃんやおばあちゃんに、お誕生日とかにプレゼントをもらった時とか、御礼状の代わりに、子どもに絵を描かせたりしますよね。でも、子どもって目的にあつた絵を描いてくれるとは限らないし……結構手間でしょ！それに子どもも親にこれ描けあれ描けって言われて面倒な時もあるはずで。そんな時に『何でもお絵かき』を利用してみたいんです。たぶん始まりは、親に頼まれて嫌々描かされている子どもたちのためだったと思うんですけど、今では親からの注文も結構あるみたいでした。」

佐藤の説明に6人は黙って頷いていた。

「その絵を買うためには、まず子ども銀行に入金をして、ネットショッピングで流通するポイントを買わなければならないの。1円＝1ポイント。単位が円ではなくポイントになるだけで、価値は一緒。つまり、お金を払って会員になって買い物をするというシステムです。商品は手渡しか郵送のどちらでも選択が可能です。購入方法はこんなところです。実は苦労したのは、ここからなんです。山田さんの根性で掴みましたよ。会長。」

「続けてください。」

それだけを洋子は言った。

「はい。ここの商品となる絵を描いているのは、小1～小5までの子どもたちで。人気のある絵が描ける子どもたちは、週に20枚くらいは描いているようです。なぜ、子どもたちは書くことに頑張れるのかというと、皆さんのお察しの通りです。報酬があるからです。山田さんは、今スイミングスクールでコーチをしているでしょ。そこに来ている子どもたちが、休憩室で絵を描いているのをよく見かけるといので、その子どもたちの様子を見てもらったんです。山田さん、詳しく話して。」

そう佐藤に促されて、山田が話し始めた。

「はい。休憩室の子どもたちの様子をそれとなくみていたんです。そうしたら子どもたちが、それぞれにカードを見ながら話している声が聞こえてきたんです。あと3枚絵を描くと、アニマル帝国の進化ポイントが20点もらえるとかって言っていたので、何気なく、進化ポイントってすごいもの？って聞いてみたら、すごいよ！だって

3面〜6面までをクリアするか、クリアできるソフトを買わなくちゃもらえないんだからと言ったんです。私はゲームには詳しくないので、知り合いに聞いてみたんですが、進化ポイントとは、そのゲームをしている子どもたちには、喉から手が出るくらい欲しいもののようにでした。つまり、子どもたちは『何でもお絵かき』に絵を提供して、賃金の換わりに、ゲームのポイントをもらっていたようなんです。他にも、何かの商品と引き換えとかあるかもしれないですけど、私が調べられたのはここまでです。完全に、売る側、買う側をコントロールしているシステムが確立されています。これは、お金が動かないように工夫されたネットビジネスですね。」

山田の報告を聞いた吉川が話し始めた。

「子どもだから、お金を動かさないためには、どうしたらよいかということを考えなければならなかった。だから考えついたということね。」

「それにしても、まったくウチの子どもの行動からは想像もできなかったわ。あの子が、私や主人の目を誤魔化して、嘘をついていたなんて…ショックだわ。」

名九は少し動揺しているようだった。

山北は、まだ小2の三人が、それほど深く事情をわかってやっているとは考えられなかったので、意外と冷静ではあった。

「名九さん。嘘をついたわけじゃないんじゃない。大人だって、話したくないことあるでしょ。決め付けて考えちゃかわいそうよ。」

8人の母らしい、見かけとは似つかわしいほどのどっしりとした意見だった。名九は微笑みながら頷いた。

「子どもたちは、何のために、このようなビジネスを始めたのかしら……。止めさせることなくって簡単だけど。それじゃ何の意味もないわ。子どもたちは、私たちの大人社会から離れたところを何故選らんだのかを、私たち大人は知る必要があると思うの。次は、芸術地帯の代表者と話をしなければならぬわね。」

そう洋子はつぶやいた。そして。

「今日のところは、ここまでにしましょう。皆さんに約束してほしいことがあります。」

「会長。野暮ですよ。今さら子どもたちに探りをいれない、公言しない、でしょ。」

山田の言葉に、全員が小さな声で笑った。

「ありがとう。」

山肌がスナックに現れたのは、その日の夜だった。今日は、この間にいさんやよーさんたちと一緒に来た時の印象とは違って、温かい印象であつた。一人だからこそかもしれないと感じられた。

「こんばんは。一番乗りみだいだね。」

「今夜は、一人かもしれないわよ。ほら、今日は、にぎやかに呑む夜だもの。」

「にぎやかも続くと、一人静かなところを求めたくなる。僕だけじゃないと思うよ。」

「では、静かな夜を差し上げましょう。」

そう言つて洋子は妖艶に微笑んだ。

山肌は一呼吸の間、洋子を見つめてしまった。

「あのタンカレーを。ストレート。」

洋子は、山肌から目を背けずに見つめていた。洋子は思っていた。この人は、今夜PTA会長の山肌としてここに来ている。芸術家の山肌ではない。もしかすると、洋子が海の学校のPTA会長であるということに気がついていないのではないだろうか。分かるはずがないという自信は消えることはなかったが、なぜ、洋子の前に。というより、スナックに勤めるリヒの前に、山肌がPTA会長として現れなければならないのかが分からなかったのだ。

「この店には、行政の人もよく来るよね。」

山肌が聞いた。

「ええ…まあ。」

洋子は当たり障りなく返事をした。

「芸術地帯にはさあ。体験だの模擬会社だのという話しの相談が、行政からよくあるんだ。もちろん、子どもたちのためにというのが目的だと、彼らは言うんだけどね。でも、違うと思うんだよね。どこまでやっても、おままごとさ。お膳立てして、体験させたことは、非日常的な体験であって、日常を経験したことにはならないんだ。所詮、お祭り、イベントさ。」

山肌は、海の学校の学校公開日の日、校長室で、校長の金城と洋子と三人で話した時の話と同じことを語ったのだった。ということは、今ここにいるリヒと洋子が、同じ人物であるということに気づいていないと冠がるのが自然だ。洋子は、緊張していたつもりはなかったが、少し肩の力が抜けていくのがわかった。

「大人も、子どものころは本気になれたのにな……。なぜ、本気で子どもたちと向き合えないんだ。どうして、子どもたちとの間に、線を引いてしか考えられないんだ。」

山肌の憤りはかなりのものらしいことが伺えた。洋子も山肌と、そう変わらない思いが、自分の中に巡っていることは認識していた。しかし今、ここにいるのは、PTA会長の洋子ではなく、スナックで働くホステスのリヒである。リヒらしく言葉を返したのだった。

「みんな、本当の自分を見ることが怖くて、本気になれないんじゃないかしら。偽って生きることを学んだ大人たちなのよ。私たち……。」

山肌は、リヒを悲しそうに見つめた。本当に悲しそうに。瞳が美しく輝いていた。しかし、それは一時のことだった。山肌の瞳が水面に顔を覗かせるように強い力を取り戻した。

「確かにね……。君の言うとおりだ。僕だって、本当の自分を見つめるのが怖い。同じだね。実は、明後日、芸術地帯に行政のお偉いさんが来るんだ。体験学習と模擬会社実施のための下見らしい。僕も行く。山の小学校PTAとして。」

「なぜPTA会長として行くの？」

「僕は、芸術を愛するものとしては芸術を守らなければならないが、子どもたちは、PTA会長として、保護者として守らなければならない。だから今回僕は、その両方を守らなければならないと思っている。芸術地帯には芸術を守る奴らは他にもいるけど、子どもたちを守るのは、PTA会長の僕しかない。芸術も子どもたちも、偽者からは学べないんだ。そのことを伝えなければならぬと思うてる。」

洋子は何も言葉を返すことができなかった。山肌は、沈黙の間も、必要な間であつたかのように、続きとして話し始めた。

「山波市には、もう一つ小学校があるのを知ってる？海の小学校。そのPTA会長にも、明日の朝、電話しようと思ってる。彼女は、僕と同じで新米会長なんだけど、想いのある人なんだ。きっと、同

じ方向を向いてくれているはずなんだ。揃って行かなければなら
ない気がする。」

洋子は、明日の朝、自分に電話をかけてくれるという話を聞いたの
だった。

「そう。応援してるわ。」

やはり気の利いた言葉は出てこなかった。

「ありがとう。今日ここへ来たのは、僕の出陣式さ！初めて来たの
にちよつと偉そうだったね。」

「そんなこと……。」

初めて…その言葉に洋子は困惑した。

「たぶん背中を押してくれる人がほしかったんだ……実はここ2回
目。」

山肌の2回目という言葉に、洋子の心は安堵したのだった。しかし、
山肌の二面性には、戸惑いを感じていた。まったくの別人と言つて
もいい。芸術家としての山肌と、今夜の山肌は違っていた。洋子は、
自分と同じ匂いをどこかで感じずにはいられなかったのだ。

山波まつりは盛況のうちに終わった。海の小学校PTAから提案した防犯計画は、導入初年度だったにも関わらず、運営上すべての面で円滑に行うことができたのだった。洋子は役員全員の想いと力を、強く心に刻んだのだった。

山波まつりから2日後。いよいよ、行政が芸術地帯を査察する日が訪れた。行政にとつては、思った以上に大掛かりな査察となつてしまったのだった。当初の予定は、教育委員会管轄の査察で、教育長、指導室から2、3名というものだった。しかし、芸術地帯の方で対応した新座があまりよい返事をしなかったのである。新座は、改がこども銀行のことを報告した時も言っていたように、子どもたちに干渉しすぎることにについては反対だからだ。そのあたりは、PTA会長としての山肌や、同期の与野、改、土田と、芸術地帯の中枢を担う者たち全員の一致していた。行政からの要請に対して、新座は一度断つた。しかし、行政から教育制度に基づく、強い行政指導ということだったため、新座は、責任者の同伴を条件として出したのだった。そこで、教育委員会のトップである教育委員長が査察に加わることになったのでわる。PTA会長を務める山肌には、教育委員長が現場と精通しているわけではないことがわかっていたので、新座に対して、山波市長と各小中学校の校長の出席を求めることを、具体的な条件として再度提示させたのだった。これには、行政も対応に苦慮した。しかし、文科省で選定された山波市としては、模範会社も今年度中に設立・始動させなければならない事情があった。芸術地帯で行うこと以外に方法がないわけではなかったが、全国的に類のない取り組みとして、高い評価を受けるものとしては、他には考えられないという弱みもあり、今回の査察に、オールキャストを揃えることを条件として受け入れたのだった。山波市長が来ると

いうことは、市長が一人で来れるはずもなく。秘書室や総務部からの職員も参加することになる。必然的に人数は増加し、立派な査察団となってしまうたのだった。

山肌も準備をしていた。山の小学校、海の小学校、東の中学校のPTA会長・役員が、芸術地帯のメンバーとして、査察団を迎えることになっていたのだった。

この2日間という短い時間の中で、各学校への査察実施の経緯と行政に対する模擬会社事業の見直しの要請について、連絡メールを使ってやり取りされていた。概ね3校は合意できていた。これも、山波祭りの防犯計画での協働が導いたことに間違いなかった。山波まつりを通して、各校の果たす役割は少しずつ異なり、力を出し合うことによつて、1校ではできなかったことも実現できたことが、それぞれに実感出来ていたからである。洋子にとつては、願つてもない状況が整えられたわけで、何も臆することなどなかった。ただ、この機会を逃すことなく、子ども銀行とネットショップの存在を明らかにしなければならぬという難題を抱えていることは、洋子の緊張を高めていたのだった。子どもたちが、大人に内緒で、こんなことをしているといつて、止めさせることは簡単なことだ。しかし洋子は、止めさせたいなどとは考えていなかったのだ。これは、子どもたちが自分たちの知恵を絞り、自分たちの力を出し合い、立ち上げた事業。しかも、大人社会のルール、つまり法律を逸脱することなく、運営することができているのである。それを、子どもなんだからという理由で、止めさせる話は、決して子どもたちが納得するものではない。そんなことをしたら、子どもたちの心の成長を刈り取るだけで、山波の子どもたちは、きっとこの街を捨てるだろう。山波だけではない。大人と同居する社会を捨てることになるだろう。それを回避するのは、行政でもない、山肌でもない、改でもない、海の小学校PTAを背負っている自分しかできないと洋子は思つて

いた。なぜなら、吉川や渡道をはじめとする役員も、子どもたちに子ども銀行やネットショップをただ止めさせればいいと思っていなからだ。洋子は、役員たちの想いも自分の肩に乗せて臨む覚悟を決めていたのだ。

洋子は南の家で、そよそよリビングを通り過ぎて行く海からの潮風を感じながら過ごしていた。

本来ならば、今日は東の家で仕事をする日だった。しかし今は、頭の中を十分に整理しなければならなかった。洋子の作戦がまとまりを見せないのは、子どもたちの動きがまったく掴めていないからだ。ここまで子どもたちの活動について、情報を掴んでいるのだから、子どもたちと接点を持って、確認することだってできる。

しかし洋子は、そうはしなかった。子どもたちに探りを入れないという約束を役員と交わしていたからというのも、当然の理由としてあったのだが、それだけではなかった。

聞いたからと言って、それを子どもたちが認めたからと言って、自分のやることは何か変わるのだろうか……という疑問が、何度も頭の中で繰り返し浮かんできたからである。相手を責めるためには、聞くことも必要だ。しかし、洋子がしたいことは、責めることではない。子どもたちに続けさせてあげることなのだ。続けられる環境、子どもたちが堂々と自分たちの主張ができる環境を整えることをしたいのだ。

通り抜けていく潮風に、何度も押し流されながら、洋子の想いは、漸くして着地点を見つけたのだった。

子どもたちに聞く必要はない。

子どもたちの想いを聞かなければならない人たちは、今日芸術地帯に集まる人たちなのだ。そして、子どもたちが想いを伝えなければ

ならない人たちも、今日集まる人たちなのだから。

洋子のすべきことは、今日、子どもたちを芸術地帯に呼ぶこと。それしかなかった。どうしても呼ばなければならない少年が一人いる。洋子は吉川に連絡を取り、佐々木への連絡を依頼した。その連絡の際、佐々木から息子たちに、この情報を伝えないと念を押してほしいと付け加えた。洋子が呼ばなければならない少年とは、佐々木の中2の息子であった。彼がこの活動の中で、どのような役割を担っているのかもわからない状況の中で、いわゆる名指しで呼び出しすることはできないと思ったのだ。では、他にどのような手段で、呼び出したら良いのだろうか……もう時間もない。

洋子は、太陽の位置が、さっきよりも西へと近づいたことに気づいた。急ぎ、書き込み途中のコメントを処理してパソコンの電源を落とした。芸術地帯へ行くための身支度と、夕食の準備に取り掛かった。

南風に乗せて、子どもたちのにぎやかな声が聞こえてきた。下校が始まったのだろう。もうしばらくすると、一度帰宅した子どもたちが、工作教室に参加するため、芸術地帯へと向かい始める。街のあちこちから、たいこ橋を目指す流れができる。

その海原を今日は、大きな魚が泳ぐように数台の車が通り抜けていくのだろう。

洋子たちは、査察団よりも一足早く芸術地帯に着いた。門の守衛室周辺には、中学生の姿があった。彼らは、洋子たちを探るように見つめていたが、誰も声をかけてはこなかった。

「海の小学校PTAです。今日こちらで行われる集まりに参加します。」

吉川が代表して名乗った。

中学生たちは何も言わずに門を開けた。洋子は思った。この中に佐々木の息子がいるのだろうか。いないとしても、たぶんリーダーである人物が、彼らに召集をかけたことには違いないだろうと思った。であれば、彼らはなぜ、私たちがここを訪れたのかは、理解しているはずであろう。洋子は、ネットショップ『何でもお絵かき』にコメントの書き込みをしてからここへ来ていたのだった。

はじめまして。

本日、午後4時 芸術地帯に区役所の査察団が来ます。待っています。

海の小学校PTA会長 波風洋子

彼らにどうやって知らせるか。洋子なりに色々と考えた。彼らを逃がすことになってしまいかもしれないという不安がないわけではなかったが、結局、自分が接触できる方法としてはこれしかなかったのだった。誰かに委ねることはしなかった。余計な情報が加えられることを避けたかったのである。彼らが来てくれることによつて、すべての関係者が揃うことになる。それは何より大切なことで

あると、洋子は考えていた。

中に入ってから順路は、山波まつりの時に来ているので、分かつてはいたが、今日は少し様子が違っていた。入口を入ると、左右に分かれて伸びていた廊下には、立入禁止の札がかけられていた。その代わりに、建物に入ったエントランスの正面にある、天井までのびた大きな扉が開いていた。夕暮れの赤みを帯びた日差しが、視界を遮っていて、扉の先がよく見えなかったが、心地よい風が肌を摩つていく感じから、扉の先には中庭があることが想像できた。洋子たち7人は、日差しのベールに包まれるように足を進め、中庭へと向かった。中庭には、改と土田がいた。

「どうぞ、こちらのテーブルへ。」

別のテーブルには、すでに着席しているグループがいた。洋子には見覚えのある顔であった。東の中学校PTA役員であった。お互いに会釈を交わした。しばらくして、山肌が、山の小学校PTAの役員とともに現れた。改や土田と何やら言葉を交わし、洋子に「よろしく」と声をかけると、隣のテーブルに着いた。ここは、中庭というにはとても広い空間だった。建物からは、大きな底が出せるようになっていて、多少の雨ならしのげそうである。その広さからか、隣のテーブルと言っても、小声で会話ができる距離にはなかった。そういう意味では、特に打ち合わせもしていない3校が、どう連携を取るのか……洋子には想像できなかった。成り行きに任せるしかなさそうだと思った。

正面玄関が騒々しくなってきた。どうやら、査察団が到着したらしかった。査察団は、すぐには来なかった。中庭を囲む建物の中を移動していくのが見えた。何を調べているのだらう。何人くらいの子どもたちを収容できる広さだらうか、それから、どんな設備や備品

があるか、そんなことを確認しているのだろうか……いずれにしても、やはりハード優先か……と思わずにはいらなかった。

30～40分は経っただろうか。査察団の世話役のような職員が、着席するテーブルの場所や話す場所、マイクなどの確認をし始めた。もうすぐ、お出ましであろう。そこにいる誰もがそう思った。査察団の一行が、建物の見学を終え、中庭へと入ってきた。全員が着席すると、事前確認をしていた職員が、マイクを取った。

「皆さん、お待たせしました。こんにちば。お忙しいところ、ご苦勞様です。今日の査察にご同席いただくことになった皆様に、まずは、教育長直々に、貴重なお話をいただけることになりました。教育長、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。」

何とも変な紹介である。偉い人なんだとしても、身内である人間を奉ってどうする……そんな雰囲気の流れていた。

「皆さん、教育長の広田です。芸術地帯での実施を検討している教育事業について、特別にご説明したいと思います。特別にと申し上げたのは、まだ調査の段階で、決定ではないからです。この事業は、行政の考えだけで進められるものではありません。子どもたちの支援というのは、地域や学校、保護者の皆様のご支援とご協力がなければできません。特に今回の場合は、この芸術地帯の皆様のご理解をいただかないことにはスタートできません。」

この調子では、長く意味のない話が続くと、洋子は思った。それもいつものことではあるのだが。

「そもそもこの事業は、小中学生を対象に実施する文科省で定めた教育プログラムに当たるものです。総合学習の枠内で行う、学校主

導型の体験授業であり、具体的には、子どもたちによる模擬会社の設立、運営となります。全国で選定された都市が、この研究課題に取り組むための予算化も決定しています。山波市も、その中の一つとして取り組むことになりました。山波市は、長い歴史の中で多くの芸術家を支援し、排出してきました。多くの芸術家が愛したこの街で、芸術の素晴らしさに触れ、生活できるということは、子どもたちの豊かな心を育てる環境としては、非常に恵まれています。しかし、芸術も支援できる財力によって支えられています。子どもたちが、芸術の育つ街、山波市を未来に向かって、どのように導いていけば良いのかということを、自分たちが考え、力を出し合い、築いていくことを、ぜひ学ばせたいと考えるのです。そのためには、できるだけ無駄を省き、効率よく、小中3校が連携して行える場所を選定し、体制を整えることも重要になってきます。そうしたことから、我々は、今日こうしてここへ来たのです。どうぞ、ご協力をお願いいたします。」

「教育長。ありがとうございました。次に、山波市長に、大変ご多忙の中、お越しいただいておりますので、ご挨拶をいただきたいと思います。市長。よろしくお願いいたします。」

司会者の声に、市長はマイクをとった。

「皆さん。こんにちば。日頃は、市政へのご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。先ほど、教育長より話をした通りです。子どもたちの教育に対する質は、非常に重要課題です。国の決めたことだから、実施するというものではありません。なぜ、子どもたちに必要なのか、必要であるためにはどのような工夫をすべきなのかを、十分に検討し計画する必要があります。山波市が、首都圏から離れた場所にありながら、なぜ、教育水準を高く保っているのかと言えば、昔から多くの有識者が、この街を愛し情熱を注いで、

街を育てる土壌を作り上げてきたからです。そして、その土壌に相応しい人々が、この土地を受け継いできたからです。ですから、私たちは、この土地に育つ子どもたちを、未来の日本を背負う人材として送り出す義務をも与えられていると言っても過言ではないのです。子どもたちの未来のために、私たちは、多くの力を結集し、教育活動に従事していきましょう。」

やっと山波市長の話が終わった。教育長と市長の話を聞いて、ここにいる人たちは、何を思っているのだろうか。洋子は思った。決して間違っていることは言っていない。だが、もうこの芸術地帯で模擬会社を設立して運営を子どもたちにさせることを決めてしまっているのではないか……。それは見学をして決めたのでもなく、ここへ来る前から決まっていることなのではないか。それが本当に子どもたちのためと言えるのだろうか。

「それでは具体的な事業内容について、ご説明をさせていただきます。」

司会の職員が言ったところで、山肌が手を揚げた。

「はい、なんでしょう。お名前を言ってからお話ください。」

「はい。山の小学校PTA会長の山肌と言います。」

「どうぞ。」

「模擬会社を設立し運営を子どもたちに任せるというお話ですね。先ほど、学校主導でおっしゃいましたが、聞くところでは、完全に行行政主導の事業ではありませんか。私たちは、今始めて事業についての説明を受けました。にも関わらず、事業の具体的な取り組み

みについて、まとめられているのはおかしいと思います。やらなければならぬからやる。というようにしか感じられません。子どもたちのため、子どもたちのために言いますが、模擬会社は、今までと違って、一体何を学べるというのですか？これ以上、日常を壊して、イベントを増やすのはやめましょうよ。」

査察団の一行は、ただ黙って山肌の話聞いていた…いや…聞こえていたのかと思うくらいに、平静であった。

「山肌さん。貴重なご意見をありがとうございます。これから、計画を立案していくのに、大変有効なご意見です。」

今度は、東の中学校PTA会長の手が上がった。

「小中連携は、大事なことだと思います。しかし、子どもたちには何を求めているのでしょうか。異年齢の交流ですか？今でも、交流はありますが、小学校1年生から中学3年生までというのは、著しい成長を成す時期です。自分自身の心身の安定を測るのも大変な中学生に、これ以上の課題を与えることは賛成できません。子どもたちの個性や自主性を育てると言っても、行政が主導的に行う事業の中からは、育たないのが現実でしょう。なぜだかわかりますか？すべて枠にはめ込んだ教育だからですよ。」

これには査察団の一行も、少し表情を硬くしたが、すかさず、司会の職員が取り繕うように話し始めた。

「またまた、貴重なご意見をいただきました。確かに、私も行政機関は、長期的な展望も見据えながらの計画遂行に従事しておりますので、結果に結びつかないとするご意見があっても当然のことだと思います。まさに、反省課題が含まれておりますね。」

そう言つて教育長を目で追つた。教育長は顔を上げることなく、数回の頷きでその答えを返すに留まつた。

「お二人のPTA会長さんから、ご意見をいただきましたので、海の小学校のPTA会長さんからも、ご意見を伺つておきましょうか。何か、せつかくの機会ですからご発言ください。」

この司会の職員の言葉は、完全に洋子を馬鹿にするものだった。2人のPTA会長の抗議とも取れる発言を誤魔化すために、洋子に発言を求めたのだ。唯一の女性会長である洋子に、難しいことなど発言できるはずがないという心の内の現われだろう。しかし、洋子にとつて見れば、相手からわざわざ発言を求められたのだ。思いもかけないチャンスである。自分でも描くことができなかった最上級のシナリオが手渡されたようなものであった。

波風洋子の中に隠れている自分・美術用品店店主の絵心有・企画会社経営者の発見想子・そしてホステスのリヒが目覚めた。

そこにいる全員の視線が、自分に集まっていることを洋子は感じていた。そして無言で立ち上がった。洋子は、山波市長だけを見ていた。話をしなければならぬ相手は他にいなかったからである。市長は、洋子の視線を感じた。そして、洋子に視線を合わせたが、洋子の力に耐え切れなくなってしまったのだろうか、その目は洋子を通り越してしまっていた。それでも、洋子は視線を向けたまま、話し始めたのだった。

「皆さんは、子どもたちが、模擬会社を体験したいと思っていると思っ

っているのですか？子どもたちにとって、本当に必要な体験なの

でしょうか。」

市長は、何だといわんばかりに、息を抜いた。査察団の他のメンバーたちの肩の力も抜けた。

しかし洋子の次の言葉に、再度引き付けられることになったのだった。

「もし、子どもたちが、この街に子どもたちだけが存在する社会を、すでに作っていたらどうします？」

どよめきと笑いが起こった。が、次の瞬間に査察団の中から。

「そんなことが、起きているんですか？」

洋子の言葉を、茶化するような言葉が発せられたが、洋子は、冷静に話を続けた。

「子どもたちが、今何を考えてて、何に苦しんでいて、何から逃れなくて、何を求めて生きているのか、皆さんは考えたことがありますか？ 私たちは、すぐに子どもたちのためにと言います。でも、子どもたちが望んでいることだと何故分かるんでしょう。子どもたちに必要なことだと何故分かるんでしょう。私たちは、子どもたちの声を聞いているでしょうか。子どもたちを見ているでしょうか。」

査察団の一行は、渋い顔をしていた。それは、あからさまに、面倒だと言わんばかりの態度に見えた。

教育長がマイクを持った。

「貴重なご意見ですね。しかし……我々は、子どもたちのために、教育をほどこさなくてはならない役割を担っています。文科省で定めている教育計画は、長年の統計と社会情勢を見極めた上で打ち出されたものです。確かに、子どもたちの心の問題は大事だが、成長するための課題や題材を与え、その中から、自分にあつたものを見つけさせたり、忍耐を学ばせることも大切です。子どもたちの氣に入るようにするのが、教育とは思っていません。」

教育長はさらに。

「皆さんは、子どもたちが、大人の自由になるものと勘違いしていませんか。子どもも一人の人間です。小さいけれど、私たち大人と同じように、自分の力で生きている人間なんです。」

「会長さん。少し感傷的なお話ですね。今日の集まりでは、ちよつと議論すべきものではないように思います。お気持は、十分、市長にも教育委員長にも教育長にも届いたものと思いますよ。」

司会の職員は、話を終わるように促したのだった。

「そうでしょうか。この事業を進める上で、子どもたちの実態を知り、対策を講じるのは、何より重要なことと考えますが。」

洋子は話を続けた。

「では、お伺いしますが、子どもたちが作り上げている別の社会とは、どのようなものなのですか？あなたは、その別の社会というものの実態を掴んでいらっしゃるということですよ。お聞かせください。」

少し苛立ったように、教育委員長が口を開いた。

「はい。あります。皆さんは、子ども銀行の存在をご存知ですか？」

会場は、騒然となった。洋子はその声をかき消すかのように、声のトーンを少しだけ上げて、話し始めた。

「その銀行は、私たちが日常的に使用している通貨と同じもので運営されています。現在の預金高は、およそ1000万円ほどだと思われます。」

「何だって！」「本当なのか！」

「はい。間違いありません。ただし、銀行という名称ですが、金融業として運営されているわけではありません。社名が株式会社こども銀行という会社組織になっていて、口座は。×銀行にあります。」

「どうゆうことなんだ……」

査察団だけではなく、そこにいる全員が大きな驚きに包まれていた。洋子は、まるで会議での報告事項のように、冷静に事実だけを話していた。

「子どもたちは、ネットショップ『何でもお絵かき』を運営しています。お礼状に絵を描きなさい、おじいちゃんに絵を描いてプレゼントしてあげて、夏休みの宿題どうしよう……と言った大人の要求と子どもが描いた絵は価値があると決め付けているエゴから、自分たちが逃げたいという思考から始まったことだと思いますが、今では、大人の利用者も少なくないようです。嫌がる子どもに描かせる手間を考えれば、そこそこの絵を買えるのであれば、その方が助かるということでしょう。」

「どのようなシステムなんだね。」

査察団の一人が尋ねた。

「まず、子ども銀行に入金します。入金されたことがネットショップで確認されると、1円＝1ポイントに換算され、ネット上での買い物が可能になります。入金手続きが、会員登録に等しい手続きであると捉えていただければよいと思います。」

「そんなことが公に行われているのに、なぜ気がつかなかったんだ。学校の先生は、子どもたちの異変を把握できていなかったという証拠じゃないか。保護者も保護者だ。自分の子どもが何をしているのか、今の親は把握できないのか。」

憤りの声が、教育長から上がった。自分自身の責任を回避するための発言だったのかもしれないが、効果的な発言とは誰も取らなかった。重苦しい空気が、中庭を包んでいた。しかし洋子には、もう言葉を慎むつもりはなかった。

「教育長。その通りです。私たちは何をしていたのでしょうか。子どもたちのためにという合言葉を交わし、子どもたちのために何をしてきたのでしょうか。子どもたちの事も分からないのに。子どもたちの事が分からなかったのは、私たちが子どもたちを見つめていなかったからではないでしょうか。今からでも遅くはないでしょう。子どもたちを見つめてみませんか。子どもたちの言葉に耳を傾けてはみませんか。」

査察団からは、反発の声は返ってこなかった。重かった空気の層から淀みが消えていくように、軽く呼吸ができるようになっていた。

洋子は、門のところに集まっていた子どもたちが、まだこの芸術地帯のどこかにいると確信していた。

「子どもたちは、今ここに来ています。ぜひ、子どもたちの話を」

そう言ったところで、正面玄関から中庭へと続く出る扉が開いた。

扉から、大勢の子どもたちが、中庭へと入って来た。山波市には、こんなに子どもがいたのかと思わせるほどの人数だった。その先頭には、保護者の佐々木の姿があった。

「皆さん、私は海の小学校と東の中学校の保護者です。今、海の学校のPTA会長が説明したことは本当です。そして、一番そばにいて、自分の子どもたちが、それに関わっていることを気づくことが出来なかった保護者です。子どもたちが、何故こんなことをしたのか、実はまだ私も知りません。息子に聞いたのですが、息子は皆さんにお話するまで、私にも理由は話さないと言い張ります。この子どもたちは、皆さんに話をするために集まったようです。ぜひ、お時間をください。お願いします。」

佐々木の言葉を、そこにいる人々がどのように受け止めたのかはわからないが、洋子は納得できなかったのである。

「佐々木さん。子どもたちは、あなたがお膳立てをしなくても大丈夫でしたよ。自分たちだけで、私たちに、十分に話ができるはずですよ。」

「佐々木さん。会長の言葉、お分かりになりましたか？ 私たちは、子どもを信じてあげられない大人だったんですよ。私たちが、そのことに気づかない限り、子どもたちの声は聞けません。子どもたちは、あなたが思っているより、ずっとずっと大人なんですよ。」

吉川の言葉には、佐々木を擁護せずにはいられないという気持ちも働いていたことが受け取れた。

佐々木は無言だった。しかし、その姿は、もう子どもたちの先頭からは姿を消していた。しばらく沈黙の後、佐々木の中2の息子が話し始めた。

「僕たちは、子ども帝国を創るつもりでした。子どもたちだけが生きる国です。」

想像もしなかった言葉に、そこにいる誰もが、声を発することが出来なかった。

「悪の帝国ではありません。バーチャルな世界に帝国を創りたかったわけでもありません。この山波市に、子どもたちだけで居られる場所を創るつもりだったんです。そのために、僕たちがしなければならなかったのは、お金を持つことでした。だから、ネットショップと子ども銀行を作りました。お金が集まったら、この山波市の地下に、子ども帝国を創ろうと思っていました。昔、山波の街の地下には、もう一つの小さな山波市があったという噂話を聞いたことがあったので、その地下の街を探すつもりでした。」

佐々木の息子の表情は、本気であった。

「計画は思った以上に順調に進んでいました。ところが、この計画に参加する子どもたちが増えていくと、情報も漏れ始め、連絡も正確に伝わらなくなって、一人ひとりの動きもつかめなくなってきてしまったんです。そして、恐喝事件のウワサが流れ、大人たちが気づき始めたんです。」

子ども国家という想像もしていなかった話に、何と言って良いのか、言葉を見つけられる者はいなかった。佐々木の息子には、大人たち

の反応は関係なかった。大人たちを驚かすことが、目的ではなかったからである。彼は話を続けた。

「僕たちは……遊びじゃないんだ。自分たちが生きるところを探し始めたところだったんだ。知ってる？子どもたちにとって、ここは、とっても生きにくい世界だっていうこと……。」

「どういうことなんだ。私には、例えば難しくてよく理解できない。もう少し頭の固い私にも、わかるように説明してもらえるかな。」

教育長が具体的な理由を求めた。

「僕たちは子どもだけど、ロボットじゃないんだ……。大人には、僕たちの苦しいという言葉が聞こえないということに気がついたんだ。それならば、どうすれば良いのか考えたんだ。そして、逃げ出せばいいんだっていうことに気が付いたんだ。自由を手に入れよう！しかし、そのためには、お金が必要だった。社会から独立した子ども国家を創るためにはお金が必要だったんだ。」

「お金を手にしたら、自由は手に入ったのかな。」

山肌だった。

「完全な自由はないさ。でも、それは当たり前なんだ。大人の社会で生活をして、大人に気づかれないようにしているんだから、完全な自由は手に入らないよ。でも、小さな幸せと喜びは見つけた。」

「そうか。でも、子どもがビジネスをするなんてことは許されないよ。」

「そうよ。親に内緒で。しかも、ダミー会社のようなものだもの。」

「しかし、今の子どもたちというのは、インターネットやゲームで、脳がロボット化してしまっているんじゃないか。我々の常識では計り知れない、困った状況だ。」

「この後始末は大変そうだ。」

一人が批判的な意見を述べる始めると、他の大人たちも、それに同調する意見を並べ始めた。このままだと、子どもたちは真意を述べるのを止めてしまつたろうと洋子は思った。その時であった。

「皆さん。ちょっと待ってください。まだ、子どもたちの説明は終わっていないかった。私は、子どもたちが、なぜ自由を手に入れることにこんなに必死になったのか、知りたいと思う。子どもたちの話を聞きますか？」

山肌の言葉に、不満そうな顔はあちらこちらに見受けられたが、静かになった。

そして山肌が子どもたちに促した。

「聞かせてほしい。君たちの思いのすべてを……。」

山肌に促され、佐々木の息子は、静かに続きを話し始めた。

「僕たちをロボットにしているのは、大人たちだ……僕たちは、生まれてから大人の考えている子どもとして生きてきた。大人には、子どものイメージというのがあるんだ。そのイメージに合わない子どもは否定されてしまうんだ。何度も…何度も…。そのうちに僕たちは、自分というものが分からなくなってしまふ。そんな僕たちに大人たちは、自分の将来についてどう考えてるの？とか、もう子どもじゃないんだから……って言うんだ。僕たちは、自分なりにいろいろな事を考えている。何が得意で、どんなことが苦しくて、どんなことを考えているのか……。」

佐々木の息子の言葉が留まったように感じられた…佐々木の息子の横に、中学生の女の子が歩み出た。

洋子は見覚えがあつた。彼女は、山波まつりで中学のパトロールをまとめていた中学生に間違いなかった。彼女は、少し影のある女の子ではあつたが、理解力と指示力はとてもあつて感心させられたので、よく記憶していた。

少女が話し始めた。

「大人はいつでも、あなたたちのためというの。しかも、私たちの経験からと付け加えるの。そうやって、私たちの口封じをして、私たちの邪魔をするの。だか…私たちは、この社会に自分たちの自由を見つけられなくなってしまったの。子どもたちの国家を創ろうと思ったの。だから、そのために資金を集めなければならなかったの。」

最初は、自分たちのお小遣いを持ち寄った。でも、そんなにたくさん
の資金なんて集まるものじゃなかった。それで事業を起こすこと
を考えたの。」

少女は子ども国家の創設についての経緯を説明した。

「子ども銀行の口座って、どうやって開設したんだい？」

山肌が尋ねた。

ここまで説明を受けても、誰もが疑問に思うことだった。

この質問には、佐々木の息子が答えた。

「会社なんてない。僕が子どもの頃、お父さんが手渡してくれた通
帳の名義が『株式会社 子ども銀行』だったんだ。まさか、使うこ
とはできないだろうと思って、銀行に行って試してみたら、使えた
んだ。これには僕自身が一番驚いた。でも、こんなラッキーなこと
はないと思ったんだ。早速、みんなに話して、ネットショップの構
想を練り始めた。ヒントになったのは弟の言葉だった。弟はお母さ
んに先生へのメッセージカードを描くように言われていた。絵を入
れて描かなければならなかったんだ。「あーあ、メッセージカード
なんて書きたくないな」。誰か、代わりに描いてくれないかな。だ
って、誰が書いたって、相手にはわからないんだよ。どうせ描くな
ら、自分の描きたいものを描きたいよ。」そう言ったんだ。自分で
も覚えがあったよ。親の見栄や都合で嫌々書かされたこと。きつと
そんな子どもたちはたくさんいると思った。そして、何でも お絵
かきを始めたんだ。」

佐々木の息子もまだ中学生である。彼なりに、言葉を選んで説明し

ていることは、想像できた。

「だいたいのことは分かった。しかし、どんな理由を並べてみても、こんなことは許してはおけないよ。直ちに、子ども銀行もネットショッピングも閉鎖しなければ。」

教育長のその発言に、司会の職員がマイクをとった。

「そうですね。これは行政の方で対応します。児童相談所にも相談する必要があると思いますので。」

子どもたちから声は聴こえてこなかった。

洋子は、行政に任せてしまつては、決して良い結果を得られるはずがないことを確信していたのだった。何とかしなければ……。洋子は何も言わずに立ちあがった。誰もが「なに？」と思った。

「皆さん、子どもたちの声が聞こえなかったのですか？子どもたちは、何と言つてましたか？自分たちの国を作りたいと言つたのですよ。この社会に、望みがなくなったと言つたのですよ。そう考えさせたのは誰ですか？私たち大人なんですよ。何故、子どもたちに「ごめんなさい」と謝ろうと思わないのですか？子どもたちは、ゲームやコンピュータの影響から、別の世界を創るという発想になつたのかもしれない。この社会に対して、不満があるのなら、それを逃げずにぶつけるべきだったのかもしれないのに。でも彼らに、そんなふうを考えさせたのは誰ですか？この社会です。つまりは、私たち大人じゃないですか。私は、子どもたちには、今のまま続けさせるべきだと思います。彼らには、その覚悟があるはずですから。」

洋子は言った。

この洋子の「続けさせるべきだ」という発言には、誰もが驚いた。最初に口を開いたのは、海の学校 校長の金城だった。

「私も、続けさせることに賛成します。」

どよめきが起こった。

「私が、賛成をしてはいけない立場であることは、十分承知の上での賛成です。子どもたちと日々接していて思うんですね。子どもたちは、大きな力ゴで飼われている二本足の動物だと。せめて羽をつけてあげたいと。もう、こんな教育を続けるのは、やめませんか。」

「何を言っているんですか！立場をわかっていらっしゃるのですか。ただでは済まない発言ですよ。」教育長は、そう言うのが精一杯だった。

「私と金城先生は、子どもたちのためにしなければならぬことを考えてきました。保護者と教職員、つまりは大人が変わることなんですよ。子どもたちは壊れていってしまうんですよ…このままでは。」

洋子の言葉に、そこに集まった人々は、ただ黙っているしかなかった。

その時だった。正面玄関へと続く扉とは、ちょうど反対側にある扉が開いた。細く弱い西日が差し込んできた。それが太く強くなっていくと、一人の男性の姿が、扉の向こうから現れた。

洋子も、そこにいた誰もがその姿に驚いた。

男が口を開いた。

「芸術を売り物にしなければならぬ悲しみがわかりますか？それが、分かれば、子どもたちの悲しみがわかります。」

そこにいたのは山肌だった。誰がなんと言おうと……それは山肌だった。しかし、隣のテーブルには山肌の姿があった。山肌は一卵双生児だったのだ。洋子のスナックに、初めに現れたのは、芸術家の山肌で、二日前に現れたのは、PTA会長の山肌だったのだ。

「君たちは、双子だったのか。」

教育長が尋ねた。

「はい」

PTA会長の山肌研学が答えた。

「君たちは、私たちを騙して活動をしていたというわけか。」

「いいえ。私たちは、自分たちのことを隠して生活などしていません。今までは、公の場で、二人一緒にいる必要がなかっただけです。」

今度は芸術家の山肌遊学が答えた。

「では、私たちが勝手に、そう思っていただけだと言いたいのかね。」

教育長は苛立ちを隠せないでいた。

「僕たちは知っていました。この芸術地帯のメンバーは。みんな知っていました。でも、双子だということを、いちいち説明しなければならなかったのですか。そうしないことで、嘘をついていたことになってしまうんですか。だとしたら…ここにいる人たちはみんな嘘つきだらけだ。」

佐々木の息子の言葉に、誰も返す言葉が見つからなかった。

洋子は、祖母から祖父の話や自分の他の愛人の話を聞いていたが、自分以外の愛人たちが、この土地を出て行った後の話は、ほとんど聞いたことがなかった。しかし、そのうちの一人に、双子の子どもがいるらしいことは、聞いた記憶があった。まさか…その双子が…山肌なのか。もしそうだとしたら、祖父はまだ、この山波に生きている。洋子は、そう思わずにはいられなかった。

「提案します。行政の皆さんは、今日、模擬会社事業のための視察を目的に、ここへいらしたのだしたね。子ども銀行とネットショップの存在が分かってても、模擬会社の事業を進めようと思いますか？まだ、模擬会社が子どもたちに必要だと思いますか？私は、模擬会社ではなく、本当の会社を起業させ、運営させるべきだと思います。それが出来ないのなら、通常授業の充実を図る方が、ずっと子どもたちの役に立つと思います。」

吉川が続けて発言した。

「子どもが会社を起業し、運営する方法は、市の条例規定で定める

ことが出来れば、実施可能なはずだと思います。」

「私たちが変わらなければ、子どもたちは変わりません。子どもたちの覚悟に応える責任が私たちにはあります。」

山肌研学が言った。

「そうは言ってもですよ。そんな簡単に受け入れられるようなことじゃない。我々が立案したとしても、議会に諮らなければなりませんし、文科省の方針から逸脱するわけですから、どう理解してもらうか……。」

司会の職員は、重たそうに頭を抱えてしまった。

「海の小学校 金城校長。」

「はい。」

「あなたは本気ですね。」

「海の小学校 波風会長。」

「はい。」

「あなたは本気ですね。」

「山の小学校 山肌会長。」

「はい。」

「あなたは本気ですね。」

「芸術地帯の山肌遊学さん。」

「はい。」

「あなたは本気ですね。」

そう問いかけたのは市長だった。

それぞれが、その問いかけに真剣な眼差しで頷いた。山波市長は、スーツの襟を正し、すべての人を見渡せる場所へと移動した。

「皆さんに賛同してもらいたい。西の公園を、子ども国家にする。管理・運営を、子どもたちで法人化した会社に任せることにする。法人化、国家の制度化に向けては、皆さんの支援が必要になるでしょう。子どもたちがすることです。私たち大人が理解し、協力しましょう。」

市長の発言に、査察団一行はざわざわし始めた。しかし市長は構わず話を続けた。

「私は、昔のこの町を思い出しました。この土地を愛し、芸術を愛した医師がいたことを。山波に、海と山が共存することの素晴らしさを提唱し、多くの芸術家が育つ環境と条件を整えた。だからこそ、今日があるということ。私がしなければならぬことは、人を育て、次世代に繋げていくことだと思います。そのためには、ここにいる子どもたちを育てなければ。」

「市長。こんなことを宣言されては、大変なことになりますよ。」
教育長だった。

「そうですよ。議会が納得するわけがありません。」

司会の職員だった。

しかし市長は言った。

「大変の何が悪い。」

そして、さらに。

「中学生の諸君、私は本気だが、君たちはどうだ。」

「もちろん本気です。」

佐々木の息子が答えた。

「みんなもかな。」

「はい。本気です。」

口々に答える子どもたちの目には、希望という輝きを放っていた。

渡道が我慢できないと言わんばかりに。

「子どもたちの瞳の輝き、皆さん分かりますか？子どもは、自分で輝きを失っていくんじゃないんです。私たちが、輝きを失わせてい

るんです。私は市長に賛同します。」

渡道の言葉に、佐藤が続けた。

「私も賛同します。日本は便利さばかりを追求して、子どもたちをじっくり育てる環境がありません。その場しのぎばかりです。変わらなければ

「私も賛同します。いい学校に入って、いい仕事に就くことだけが幸せではありません。一人ひとりの力を伸ばせる教育が必要です。」

名九だった。

「私も賛同します。やる気になっていく子どもたちの気持ちは大切にしなれば。やる気にさせることがどんなに大変なことか、みんな知っているはずですよ。」

山田らしい発言だった。

「私も賛同します。山波の子どもたちは、山波の未来です。育てなくてはならないと思います。」

山北だった。

そして最後に吉川が発言した。

「机上の議論は、もう必要ないでしょう。法律は守るためにあります。でも、作ったのは誰ですか。私たちは、自分たちを幸せに導く一つ的手段として、法律を作っただけです。苦しめたり、束縛するものではないのです。私たちは今、子どもたちから、勇気の大切さ

を学んだとは思いませんか。私は賛同します。」

「賛同します。山の小学校PTAとして賛同します。」

PTA会長の山肌研学だった。

ずっと、黙っていた改が、話し始めた。

「賛同します。僕は、子どもたちの動きを一番初めに気付いた大人だと思います。でも、子どもたちのために、自分が何かをしようという勇気が持てなかった。何をするば良いのかが分からなかった。少し前まで、子どもだった僕なのに、子どもたちのためになることが分からなかった。でも今やっと、自分のすべきことが分かった。子どもたちの声を聞くことだったと。だから、僕自身にも、もう一度、子どもたちと向き合うチャンスがほしい。半人前の芸術家として……。」

新座も与野も、賛同の意思を示すかのように、改の肩に二人して手を置いた。

自然と人々の目は、山肌遊学へと向けられていた。遊学は、ここ芸術地帯では神のような存在であった。誰もが、遊学から出てくる言葉に期待した。

「山波の芸術は、昔から結ぶ力があると言われて来た。しかし、結ぶ力を人に宿そうとしただけだ。それに気づいていたのは、子どもたちだけだったのかもしれない。山波の芸術は人なんだ……。だから、同じものは2つとない。僕と研学が別の人間であるように。」

西の空は、紫色の光を送り出していた。人々はその光のに照らされ

ていた。しかし、誰一人不快感を表しているものはいなかった。答えが決まっていることは明らかだった。

「それで……どうしましょうか。ねえ。賛同という感じ……という雰囲気のように……」

司会の職員は困惑していた。

「君は、これだけ話を聞いて理解できないのかね。決まっているじゃないか。子どもたちのためなんだから、決まっているんだよ。」

教育長は言った。

「ということは、どういうことですか？」

教育長がハッキリ言いきれないことを嘲笑するかのように、司会の職員が聞き返した。

「私に聞くことではないだろう。気が利かないね。」

教育長は、そう答えるのが精いっぱいだった。

「まあ、もう良いじゃないか。これから、私の責任で、西の公園の子ども国家実現を目指します。」

市長が宣言したのだった。

この言葉が、中庭での会議の終了を告げたようなものだった。

子どもたちは、喜びを歓喜で表すのかと思ったが、予想に反して深

々と頭を下げて、山波市長や行政の人たちを見送ったのだった。もちろん、彼らの主張が通ったカタチなのだから、嬉しくないはずはない。しかし、自分たちの背負った責任と期待に相応しい姿は、歡喜ではなかったのだろう。そして、人々が次々と中庭から去って行ったが、子どもたちは、その場所を動くことなかった。一人ひとりに頭を下げて、大人たちを見送った。

洋子は人の流れに逆らうように、山肌研学と遊学へ歩み寄って行った。

「山肌さん。山波の芸術は、私たちの引き継いだ命が伝えるもの。大切に育てて行きましょう。」

研学も遊学も、何も答えなかった。

研学が手を重ねるよう求めた。3人だけの円陣ではあったが、トライする気持ちを確認しあうには、十分な気合を分かちあった。言葉のないまま、洋子は中庭を後にした。

芸術地帯を出て、緩やかな坂を見下ろすと、そこには6人の役員たちが待っていた。

山田が手を振っているのが分かった。洋子は、みんなのところへと急いだ。

「待っていてくれたの。皆さんお疲れさま。ありがとう。大きな仕事を抱えてしまったわ。ごめんなさい。」

「会長。悪くないですよ！PTA」

山田が言った。

他の役員も、微笑みながら頷いているように見えた。

「さあみんな帰らなきゃ。子どもたち待ってる！行きましょ！」

「会長。失礼します！」

「お疲れ様です。」

皆、足早に帰って行った。その中で一人が足を止めた。吉川だった。吉川は、洋子の方に向き直って、戻ってきた。

洋子は、ちょっとした緊張とともに足を止めた。

「会長」

吉川にしては、少し大きく跳ねるような声だったことに、洋子は驚いた。

「会長。きつと…波風洋子率いるPTAは必要です。PTAますます格好良いきましょ！それじゃ。」

そう言って吉川は、再び歩き始めた。洋子に背を向け歩き出した吉川は突然立ち止り振り、そして、胸の前でボールを持つように両手を構えた。吉川は、今まで見せたことのないような、いたずらをする子どものような表情でサーブを打った。

洋子はそのボールをしっかりと受け取ると、吉川は心からの微笑を見せた。

洋子と自分の気持ちを確認したかったのだろう。それは洋子も同じだった。

それは、吉川から洋子への始まりを知らせるエールだった。

その夜、研学と遊学の姿はスナックにあった。そこには、洋子のリヒとしての変わらぬ日常が訪れていた。心地よい言葉が必要としない時間が流れていた。3人は共有できる何かを感じあっていたのだった。

9月の山波市議会で、西の公園における子ども国家創設に関する事が可決された。

4つの家と4つの顔を持つ女……波風洋子。

彼女のことは気になってしまう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9252k/>

波風洋子の活躍と秘密

2010年10月10日21時54分発行